
家庭教師ヒットマンリボーン 一宵の口

Pety

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリボーン 一宵の口

【N
コ
ー
ド】

N
1
2
7
3
X

【作者名】

Pety

【あらすじ】

生まれる前より自我を持ち、それ故に生まれぬ事こそ至高の安らぎと断じていた夜月満流。しかし、それでも生まれるのが命。世界に引きずり落とされた末に、彼女は思う。またあの場所に帰るその日まで、どうせなら暇潰しにでも生きてみよう。と……。だからこそ、求めるのは娯楽・悦楽・快楽・常楽。一回だけの人生、楽しまなきや損だよ。ね……。その手に宿るのは灰色の炎。破壊の礎に選ばれた少女が、出会う仲間達にもたらすのは希望か、それとも……。と。

処女作です。 思いつきです。 暇潰しです。 そして
駄文です。

上記で明らかですが、作者は中二病です。 そして続くかどうかか
なり不安です。 作者の滑稽な努力を、暖かく、もしくは生暖かく、
あるいは冷めた目で見守っててください m (_ _) m

プロローグ（前書き）

どうも初めまして、P e t yと申します。

初めての小説制作で、文才皆無なうえに何となくで始めた作品なのでお目汚しにしたいと思います。何卒ご容赦くださ〜い。

プロローグ

初めて目が覚めたのは暗闇の中・・・

欠片程の光すらも無い黒一色・・・

自分の体すら見えない闇の中で・・・

今にも途切れそうな薄い意識で・・・

ただ暗闇の先を見据えていた・・・

気が付けばどこからか声が聞こえていて・・・

それは独り言であつたり・・・

時には私に語りかけていた気もする・・・

一人だった声が二人になって・・・

時には三人だったり、もっと沢山だったり・・・

とにかく多くの声を、闇の中で聞いていた・・・

うるさいうるさいうるさいウルサイウルサイウルサイウルサイ・・・

喋らないで欲しい・・・

語りかけないでほしい・・・

私は静かでいたいから・・・

私を包む闇の中で・・・

ただ静かに包まれていたいから・・・

これ以上私の安らぎの世界を乱さないでほしい・・・

私は闇の先にいる者たちに訴えようとする・・・

しかし何も言えない・・・

言えないなら体を動かす・・・

見ることの出来ない腕が動いた・・・

闇の先に手を伸ばす・・・

何かに触れた・・・

すると何故かもっとウルサクなった・・・

静かにして欲しくてさらに動かす・・・

もっともっとウルサクナッタ・・・

・・・メンドウダ・・・

目を閉じる・・・

開けても閉じてても真っ暗な場所で・・・

必死に動かした手で耳を塞ぎながら・・・

いったいどれ位そうしていただろう・・・

突然私を包んでいた闇が蠢いた・・・

さらには今までで一番ウルサイ声が響いた・・・

声というより悲鳴・・・

頭が痛くなる・・・

何かに引き寄せられる・・・

安らぎの世界が悲鳴を立てながら激しく蠢く・・・

段々と悲鳴が近くなる・・・

目を開けて先をみると・・・

・・・光？・・・

・・・ありえない・・・

恐い恐い怖いこわいこわいこわいコワイコワイコワイコワイ

私はそっちに行きたくない・・・

この安らぎの世界から出たくない・・・

必死にもがいて抵抗する・・・

悲鳴がさらに大きくなった・・・

私を引き寄せる力も・・・

イヤだ・・・

やめろ・・・

放してくれ・・・

光は大きくなり続けて・・・

私は・・・至高の安らぎから引きずり落とされた

プロローグ（後書き）

なんのこっちゃって感じですね W W W W W W W W

プロローグなんで少し抽象的でもいいかな〜って思ったんでこんなふうになっちゃいました（＞▽＜）＞テヘツ

一話からは勿論こんな訳わからん文章にはなりませんのでご安心を

第一話（前書き）

さあ続いて一話目です。

プロローグの時点で「あっ、これダメだわつまんねえ」って感じ
でさよならされていそうで怖いです（（（；。D（（（（（

ではどうぞ。♪

第一話

安らぎから引きずり落とされてから五年が経った。

一年で歩くことを覚え、二年で話すことを覚え、三年で学ぶことを覚え・・

そして四年で・・・・・狩ることと燃やすことを覚えた。

脈絡がないのは仕方がない。

だって親がおかしいのだから。

最初は嬉しそうにしていたのに、年が重なる程、笑顔が恐怖に変わっていったから。

『死ね！ この化け物!!』

しまいには私を殺そうとまでしてきた。

ただでさえ煩わしい奴らだったのに、この一言で殺意が沸いた。

殺す？ お前らごときが、私を？

私を安らぎの世界から引きずり出しておきなারা？

その責任すら取らずに？

「ふざけるなってえの♪」

生かしておいたのは誰だか教えてやろう

生かされていたのは誰だか教えてやろう
もうとっくにコイツらの価値は無いのだから。

イタリアのとある森の中

「うゝおゝおい！ この先の集落かあ？ 例の「首狩り魔」が出た
つてのはあ？」

「そうみたいだよ、張り込んでた隊員の連絡も五分前に途絶えたし。
」

「まじ？ ししっ、たあんのしみ〜♪」

やたらと声の大きい白髪の男に、空中に浮かぶ赤ん坊、前髪で目が
隠れていてティアラを頭に付けた少年。

ツツコミどころしかない一行が早足で進んでいる。

「やっと尻尾をつかんだんだあ、しくじって逃がすんじゃないぞお？！」

「もちろんさ。ボクらがいつまでも手間取っている訳にもいらないしね。これ以上金にならない仕事の延長は御免だよ。」

「俺らの追跡半年も逃れるとか半端じゃねえもんな。」

「ったく！！んな厄介なヤロウを生け捕れなんぞ、うちのクソボスはまた面倒なことさせやがる！」

逃すなど言いつつ一番に気づかれそうな大声を張り上げ、歩く速度を上げる白髪男、その後ろについて行く赤ん坊と少年。その内森が開け、目的の集落が見えた。

「っ！！う、お、おい・・・こいつぁ・・・」

「ムムツ・・・これは・・・」

「ししっ・・・すんげえ・・・」

集落は既に廃墟となっていた。

家という家は全て燃え上がり、あちこちに死体が転がり、全体が血の海になっていた。

しかし、三人が息を呑んだのはそれが理由ではない。

彼らにとってはその程度は日常であり、立ち止まる理由にはならない。

なら何故とまったか？　それは――

「現物を見るのは初めてだが、不気味だぜえ。」

「幻覚の類だと思ったけど、そうでもないね。」

「なんかテレビの早送りみてえくだなあ」

ただ燃えているならばいい、その色が灰色でなければ・・・
死体があるのはいい、目の前で恐ろしい速度で腐って骨が見えていなければ・・・

少年が言っていたように、まるでテレビの早送りのように溶けて腐っていく死体。

いくら血まみれの日常を送る彼らからしても異常な光景だった。

「ここで考えても埒があかね、え、さっさと『首狩り魔』んとこいくぞお！」

「そうだね、少し興味も出たし。」

「ししっ、早く殺りてえっ♪」

「生け捕りだっつつてんだろうがあ！」

死体をよけて廃墟の中を進む一行、途中で自分らと似た服を着た骨があったが無視。

二分程歩くと広場に出た。

ここまでの道で見たのとは比べ物にならない程のおびただしい数の死体が積み重ねられ、その上にボロい布を纏った人物が座っていた。

顔は隠れていて見えず、長い濃紺色の髪が足元まで垂れ下がっている。

体全体が血まみれで、ボウッと空を見上げているようだ。

「ししっ、いたいた♪」

「こっちに気づいてない？ それとも・・・」

「んなもんどっちでもいい、うゝおゝおおおい！！ これやったのはテメエだなあ？！」

白髪の声に振り返る「首狩り魔」、心の中でだけ身構える一行。

「そうですよ～～？ 貴方達は誰ですか～～？」

予想に反し、間延びした声。

というより力の抜けそうなテンションで答える首狩り。

（この声は女かあ？ しかも体格見る限りベル並にガキじゃねえか）
（殺気も何も感じないね、本気でボクらに気づいてなかったみたいだし）

（早く殺りてえなあ、まだかよ）

「俺たちやあヴァリアーの人間だア、テメエに用があつてきたあ」
「うわあお？ ヴァリアーって言えばボンゴレの最強部隊でしたっけえ？ すんごい大物さん達に会っちゃいましたねえ～～～？」

可笑しそうにケラケラと笑う首狩り、死体の山を降りて三人の四メートル程前で止まった。

「それでご用はなんですかあ～～？」

「ウチのボスがテメエを生け捕りにしろって言ってんだあ、俺らと一緒に来い。」

「そうですか～～、ちなみに断るとどうなります？」

「力づくってことになるね。」

「最悪ここであの世行きだね、ししっ♪」

「そういうことだあ。」

案外すんなり事がはこびそうな雰囲気若干気が抜けそうになる三人

「へえ～あの世行きですか～～？ 貴方達がですかあ～～？」

「「「・・・はあっ？」」」

少女の一言で場に一瞬で緊張が、いや、殺気が充満した。

「うゝおゝおい、死にてえのかあ」

「いい度胸だね。」

「刻み決定♪」

各々が武器を構える、首狩りを除いて。

「いきますよお？ 頑張って生きてください？」

「武器はどおしたあ？」

「さっき壊れたんで、素手です。」

首狩りは手をヒラヒラと振って武器を持ってないことをアピールする。

「それなら。」

「さっそくバイビ〜♪」

赤ん坊と少年がそう言った直後、突然首狩りの足元から火柱が出現した。

間髪入れずに少年が火柱の中、首狩りがいた位置に向かって手に持った複数のナイフを一気に投擲した。

「ししっ、ハイ終了〜♪」

「拍子抜けだね。」

まったく反応せずにマトモに受けた首狩り、二人は勝利を確信したが……

「まだだあ！！」

「その通りです。」
「「っ!」?」

白髪が叫んだ瞬間、火柱の中から首狩りがとてつもない速さで飛び出し、一瞬で赤ん坊と少年の目の前に接近する。

「ムッ!」?
「やべっ!」!

慌てて距離を取ろうとする二人だが、既に首狩りの手が二人の眼前に迫っていた。

「まずは二人で……」

グウウウウ~~~~~グユゴゴゴオオオオ~~~~~

突然の謎の音により、場が静止する。

「「「は?」」」
「………あ……」

ドサッ

そして倒れる首狩り。

「うゝおゝおおい! どういうことだあ!」?
「知らないよ」
「死んだんかよ?」

全く動かない首狩りを見て、ゆっくり近づく三人。

「うつ……ううう。」

「「おっ」」

「は……」

「「は？」」

「ハングリ……ガクッ」

「「……」」

今度こそ気絶したらしい。

「……とりあえずアジトに運んだほうが良さそうだね。」

「そうだな♪ そんなじゃあスクアールよろしく。」

「うゝおゝおい！ 何でおれだあ？！ テメエがやれえ！！」

「やらないよ、だって俺王子だもん。」

さっさと帰る二人を、首狩りを肩に担ぎながら追いかける白髪男だった。

第一話（後書き）

どうでしたでしょうか？ 解りにくかったらすいません。

次回は主人公の名前出せたらいいな〜？

第二話（前書き）

二話目です。いつになったらスクとベルとマーモンは名前で表記されるんだWWWWWW

ではどうぞ。

第二話

暗闇の中にとくと心が安らぐ……

これ以上ない程に穏やかな気持ちでいられる……

でも、今のこの闇は一時のものでしかない……

あの日奪われてから、ずっと仮りそめの代用品……

現に今も段々と薄れて行く……

光にかき消されていく……

私を置いて、消えて行く……

「うつ・・・・・・・・うん・・・」

顔に差し込む光に私は目を覚ます。

「どこだよここ」

見回せば素人目にも金が掛かっていそうな広い部屋。
その窓際にある大きなベッドで私は寝ていたみたいだ。
めっちゃフカフカだ。

「とりあえず何があったんだっけ？」

たしかお腹が空いたから近くの集落にいつて

道端でチンピラに絡まれて

あまりの空腹にイライラしてたからつい殺っちゃって

そしたら周りがうるさくなって

警察とか呼ばれたら面倒だからとりあえず全殺して

その時上手く加減出来なくて食料も燃やしちゃって

途方にくれてたら変な三人組が来て

それで・・・・・・・・

「バトったんだっけ？」

駄目だ、三人が来た辺りから視界が霞んでよく見えず、さらには半分意識が飛んでた状態だったから記憶がぼやけて思い出せない。

「まあいっか・・・それよりもお腹すいた～～」

空腹だったのを思い出したら腹の虫が再び叫び始めた。お腹と背中がくっつきそうとはまさにこの事だ。

「っ！！・・・クンクン・・・こっ、これは!？」

ベッドの上で唸っていた私に突如として漂ってきたこの魅惑的な香り。

これは間違いなく・・・!!

「ご飯の臭い!!!!!!」

シーツを跳ね飛ばし、入口まで全力疾走、しかしドアの前で止まり、慎重にドアを開けて周りを見回す。

「またあの三人に出くわすとも限らないしね～～」

左良し、右良し、前良し、監視の気配も無し!

「それじゃあ、ゴー?」

臭いを嗅いで発生源を探索、目標に向かって駆け出す。

慎重に、かつ迅速に、しかし足音は一切出さずに走る。

「しかし部屋もそうだったけど、随分立派な屋敷だね。」

どうやらかなりの金持ちに拾われたようだ。

三人との会話を思い出せばここがどこだか解るかもしれないけど、今はそんなのどうでもいい。

とにかく今は、美味しいご飯を頂戴するべし！！

「ここか・・・」

目的の場所に到着、臭いはますます強くなり、それに比例して腹の虫どもが悲鳴の大合唱を始める。

断末魔の叫びに変わるのはもはや時間の問題だ。

「いざ！」

先程と同じく慎重にドアを開ける。

どうやら厨房のようだ、当たり前だが。

奥の方に人の気配がある、一人だけのようだ。

何か作っている最中らしく、鼻歌が小さく聞こえてくる。

「よし、好都合。さうて、お目当ての物はっど？」

部屋中を見回すと、ドアのすぐ横にある料理を運ぶワゴンの上に目標を発見。

「おおおおお~~~~~!!!!!!」

それはまさにヘブンだ。料理一つ一つが光り輝いて見える程の歓

喜が湧く。

スツツツゲェ！！ ヤベツ、我慢出来ないっ！ 頂きまゝす！！！！！！

「ガツガツうまうま・・・！！！！！！？ 何コレ超うめえー！！！！！！」

マジヤバイ！ 空腹は最大の調味料って本当だ！！

私の人生現在食欲の絶頂期やゝゝゝゝ！！

「いやあこんな美味しいご飯食べられるなんて、ここに来てラッキ―だったなゝゝ？」

「あらそう？ そんなに褒めて貰えろとアタシも作った甲斐があったわ？ まだまだあるからどんどん食べてね？」

「え、そうですか？？ それじゃあお言葉に甘え・・・・・・・・・・て・・・・・・・・・・」

私、誰と喋ってるんでしょうか？

頬を冷や汗を垂らしながら振り返るとそこには・・・・・・・・

顔先十センチにオカマの顔があった。

「ぎゃあああああ！！！！！！！！！」

「あああああ！」

「以上で終わりだあ。」
「……………」

少女が寝かされていた場所とは違い、豪華な家具が並べられた一室に二人の男がいた。

一人は首狩りに出会った白髪、スクアアロと呼ばれていた男。

もう一人は、大きな机に、同じく大きな椅子に腰掛けながら足を投げ出して手元の報告書に目を通していた。

常に不機嫌そうに眉を寄せ、睨むような目付きをしている。

スクアアロの口頭での報告が終わっても、しばらく沈黙が続いた。

「マーモンの幻覚が効かなかった・・・か・・・」

「そうだあ、燃えるどころか焦げ跡一つ付いていやがらなかったあ。ベルのナイフもかすりもしなかったみてえだしなあ。」

口を開いた男の呟きに、スクアアロが答える。

すると男は引き出しから一枚の紙を取り出し、スクアアロに差し出す。

「なんだあこれはあ？」

「入隊書だ、書いて自分で持って来させろ。」

「はあっ!？ そりゃあどおいう事だあXANXUSう!!！」

いきなりの話について行けないスクアアロが目の中の男、XANXUSに聞き返す。

「うるせえカス、さっさと行け。」

「んだとゴラァ!!！」

「・・・」

「シカトしてんじゃねええ!!!」

スクアーロが騒ぎ立てるが、XANXUSは無視し続ける。

「ちっ！ あとで必ず聞かせてもらうからなあ!!!」

一旦退くことにしたスクアーロは、捨て台詞を吐いて部屋を後にした。

目に見えてイライラしているスクアールが、ズンズンと音を立てながら大股で歩いている。

首狩りの少女の眠っている部屋に向かっている途中だ。

「終わったみたいだね。」

「ししっ ♪
どうだった？」

「お前らかあ。」

少女と戦った赤ん坊と少年、ベルとマーモンが向かいから歩いてきた。

「奴の見張りはどうしたあ？」

「ルッスーリアが見てる筈だよ。」

「見張りとかつまんねえし。」

[illegible]

「おい、おい、ルツスは奴の飯作るんじゃないのかあ？」

「
「
・
・
・
・
・
あ
つ
」
」

[illegible]

「う お お お お お い！！！！
 そんじや 誰も居ねえのかあ！！！！」

「そういうことになるね。」

「しししっ、失っ敗♪」

「言ってる場合かあ！ さっさといくぞお！」

走り出す三人（マーモンは飛んでる）、もし逃がせば面倒なことになるのは火を見るより明らかだ（主にXANXUSとかXANXU

SとかX
A
N
X
U
Sとか)

ものの十秒足らずでたどり着き、勢い良くドアを開ける。しかしベッドに目的の少女の姿はなし。

「くそがあ！」

「ホントに居なくなってやんの♪」

「マズイね。」

「まだそう遠くには行ってねえはずだあ！ 各部隊に通達して・・」
『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！！！！！！！！！！』

「「?！」」」

三人が部屋を出ようとした矢先、響きわたる叫び声。

女の声であることはかろうじて解るが、まさに断末魔のような恐怖がありありと感じ取れる悲鳴だった。

「しっ♪ これってあいつの声じゃね？」

「そのようだね。」

「厨房の方からだあ、ルツスと遭遇でもしたか。」

「なるほど。」

「あの Cama と バツタリ 出くわしたら 確かに 叫ぶかもな。」

何故か妙に納得しながらも移動し、厨房に到着。

勢い良くドアを開き、中へと入った。

第二話（後書き）

展開が遅いな（汗

もうちょい早く進めるように、そしてもう少し長く書けるようにしたい。

頑張ります。

次回こそは、次回こそは！

主人公の名前をだしてみせるっ！！！！！！

第三話（前書き）

眠いよゝ、瞼が重いよゝ。

誤字脱字注意報の二話目です。

第三話

「んもうっ！ 失礼しちゃわっ！！」

「本っ当に申し訳ありませんでした。」

厨房の床に土下座する私。

目の前にはいかにも怒ってますと言いたげに腕を組んで仁王立ちするオカm・・・ルッスーリアと名乗った人。

「百歩譲って叫んだのはいいわよ？ 私もちよっと驚かそうとしたわけだし。」

「はい・・・。」

「でもだからって顔面に裏拳かますのはやりすぎじゃない！？ 顔が陥没骨折するかと思ったわよ！？」

ルッス姐さんの（そう呼んでと言われた）顔に掛かってるサングラスは右半分が見事に砕け散っていた。

あまりの恐怖についコンクリを余裕でぶち抜ける位の力で殴ってしまった。

それをマトモに食らって気絶すらないこの人も大概すごいが・・・

「いやその・・・なんというか・・・条件反射で・・・」

「振り返りざまに人の顔面に裏拳叩き込む習慣でもあるの？ まあいいわ、いつまでも床に座ってないで立ったら？ それに、まだ食べるんでしょう？ さっきも言ったけどまだまだ沢山あるわよ？ ☆」

「え？ あ、はい。 いただきます。」

どうやら許してくれるご様子。

さすがルッス姐さん！ 心が広い！ まだよく知らないけどね？

美味しい料理の前では些末なことなど気にならないのだよ」

「そう言えばまだ貴方の名前聞いてなかったわね。」

「あ、そうですね。私は・・・」

ガチャッ

「うゝおゝおおいルツス！！ 奴はどこだあ！」

「あら？ スクアールじゃない、どうしたのそんなに慌てて。」

「（邪魔された・・・）・・・むしろむしろ・・・」

「しっっ、発っ見っっ♪」

「逃げたわけじゃなかったみたいだね。」

見覚えのある三人が入ってきて名乗り損ねた私は、とりあえず食べながら様子を見る。

「部屋に居ねえからこっちに来たんだあ！ それよりさっきの悲鳴はなんだあ。」

「私の顔を見た瞬間にいきなり叫んだのよ。」

「なるほどね、ところでその顔はどうしたんだい？ サングラスが割れてるけど。」

「裏拳かまされたのよ。」

「マジ？ しっっ、ナゝイス♪」

頭にティアラをのつけた少年が、ドヤ顔で私に親指をグッと向けた（髪で隠れて目は見えてないけど）。

「ナイスじゃないわよ！ 死ぬ程痛かったんだからっ！！」

「うゝおゝおい！ そんなことはどうでもいい、起きたんならテメエのことを話してもらおうかあ。」

「はあい。」

やっと話が進んだ、とつくに食べ終わってたし、美味しく頂きました？

「ええと、まず私の名前は夜月^{やづき}満流^{みちる}と申します。先月で六才になりました。」

「俺はスクアードだあ。」

「さっきも言ったけどルツスーリアよ、宜しくね？」

「僕はマーモンだよ」

「オレはベルフェゴール、ベルでいいぜ♪」

なんかこの人達と話してたら気絶する前のこと段々思い出してきた。

「その名前からして、君は日本人かい？」

「そうですよ。」

「何でイタリアに来たあ。」

「一人旅でゝす？」

「よく親が許可したわね。」

「許可されてませんよ？ 殺しましたから。」

「しっ、まじ？ 俺も殺したぜ。」

「うっとおしいだけですもんね。あんな奴ら。」

「同感♪」

このベルとは気が合いそうだね？

「それで、たしか皆さんはヴァリアーの人なんですよね？ そのボスさんが私なんかは何の用ですか？」

「そのことだが、今すぐこれ書いてボスんとこ持って行けえ。」

紙を一枚手渡される。

「何ですかコレ？・・・入隊書？」

「どうやらウチのクソボスはテメエをここに入れるつもりみてえだあ。」

「・・・・・・・・何故に？」

「んなもん俺が知るかあ。」

「どうせボスに教えてもらえなかったんでしょ？」

「ありえるね。」

「ハブられてやんの♪」

「うゝおゝおおい！！ぶっ殺されてかあ！！！」

四人が騒いでいる間に私は必要事項を記入していく。

特技などの一般的なプロフィールから始まり、暗殺経験、戦闘スタイル、武器、etc・・・

「出来ました〜？」

「随分早いね。」

「と言いかいいのかしら？そんなに即決しちゃって。」

「どうせ行くアテもないですしね〜、むしろ食い扶持が出来てラツキーみたいなの？」

「暗殺部隊を食い扶持扱いとか♪」

「まあいい、とにかくボスんところに行けえ。」

「了解です。」

道順を教えて貰い、ボスさんの部屋へと出発する私。

後ろの方から「殴られないように気を付けてね〜ん」とか聞こえてくる。

そんなに凶暴な人なんだろうか。

「ここか。」

ボスさんの部屋であろうドアの前で止まる。

「ヴァリアーのボスかぁ、どんな人だろう？」

思えば入隊書を書いてる間、四人が「またウイスキーを頭に投げつけられた」とか「机の角に顔面叩きつけられた」とか言っていたような気がする。

「入った瞬間頭ちょん切られるとかないよね？」

もしくは眉間に鉛玉ぶち込まれるかもしれない。
何故だろう、さっきから死のイメージしか湧いてこないんだけど。

「やっぱりここは秘策を使うしかないですね。」

秘策とはここに来るまでに思いついたちよつとしたイタズラみたいなものである。

普通に入れば何があるか分からない。

なら少しユーモアのある入り方をすれば多少は打ち解けられるのではないか、と考えた末に思いついた。

「よし、いざ行かん！」

目の前のドアをノックもせず勢い良く開ける。

「うゝおゝおおおおい！！ 邪魔するぞお！」

ガッシャアアン

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙の中、上を見ると。

私の頭上約60センチ程上にコップが激突の衝撃で砕け散っていた。中に入っていた酒や氷が四散している。

もし入ったのがスクアーロだったら顔面に直撃していただろう。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あゝ・・・・・・・・えと・・・・・・・・その・・・・・・・・」

痛いほどの沈黙に逃げ出したくなってきた。

しかしここで挫けるわけにはいかない、石のように固まっていた足

を気合で動かしてゆつくりとボスさんがいる机に近づいていく。

「すみません・・・えっと・・・スクアアロって人に言われて入隊書を持ってきたんですが・・・」

思わず低姿勢になってしまふのは仕方がない。

さっきからそれだけで人を殺せそうな目で一瞬たりとも目を逸らさずにガン見してくるのだから。

なんとか机の前にたどり着き、そつと書類を差し出す。

「・・・」

無言で受け取るボスさん。

こわいよ～～～～。

「おい。」

「はっ・・・はい?!」

やべっ、声が裏返った。

「この『灰色の炎』ってのはなんだ。現場でも何度か使ってたな。」

「あゝそれは・・・」

絶対聞かれるだろうと思っていたので、ありのままを話す。

「詳しい事は私にも解らないです。四才の頃に使えるようになって、普通の火なんかよりも遥かに良く燃えるので頻繁に使うようになりました。銃弾を防げた時にはさすがにビックリしました。しかも何でか私自信や私が身に付けてるものは一切燃えないんです

よね、なんという親切設計。」

話してる内に段々口調が砕けていってしまったのは仕方ない。
目上の人に対する態度なんて本当なら一分と持たないんだから。
今回は三分もった、素晴らしい程の新記録。

「そんな感じです、あつ、もしかしてそれで入れなくなったりとかは・・・」

「いや、むしろ好都合だ。 夜月満流、テメエは今日からココの隊員だ。」

「ほっ、有難うございます、よろしく願います。」

よかった、やっぱり有名な暗殺部隊は懐が深いな

「それと、テメエの存在はここ以外では非公開だ。 だが隊の中では幹部扱いにする。」

「非公開？ それにはどう言った意味があるのか聞いてもいいですか？」

「テメエの使い道はもう決まってる。 そのため素性を隠してもらう。 その時がきたら詳しく話す。」

「そうですか、了解です。」

「明後日から任務だ、あとはカス鯨に聞け。」

「わかりました、失礼します。」

カス鯨と聞いて何でスクアアロのことだと思ったのかは私にもわかりませへん。

ボスさんの部屋を出て、とりあえず厨房へと向かう。
すると向かいからルッスが歩いてきた。

「あら、満流じゃない。 無事でよかったわ。」

「はい、なんとか生還出来ました。」

「なら行きましよ、その部屋が広間なの、皆そこで待ってるわ。」

並んで歩き、広間のドアを開ける。

「皆〜、満流が生きて帰ってきたわよ〜☆」

「ただいま帰還しました〜?」

「おっ、お疲れ〜♪」

「無傷とはやるじゃないか。」

「天変地異の前触れかあ?」

「ヌツ・新入りか。」

ベルにマーモンにスクアール、それにどっかの戦闘民族の劣化版みたいな髪をした男がいた。

「皆改めて今日から宜しく〜、ところでそっちの人は? あっ、私は夜月満流だよ〜。」

ボスさんの威圧から開放された反動で一気に口調が砕けていたが気にしない。

「オレはレヴィ・ア・タンだ。レヴィでいい。」

「レヴィね、よろしく〜」

「それでお前はと言う扱いになったあ。」

「隊では幹部扱いらしいですけど、素性は非公開らしいですう〜。」

「どういことだい?」

「なんか私にやらせたい事があるみたいで、それまで秘密にしたいそうです。」

「随分変わってんな♪」

「そうですねえ〜。それで明後日から任務で、詳しいことはス

クアールに聞けって。」

「とりあえずクソボスに聞かなきゃなんねえ事が増えたなあ。任務については明日伝える、まずは隊員服をルッスに作ってもらええ。」

「じゃあサイズ計らないとすね〜。」

「それは大丈夫よ、見ればわかるから？ 明日には出来るから楽しみにしてね〜ん☆」

ルッスの発言にちょっと引いたのはどうやら私だけではないみたい。

「でもその前にあなたはお風呂に入ったほうがいいわね、忘れてるかもしれないけど返り血とかで結構見た目ボロボロよ？」

「あつ、そう言えば。」

「忘れてたのかあ。」

「その姿でやけに堂々としてると思ってたけど。」

たしかに羽織ってる布とかも血が乾いて黒くなってると、ほんの微かに臭う気がする。

「それじゃあ入らせてもらうね、場所はどこ？」

「案内するわ、こっちよ。」

「は〜い」

広間を出て風呂場に向かう。

「そう言えば着替えはあるの？」

「持ってるように見える？」

「ないわね〜、じゃあ服もいくつか見繕わなきゃね。明日になるから今日はとりあえずアタシの代えのシャツと短パンでいい？」

「いいよ〜」

ルッスがドアの前で止まる、着いたみたい。

「ここよ、着替えは置いておくから。 あっ、それに髪を縛るものもいるわね。 その長い髪邪魔になるわよ？」

「慣れてるから大丈夫だけど、濡れると確かに邪魔かな。 じゃあ適当にお願い。」

「了解よ、じゃあゆっくりするといいわ。 また後でねーん」

手を振りながら去っていくルッス。

やけに足取りが軽いのはなぜだろうか。

「それじゃあゆっくりさせてもらいますか、ついさっきまで寝てた筈なのにもう疲れたよ。」

第三話（後書き）

XANXUSの説明丁寧すぎじゃね？
W W W W W

書いたあとに気づいた、ウチのボスがこんなに親切なわけがない！

第四話（前書き）

ついに主人公の戦闘シーン！！

第四話

「いやゝさっぱりしたゝゝゝ?」

え? 入浴シーンはどこだった?

素人作者にサービスシーンなんて表現出来るとでも?

「えっと着替えは・・・お、あった。」

脱いだ服が無くなって、代わりに着替えが置いてあった。

短パンと、おそらく新品のYシャツだ。

服を来て、ゴムで髪を頭の後ろで一つに纏めて、前髪を分けて二つあったヘアピンでとめる。

ボサボサだった髪も、風呂で洗ってサラサラになり、纏めやすかった。

「おお・・・視界が広い。」

今迄バーコードみたいだった視界が開け、若干明るくなった。

「さてと、とりあえず広間に戻るかな。ソファふかふかだし、何か飲みたいし。」

部屋を出て広間に直行、すると途中でルッスの背中が見えた。

「あつ、おおゝいルッスゝ、今上がったよゝ、ゴムとヘアピンありがとうねゝ。」

「あら満流? どういたしま・・・し・・・て・・・」
「?」

私を見た瞬間に何故か固まったルッス。
顔が驚愕の色に染まっている、何か変なところでもあったのだろうか？

「どうしたの？ 私どこか変？」

「い・・・いえ・・・変じゃあないわ・・・満流・・・なのよね？」

「??・・・間違いなく満流だけど・・・ほんとにどうし」

「か・・・」

「か？」

突然俯いて肩を震わせ始めたルッス、さっきから不気味で仕方ない。

「可愛いわ~~~~~!!!!!!」

「うわきゃあっ!?!」

そんでいきなり抱きついてきた、この場合殴り飛ばしていいんだろうか。

「満流!」

「は・・・はいっ!?!」

「あなたこんなに可愛い顔してるのに隠してたの!?! もったいないじゃない!?!」

「え? いや、単純に髪を放置してたら自然に隠れただけで・・・」

「こんないい素材してて手入れをしないなんて罪よ!?!」

「え~~~~」

「あっ、そうだわ! 皆にも見せましょ、きっと驚くわよ。」

「なんかそう言われると見せたくなくなってくるんだけど・・・」

「問答無用よ!?! さっさといくわよ」

腕をがっしりと掴んで私を連れて・・・もとい引きずって行くルッス。抵抗虚しく広間へと到着し、ドアを開け放つ。

「ちょっと皆集まって！　すんごい見えるわよ☆」

「うっせえぞカマがあ！」

「また男の死体かい？」

「マジキメエ、つかここに持ってくんなよ。」

「違うわよ！　あら、レヴィはどうしたの？」

「あいつは任務だあ。」

「そうなの、残念ね。　それじゃあご対面〜？」

そう言って私をズイっと前に出すルッス。

三人の視線が集中する。

最初はどこかうんざりしたような感じだったが、私を捉えた瞬間に驚愕したものになった。

「どう？　可愛いでしょう。」

「しっ、確かに、かなり可愛いじゃん♪」

「それは認めるけど、急にどうしたんだい？　もしかして女色に目覚めたのかい？」

「オカマでロリコンたあ救いようがねえなあ。」

三者三様の言葉を言った後、ルッスに非難の目線が突き刺さる。しかし本人はそれをもともせず得意げに笑っている。

「うふふっ？　やっぱり皆わからないみたいね。　まあ仕方ないわよね、こんなに違うんだもの。」

「うゝおゝおおい！！　なにニヤニヤしてんだあ！　かつさばくぞお！！」

「妙にイラつくね。」

「切り刻みたくなってきた♪」

ルッスの笑みが癪にさわったようで、ベルはナイフ、スクアーロが剣を構える。

マーモンは宙に浮いてる。

私も参加しようかなあ。

ちなみに何でさっきから私が発言しないかと言うと、入る前にルッスに言われたから。

「やあね、そんなに怒らないでよ。そしてね、この子は満流よ？」

「「「・・・はっ？」」」

再び視線が集まる。

先程の数倍の驚愕と、若干疑惑も混じってる気がする。

しかしこの三人は一日で何回「は？」って言ってるんだろう、まあ私のせいなんだけど。

「なんの冗談だあ。」

「冗談じゃないわよ、ねえ満流？」

「やっと発言出来たよ、ばらすの遅い。」

「しっ、マジで満流の声だし♪」

「驚いたね。」

半ば見世物みたいになってきた私。

そろそろ眠くなってきたな

「つか何で姫は裸Yシャツなん？ マジエロいぜ♪」

「考えないようにしてたのに蒸し返さないでよ、ちゃんと短パン履いてるし。　というか姫ってなに？」

「超可愛いから姫、王子の俺にピッタリだろ？」

「自分で王子って・・・」

「ベルは本当に王族の血を引いてるんだよ。」

「マジか・・・」

その後も小一時間くらい弄られていたが、夕飯の支度をしにルツスは厨房、スクアードはボスさんと話があるとかで出ていき、その場はお開きとなった。

夕飯の時は、皆の三倍以上食らった私が、どこにそんなに入るんだと呆れられ、満腹になって眠くなった私は、先に休ませてもらった。明日は初任務かぁ、何するんだろう？

記念（？）すべき初任務の日、朝食を食べ終えた私に

「はい満流、貴方の隊員服よくん？」

と言って渡してくるルッス。

裾は足の膝小僧がギリギリ隠れるくらいの長さで、大きなフードが付いている。

試しに被ってみると顔の大半が隠れ、外からは口元くらいしか見えないだろう（マーモンみたいな感じ）。

「随分フードがデカイね。」

「ボスからの命令よ、あとこれも任務の時は付けてね。」

「これは・・・仮面？」

ルッスに渡されたのは顔全体を覆うタイプの仮面。

銀色に輝いていて、口の部分に三日月を九十度回転させたような模様が描かれ、ニツコリと笑っているように見える。

これで後ろから追いかけられたら相当な恐怖に駆られそう。

「満流は素性を隠さなきゃだめでしょう？ だから大きなフードと

仮面で顔を見られないようにしなきゃ。ちなみにその仮面、かなり頑丈な素材使ってるから銃弾食らってもへっちゃらよ？」

「なるほど、まあ無駄に便利な装備貰えたと思えばいいか。」

「しっつ、やったじゃん姫。」

「それはそうと早く着替えて来たらどうだい？ もうすぐスクアーロが任務言い渡しに来ると思うよ。」

「わっ、もうそんな時間？　じゃあ早速着替えてくるね。」

自室に戻って着替える。

昨日と同じような短パンに無地のTシャツ、黒のニーソに隊員支給のブーツ。

昨日のように髪はゴムで纏め、隊員服を着てフードを被り、仮面を付け、鏡の前に立ってみる。

超不気味だった。

全身黒づくめに顔だけ銀色でニッコリスマイル、怖っ！

しかしこれなら素性なんてバレないだろう、声も若干エコーが掛かって聞こえるし。

という訳で急いで広間に戻る、すると既にスクアアロが来ていた。

「お待ちせー、どうこれ？」

「バッチリよ！ とんでもなく不気味ね☆」

「確かにこれなら素性を隠すにはもってこいだなあ」

「狙われる奴も相当怖いだろうね。」

「姫いかしてるじゃん♪」

概ね予想道理の答えが帰ってきた。

レヴィはまだ任務から戻ってきてないみたい。

「じゃあ早速任務の話すんぞお、今回の任務はあるファミリーの殲滅と要人の救出だあ。」

「暗殺部隊なのに救出？」

「その要人はボンゴレの傘下ファミリーの幹部でなあ、だが戦闘専門じゃねえから捕まっちゃったらしい。」

厄介なのはその誘拐した側のファミリーの方が勢力がデカイせいで手出しが出来ねえらしい、だから速やかに確実に救出するために俺たちにお鉢が廻ってきたってことだあ。」

なるほどねー、傘下ファミリーの人達にとって余程失いたくない人材ってことか。

でもそうなる・・・

「あのー、それって結構重要な任務じゃない？ 新人の私にやらせていいの？ あっ、勿論ビビったとか自信がないとそう言う意味じゃないよ？」

「心配すんなあ、テメエなら問題ねえって俺が言っただけだ。」

ちよっ、なにハードル上げるようなことしちやってんの！？
いや確かにできるけどね？

「それに保険としてベルとマーモンを同行させる、もし一人で対処出来ねえようなら加勢してもらえ。」

「そういう事、よろしく姫♪」

「お手並み拝見させてもらうよ。」

「ああうん、よろしくね。」

「分かったらさっさと行けえ、表に隊員が車で待ってるからなあ。」

「了解、いってきま〜す？」

「気を付けてね〜ん」

ベルとマーモンと一緒に屋敷出て、すぐ目の前に止まっていた車に乗り込む、入る際に隊員の人に礼をされた時はちよっどビックリした。そういう私幹部になったんだな〜

「ここ？」

「そうだよ。」

「ししっ、結構沢山いんじゃん♪」

車で二時間程揺られ、敵アジトの十キロ手前で降りて、そこから歩いてきた。

アジトが山の中にあるため、山道が地味にキツかった。

「それじゃあ早速行きますか。」

「そういや姫の武器ってなに？」

「たしかにまだ見てなかったね。」

「ああそうだっけ？　これだよ。」

ゴソゴソと服の内側に仕舞っておいたそれを取り出し、二人に見せる。

「……それかい？」

「うん、これだよ。」

「マジで？」

「マジ、ていうか書類にも鎌だって書いた筈だけど？」

そう、私の武器は鎌だ、別段驚く程珍しい物じゃない？

「確かに鎌だけど・・・」

「なあ姫。」

「うん？」

「それって・・・農家の鎌だよな？」

「そうだけど？」

「・・・・・・・・」

完全にフリーズする二人。

そんなに農家の鎌が珍しいのかな？

「それはどこで手に入れたんだい？」

「旅の途中で農家の家に停めてもらって、その時に使わなくなった道具を幾つか譲って貰った。」

「今迄それで殺ってたん？」

「そうだよ？ でももうこれ一つしか残ってないけどね、後は全部壊れちゃった。」

まああんな錆だらけの状態で四ヶ月以上もったんだから上々だよね。

「それで大丈夫なのかい？」

「人の首切り飛ばすくらいなら余裕だよ？」

「まあ姫ならやりそうだな♪」

「帰ったら満流の武器も用意しなきゃね。」

「じゃあ行くより、要人が殺されないように一気に走っていくから

ね。」

「了く解く」

「気にせずに好きにやるといいよ。」

走り出す私達、マーモンはベルの横を飛んで付いてきている。
向かうは正門、つまりは正面突破？

「むっ、なんだお前r・・・」

「そこでとm・・・」

声を掛けようとする門番達の首が飛び、言葉が不自然に途切れる。
数瞬後に切断面から血が吹き出し、体が倒れる音と首が落ちる音が
後ろから聞こえてくる。

私達はそれに目も向けず、一瞬も止まることなく走る。

門から屋敷の入口に着く迄に八人に遭遇したが、銃を構える者、中
に連絡を入れようとする者、例外なく行動を果たす前に首が飛んで
即死する。

「ヒュウッ♪ やるじゃん姫。」

「スピードはかなりのものだね、少なくともスクアールと争えるレ
ベルだよ。」

二人から賞賛が送られるが私は返事はしなかった。

集中していると言うのもあるが、なにより首を狩る感触に高揚して
いるからだ。

皮を、肉を、骨を、一瞬で断ち切るあの瞬間。

今殺した彼らとて、ただの弱者ではなかっただろう。

人の命がちり紙のように消えていくマフィアの世界で今日まで生き
抜き、沢山の戦いを経験した猛者だっていただろう。

それがこの瞬間、私の手によってあっさりと刈り取られた。

彼らが積み重ねてきたであろう努力も経験も知識も練習も、全ての時間の集大成である彼らの人生が終わったのだ。

たった六才の自分の手で、ああもあっさりと。

つまり彼らの数十年の人生は、私のような子供の人生六年分にも及ばない物だったということにほかならない。

そう思う度に感じる。

ああ、弱者に生まれなくてよかった……と

自然と頬が緩む、口の端が釣りあがる。

今の自分は、顔に付けている仮面と大差ない笑みを浮かべているだろう。

屋敷の玄関で一旦止まり、中の気配を探る。

ホールに七人、奥に続く廊下に四人ほど、要人のことを考えるとまだ騒ぎにはしたくない。

どうしたものかと思案していると、近くに倒れている死体の内ポケットから便利な道具が見えたので拝借、ついでにナイフ二本と拳銃一丁も貰っとく。

「これ使うから二人は少し後で入ってきて。」

「ししっ、おっけ〜♪」

「ムッ、わかった。」

二人が頷いたのを見て、私はあえてドアを勢い良く開け、拝借したものを天井高く投げる。

全員が反射的にそれを目で追い、なんなのかを認識した瞬間、小さな破裂音と共に強烈な光が広間にいた全員の目を焼いた。

そう、いわゆる閃光弾、スタングレネードである。

せっかく近くにあったからには使わないと、無くても殺ることは出来たけど、個人的に無抵抗の人を狩るのが楽しいの？

「な、なんだこれh・・・」

「一体何g・・・」

「侵入者d・・・」

次々に発せられる怒号は途中でと切れ続け、光が収まった時には誰も喋らない。

ついさっきまで豪華に飾られていた広間は血の海になっていた。ドアが再び開いてベルとマーモンが入ってくる。

「そう言えばさ、要人って何処にいるの？」

「さあ？ しらね♪」

「いや、さあって・・・」

「どの道敵は皆殺しだからさして関係ないんだよ、ここのボスにでも聞けばいいんじゃないかい？」

「そうするか」

方針が決まったところで（方針と呼べる程のものでもない気がするけど）、再び全力疾走。

目に捉えた敵をザックザックと鼻歌を口ずさみながら狩り進み、およそ八割を殺したところでようやく騒ぎになり始めた。

ちなみに途中で敵の一人に聞いたところ、要人は敵のボスの部屋にいるそう。

手足をきり落としたら簡単に話してくれたよ？

「気づくの遅すぎだよね。」

「姫の手際が良すぎんのが理由じゃね？」

「そうなの？」

「僕は暗殺部隊と名乗ってはいるけど殆どは派手な虐殺ショーみたいなモノだからね、人目を避けて殺す機会は実はそれほどないん

だよ。」

「へえ。」

「ところで姫、さっきから何で鼻歌歌いながら殺ってんの？」

「あれ？ 私気分が乗ると自然に出ちゃうんでだよね。」

「根っからの殺人鬼気質だね。」

話ながらも狩り続け、残すは要人がいる筈のボスの部屋だけになった。

中に二十人くらいの気配がある。

「じゃあ相手のボスに出会いと別れの挨拶に行こっか？」

「姫ガンバ！」

「さっさと終わらせよう。」

ドアを開き、中に入る。

部屋の中では豪華な家具が全て端に寄せられ、十八人が銃を此方に向けていた。

一番奥にボスらしき人間が立っており、その下には写真で見た要人がロープでぐるぐる巻きにされた状態で倒れ、敵のボスに足蹴にされている。

「く、来るんじゃない！ それ以上近づいたらこいつをぶっ殺すぞ！！」

なんとも典型的な小物だ。

なんでこんな奴がマフィアのボスになれるんだろう？ ある意味神

秘の領域だよ。

余計な話をする気はないので、残っていたナイフをボスの銃を持つ右手に投擲。

手の甲に見事に刺さり、悲鳴を上げながら銃を落とす。

全員の意識がそっちに向いた一瞬で私は要人のもとに走り、縛っているロープをひっ掴んで下の場所に移動する。
着いたら要人を開いていたドアの外に放り込んで敵に向き直る。

「さあ、これで人質はなくなったぞ？　どうするのかな？」

索性秘匿のために声を低くして口調も変える。

どうせバレはしないだろうけど、まあ念には念をとてね。

「ひいっ！　こ、殺せ！　撃ち殺せー！ー！！！」

ボスの指令の下、一斉に銃弾の雨が放たれる。

しかし、その時すでに私は身を低くして横に跳び、一番近くにいた敵の側面に迫る。

鎌を右手に持ち、横薙に振って首を狩る。

そのまま前進して二人、三人と殺していき、残った敵が私の方に銃を向け、発泡するが、私は死体を盾にするように移動し、照準を定まらせないように複雑に動いて背後に回り込む。

単純な作業の繰り返し。

狩って、走って、近づいて、また狩る。

いつしか私はまた鼻歌を歌いながら笑っていた。

「~~~~~~~~?~~~~~~~~、ふふっ、あはははははははっ！！」

私が歌えば歌う程、笑えば笑うほど、相手の顔が恐怖に歪む。

まるで反比例するように、可笑しくて仕方がない。

いつしか部屋の中で立っているのは私だけになっていた。

小物のボスも、醜く涙や鼻水を垂らしながら首が転がっていた。

「おつかれゝ姫♪」

「中々見ものだったよ。」

「ありがとゝ、私も結構楽しかった？ それじゃあ帰ろっか。」

部屋を出て、助けた幹部の様子を見る。

気絶してるけど特に深い傷は無いので大丈夫みたい。

「で、どうするの？ これ持って行くの？」

「さっき連絡しておいたから屋敷の前に迎えが来るよ。」

「そっかゝ、またあの道歩くかと嫌だなゝって思ってたし。」

その時突然パキンツと言う音、そして何かが床に落ちた音が響く。

「？ 何今の音？」

「姫、それじゃね？」

「それ？」

「キミの手元と足元だよ。」

言われたとおりに見てみると。

「あっ。」

そこには見事に刃が根元部分から折れた鎌、そして床に落ちている折れた刃があった。

「ついに折れちゃったかゝ。」

「むしろよくそんなので今回もったね。」

「そこからしてスゲェよ姫は♪」

「まあいっか、新しいの貰えるんでしょ？」

「ヴァリアーの幹部だからね、言えば相当の物が与えられる筈だよ。」

「そっか、楽しみだな？」

それから十分程して迎えが到着し、私たちはアジトに帰った。

第四話（後書き）

今までより長くかけたー！

主人公まさかの農家の鎌で無双 W W W W W

ヴァリアーの歴史に新しい一ページが刻まれた W W W W W W W W W

ではまた次回

第五話（前書き）

緊急事態が発生しました。それは……

お気に入り登録された！（；。D。）！

見た瞬間にきっかり十秒フリーズしましたWWW

まさか登録してもらえとは夢にも思わず、ビックリです。

多少なりとも楽しんでくれてる人がいたようで何よりです♪

これからも頑張って行こうと思うので、何卒宜しくお願いしますm

（――）m

ではどうぞ。

第五話

美しい三日月が浮かぶ夜。

月明かりだけが光源である暗い山の中、一人の男が走っていた。

「はぁ、はっ・・はぁっ、はっはっはぁ！！ クソっ！！」

悪態をつきながらも必死の形相で走る三十代半ば程の男、質の良さそうなスーツを着てはいるが、長く走っていたせいで乱れ、表面の半分以上が血で赤く染まっている。
しかしこれは男のものではない。

つい数時間前まで男と共に酒を飲み、笑って騒いでいた部下達の血だ。

その全員が今はもういない。 生きているのはほぼ間違いなく男で最後だろう。

「はぁ、はぁっ、ちくしょう！ 何で・・なんでアイツがこんなところに！！」

——首狩りが居るんだ！！——

男は恐怖のあまり思わず叫んだ。

自分と、自分の部下たちを襲った犯人が、次々と部下の首を切り飛ばした光景が、鮮明に頭に浮かび上がる。 鼻歌を歌いながら、本当に楽しそうな雰囲気を出しながら首を刈り取る小さな悪魔。

「首狩り」

今より半年程前から爆発的に有名になりつつある殺人鬼だ。

最初はただの一般人をひと目のつかない所でちまちまと殺すだけだったのだが、三ヶ月前から徐々に規模がデカくなっていき、一ヶ月前には小さな集落を皆殺しにした。

そしてそれからは何故かマフィア関係の人間に狙いを絞り、そしてかなり頻繁に殺しを行なっている。

この一ヶ月だけで七つの弱小マフィアと、違法研究をしている四つの日陰マフィアが潰されている。

他のマフィアの幹部や要人といった個人レベルでさえ三桁を超えている。

「なんで俺たちがあんな化け物に狙われるんだ！ 覚えがねえぞ！」

確かに自分たちはマフィアだが、この世界では本当に平々凡々な部類だ。

潰された弱小ファミリーみたいに危険な思想や一般人への過激な暴力なんてしてないし、違法な研究なんて勿論やっていない。

勢力だって並みだし、どこかのファミリーと特別争ってもいない。

何か大きな事を企てているなんて事は以ての外だ。

俺らが狙われる理由なんて・・・

『本当にそうかなあ？』

「っ！！！」

突然聞こえた声に思わず立ち止まり、懷から銃を取り出して周りを見回す。

しかし何処にも姿はなく、声だけが不気味に響いてくる。

「あ、当たり前だ！ 俺達やあ何も・・・」

『そこまで自分のファミリーを信じてるんだね？ でも過信しすぎたのが不運だったね、自分の部下が何をしているかちゃんと把握しておかないから死ぬ羽目になったんだよね？』

エコーがかかった、しかしこの状況ですら聴き惚れてしまいそうな綺麗な声色から、この悪魔が少女である事がわかる。

先程よりも声が近くから聞こえ、恐怖が一層増す。

「ど、どう言う意味だ!？」

『そのまままの意味だって、貴方は何もしていなくても貴方の部下の人が色々やってたってこと?』

「そんな馬鹿な！ 俺の部下が・・・」

『悪いけど今となってはそれはどうでもいいの、貴方達を潰せって言われた以上、私は殺すだけだから?』

「くっ！ この悪魔め!!」

『そうだよ？ だくらくら・・・』

額から落ちた汗が目に入りそうになる。

それを袖で拭い、再び前に視線を向けて・・・

『バ～イバ～イ?』

目の前でニツコリと笑う銀色の笑顔を見たのを最後に、闇に墮ちた。

目の前の扉を開け私は広間に入る。

「ただいま〜・・・。」

「しっ、おかえり〜姫♪」

「随分お疲れね。」

「眠いよ〜・・。」

私はベルの向かいのソファにダイブする、フカフカ気持ちいい〜。

「だけどホント、満流は忙しいわよね〜、アタシの倍近いんじゃないの？」

「ルッスは飯作ったりとかしてっから俺らに比べて少ねえけど、それでも姫のは異常だよな〜。」

ホントだよ!!　いくら私が素性バレてないから使いがってがいいからって扱き使いすぎ!!
入隊して一箇月で殺した人の数軽く千人超えたよ!?　個人の暗殺でさえ二百は殺ってるよ!!?　
ちなみに私の姿を見た人は基本皆殺しにしているんだけど、初任務の時に助けた人が、途中で少しだけ意識を取り戻して私の戦いを見たらしく、女であることは知られた。

ボスさんとスクアアロはその程度は全然許容範囲であるらしく、特に何も言わない。

だがその人を起点として私の噂は瞬く間に広まった。

曰く、「美しき歌声と共に命を冥府に送る魔女」だの、

曰く、「首を狩ることに至上の快楽を覚え、悦ぶ悪魔」だの色々。

そんな感じの噂が尾ひれはヒレついて行き、いつしか「首狩り魔」から「首狩り王女」にジョブチェンジしていた。

なんだよ「首狩り王女」って、ベルの「切り裂き王子」の二番煎じみたいじゃん。

ちなみにベルはこの通り名を聞いたとき、とってもご機嫌だった。

「ルッス〜ご飯〜・・」

「はいはい、今持ってきてあげるからねん☆」

広間を出ていくルッス、入れ違いにマーモンが入ってきた。
マーモンも任務帰りみたい。

「マーモンお帰り〜。」

「ムッ、満流も帰ってきてたのかい。」

「今さっきね、それよりちゅっとコッチに来て。」

「・・・またかい？」

「いいじゃ、減るもんじゃないし。」

「減るんだよ、色々。」

「お、ね、が、い。」

「・・・はあ。」

溜息をついて渋々ソファに横になっている私に近づくマーモン。

私はそれをムギューっと抱きしめる。

「ん、プニプニスベ、癒される？」

「僕は疲れるんだけど。」

「しっ、そう言いながら毎回やらせてるよな、まんざらでもないじゃね？」

「まさか、これはツケにしてやってるだけだよ。いつか纏めて返してもらうよ。」

「照れない照れない？ ほっぺモチモチだよ。」

それからルッスが料理つを運んでくるまでマーモンをたっぷり堪能し、いつもよりさらに倍の量のご飯を食らい、食後の紅茶を飲む。

「そう言えば満流、武器の調子はどうかしら？」

「バッチリだよ、もう面白いくらいにサクサク殺れちゃう？」

初任務の後、帰って早速スクアーロに報告し、武器を作ってもらえる事になった。

報告したときに

『んな武器使ってんじゃねえ!!』

と怒られた。

それから約一週間後に無事に完成し、ガンガン狩っている。作ってる期間中は、ベルのナイフとかスクアーロの予備の剣とかを借りて殺してた。

基本的に何でも使えるし、ただ鎌での戦いに一番慣れているだけで。

ちなみに新しい武器は勿論鎌、全身が深い紺色で塗りつぶされ、棒の部分は私の一・三倍くらいの長さ。

sonで刃と棒の繋がっている部分には刃の角度を変える機構が付いており、九十度上に回せば簡易的な槍に、下に回せば斧みたいにもなる。

さらに棒の部分も、真ん中の所で二つに分割する事ができ、中に収納されている細く、しかしとても頑丈な鎖で繋がっている。

刃を下に回して棒を二つに折ればコンパクトになって持ち運びも楽だ、専用の小さなバックも貰えた。

しまいには刃の部分が着脱可能であり、根元に柄にあたる部分があって、剣としても使える。

まあなんとも便利なモノを貰っちゃいました。

私でけこんないい武器作ってもらって本当にいいんだろうか？

「そう、よかったわ？ なにか不具合があったらすぐに言ってねん？」

「了々解、それじゃあお風呂入ってくるね。」

「はい。」

「そうだ、マーモンも一緒に入る？」

「断固拒否するよ。」

「ちえ。」

「しっ、じゃあ俺と入る？」

「いいよ。」

「それはダメよ！」

「「なんで？」」

「問答無用！ 満流、明日のご飯を抜きにされなくなかったら・・・」

「じゃあねベル！！ あたし一人で入るからっ！！！！！」

速攻で広間を出て風呂場に行く、ご飯に勝るものはない！！

風呂に入った後、そのまま寝ようと部屋に向かう。

「うゝおゝおい満流！」

「あ、スクアアロ。 どうしたの？」

振り返ると、スクアアロが早足で近づいてくる。

「お前に話すことがある、前にボスが言ってたお前の”使い道”のことだあ。」

「ああ、あの話かあゝ。 ってことは近いうち何かあるってこと？」

「詳しいことはボスの部屋で話す、ついてこおい。」

そう言って踵をかえし、ズンズン歩いていくスクアアロ。

体格差的な問題で私は小走りになる。

とうとう来たかあゝ、一体なにやらされるんだろう？

「うゝおゝおい！ 連れてきたぞお。」

「お邪魔します。」

ボスさんの部屋に入り、机の前で立ち止まる。

ボスさんは相も変わらず不機嫌そうだ、いきなり死刑宣告されても全くおかしくない位に睨んでくる。

「来たか・・・。」

「なんか私の使い道の件で話があるとか。」

「そうだ、二日後に俺たちは大規模な作戦を行う。 テメエには敵戦力の攪乱をやってもらう。」

「この一ヶ月でテメエの人気はうなぎ登りだからなあ、攪乱にはもってこいってことだあ。」

なるほど、それでこの一ヶ月あんな労働基準法ガン無視のシフトを

消化させた訳なんだね。

しかし話を聞く限り総力戦っぽいな、ヴァリアーの総力を上げるような相手ってどんなんだろう？

「話はわかりました。それで明後日の私たちの敵ってどこの組織なんですか？」

「ボンゴレだあ。」

「・・・・・・はい？」

おかしいな私の耳がおかしくなったんだろうか。
もう一回、今度は耳をよくかっぽじって聞いてみよう。

「すいません、もい一度言ってもらえます？」

「何度も言わせんじゃねえ！　いいか、俺たちは！」

ふむふむ

「二日後に！」

ほおほお

「ボンゴレを襲撃して制圧するんだあ！！！」

・・・・・・な~~~~ぜ~~~~

第五話（後書き）

前回は比べてすくない W W W W W W W W W W

ついに次回、ゆりかごに突入！！

主人公の武器も説明だけ出ましたね。

ゆりかごで存分に振り回してもらいましょう。

では（〇・・〇）／

第六話（前書き）

ゆりかご戦だ〜！

日本までもうすぐだぜ！！

ではどうぞ。

第六話

「ボンゴレの制圧、ですか。」

「そうだあ。」

まさかのクーデターとは、さすがのわたしもビックリだよ。

まあ戦力的に作戦さえしっかり練れば問題ないだろうけどさ。

「それでさっきも言ったが、テメエの役目は陽動と攪乱だあ。」

「具体的には？」

「当日、テメエにはボンゴレ本部を後方から襲撃してもらう。噂

の「首狩り王女」が襲ってくればそうとうの戦力がまわされる筈だあ。」

「なるほど、たしかに。」

つまりはボンゴレの本部戦力を一人で相手しろと、信用してくれるのは嬉しいんだけど……

「そして俺らは正面からアジトに入る、首狩り討伐の援軍としてなあ。」

「おおう。」

「そこからは各自で散って敵を殲滅、その間にボスと俺が九代目を殺す。」

「二人掛かりならなんの心配もないですね、了解です。」

しかしそうなる私と私の予想はあたりかな？

やっぱりここは本人に直接聞いたほうがいいか。

「話は以上だあ、明日は任務はねえから体力を温存しとけえ。」

「わかりました。ところでボスと二人で話したい事があるんですがいいですか？」

「好きにしろお。」

そう言って出ていくスクアーロ。

私とボスの二人だけ、そう言えばさっきからボス一言も話してくない？

わざわざここで話した意味は・・・

「なんの用だ。」

「ちよっと質問があるだけです。先に言っておきたいんですが、返答によって何か変化したりはしませんので、その上でお聞きします。」

「なんだ。」

「ボス・・・いえ。」

一呼吸置いて、真剣な目でボスを見る。

この質問はきつと、彼の奥深くに触れる事になるだろうから。

「XANAXUS・・・あなたは九代目の息子じゃありませんよね？」

「っ！！」

初めて見るボスさんの驚愕の顔、だけど物珍しさに見ている事は出来ない。

「厳密に言えば。あなたは九代目と血は繋がってないですよね？」

「・・・何故そう思う。」

「最初に疑問に思ったのは貴方が九代目の息子だと聞いた時からです。ボンゴレの最強部隊を率い、尚且つ次期ボス候補達の中でも

圧倒的な支持を得ているにも関わらず、未だに貴方が十代目を継ぐと言う話が全くと言っていいほど出てこないのはどうしてだろう？
と思ったのが始まりでした。」

私は淡々と話続ける。

ボスも今回ばかりは静かに聞き続けている。

「その時はそこで大して考えずに終わったんですが、クーデターをおこすと聞いて合点がいました。

このまま行けば普通に考えて貴方がボスで決まりな筈なのに、何故クーデターなんてする必要があるのか？

それはつまり何らかの理由で貴方が十代目を継がない場合しかない。ならそれは何か？ 他の候補者などの外的要因ならば秘密裏に処分すれば事足りる筈、なのにリスクを犯してまで反旗を翻すということは、十代目を継げない理由は貴方自信にある。」

「……」

無言ではあるが、若干顔が歪んでいくように見える。

それは怒りでもあり、憎しみでもあり………悔しさや悲しみにも見えた。

「ボンゴレを継ぐのに必要な絶対的なもの、そして後天的には絶対に手に入らないもの、それはすなわち

……ボンゴレの血。」

「……そうだ。」

無言だったボスさんが口を開く。

雰囲気がいっつもより控えめになっているのは気のせいではないだろう、あくまでいっつもよりだが。

「テメエの言うとおり、オレは老いぼれとは血が繋がってねえ、十代目をあいつから継ぐ事はない。」

「そうですか。何故九代目の養子に？」

「オレは下町で生まれただけのガキだったが、生まれながらに死ぬ気の炎を宿していた。それを見て変な妄想浮かべやがった糞女が俺を老いぼれと会わせたんだ。」

「そえで九代目は貴方を引き取ったと。」

「そうだが少し違う。」

「というと？」

「あいつは俺を自分の本当の息子だと言って引き取った、ファミリーにも俺にも嘘をついてだ。」

「なるほど、つまり貴方は自分をボンゴレの直系だと思っていたのに、偶然それが違うと知ったんですね。」

「そうだ、だから俺はあの老いぼれを引きずり落とし、ボンゴレを手に入れる。血統なんぞ知ったことか！」

思い出してたら再び怒りが湧いたらしく、声が荒々しくなっていく。そしたら私を視殺せんばかりの目で睨んできた。

「それでテメエはどうすんだ？俺にボンゴレの血がないから抜けるか？」

「いえいえ、先程も言いましたけど何にも変わりませんよ？というか私にとってはボスにボンゴレの血が入っている方がいいが全く関係ないですよ。何となく疑問に思ってたことを解消したかったからです、御陰様でスッキリしました？」

話が終わったので真剣な雰囲気は吹っ飛ばす。
シリアスシーンはいつまでも続きません？

「というかむしろ余計に協力したくなってきましたよ？ 伝統のルールを踏み倒してまで十代目の座を狙うなんてカッコイイじゃないですか、そんな伝統俺がぶっ壊す！！ みたいなあ？ ボスならきっとできますよ。」

「・・・・・・」

黙り込むボスさん、話も終わったし、退散するのでしょうか。

「それじゃあもう寝ますねー。 あ、それとですね・・」

ドアを開け、部屋を出る直前に振り返る。

「他の皆に知られても問題ないと思いますよー？ 私達はボスの部下で、ファミリーですから？」

部屋を出て廊下を歩く。

後ろの部屋、ドアが閉まる直前に

「うっせえ・・ドカスが。」

と小さく聞こえたような気がした。

あっ！ という間に二日後。

私は現在、ボンゴレ本部後方の森の中に隠れている。 勿論フル装備で。

これから世界最大のマフィアの本隊と殺り合うかと思うと・・・

「ワクワクが止まらない！！？」

作戦聞いた時はどんな無茶振りだよって思ったけど、やっぱり本番になると楽しみだと言う感情の方が勝ってくる。

そう思うと九代目とも戦ってみたいなあ、ボンゴレのボスなんだから強いんだろうなあ。

写真で見たときはそこに居そうな優しいお爺ちゃんみたいだったけど、見た目と強さは全く関係ないしね。

ウチのボスに限っては見た目通りだけでも。

などと思っていると耳に付けた通信器から連絡が入る。

《うゝおゝおおい！！ 配置についたかあ！！》

『着きましたよお、あとうるさいので少し静かに喋ってください』

《そろそろ時間だあ！ いつでも始めろお、何度も言うが思いつきり暴れろお！！》

『こっちの要望ナチュラルに無視ですかあ、わかりました、これより作戦を開始します。』

通信を終了し、背中の中のバッグから武器を取り出す。

棒を連結して刃を垂直の位置に回して鎌の形にする。

ゆっくりとアジトの扉の所まで歩き、手前で止まる。

『今回は陽動が目的だから派手に騒がしく殺さないとねえ、てい

やあっ?」

掛け声と共に塀を切り刻む、派手な音と共に崩れていく塀。土煙が晴れた向こうは当然アジトである建物が見え、恐らく巡回警備をしていたであろう二人の男が「何事だ!!」と騒いでいる。私の姿を見た瞬間、銃を構えた。

「貴様何者だ!　ここが何処だか分かっているのか!」?

『勿論わかってますよ?　マフィアの世界じゃ知らぬ者のないボンゴレの本部ですよね?』

「分かっててやっているのか!　何が目的だ!!」

『九代目を殺しに来ました?』

「なっ!　う、撃てえ!」

二人が撃ってくるが鎌の刃で防ぐ、体が小さい分とっても楽だ。やがて弾が尽き、マガジンを交換しようとするが、その隙に接近して両手足を一気に切断する。

銃の音と叫び声がこれだけ響けばイヤでも集まってくるだろう。

「ぐああああああっ!!」

『ゴメンね、普段ならさっさと首を狩っているんだけど今回は事情があるから?』

「ぐううっ、首・・・を?　ま、まさか・・・お前は!」?

『そうだよ、だからその通信器貸してもらおうね?』

一人が持っていた通信器を見て、いいことを思いつき、回線を開いて倒れている人の口元まで近づける。

「な、なに・・・を・・・」

『ほらあ、早く緊急事態を報告しないと。　さっきの音で数人くら

い来るだろうけど、それじゃあ君たちの二の舞だよ？ 事態を正確に伝えるのが見回りの仕事じゃないかなあ？」

「くっ……こちら西側……堀内第三巡回地点、〔首狩り王女〕が現れた！！ 繰り返す……〔首狩り王女〕が……ぎゃああああああっ！！！！」

役目を終えた男を、なるべく痛みを伴うように殺す。

これで演出はバツチリだね？

『お役目ご苦労様、さつてと、たっくさん来てる来てる？』

目で確認出来るだけでも五十人は来てる、あとからまだまだ来るだろう。

一人一人が今迄の敵とは比較にならない猛者だと言うことが一目でわかる。

まだ戦ってもいないのに早速興奮してきた。

『こっからは好きに暴れ放題？ 久々に本気出しちゃうよ？』

鎌を構え、真正面から飛び込んだ。

第六話（後書き）

ウチのXANXUSってホントよく喋るよな（
）。
（
）。

次回、無双と敗北、そして物語は日本へ！！

第七話（前書き）

更新するの忘れてました、スイマセン（汗

誤字の指摘がありましたので、より一層注意して書いていくよう頑張ります。

皆さんも誤字脱字を見つけ、読みづらいつと感じましたら遠慮なく言ってください。

そしてご迷惑でなければ場所も教えてくれると幸いです。

ではどうぞ。

第七話

マフィア界における最大勢力、その総本山であるボンゴレ本部。多くのマフィアから畏敬の念を向けられるその場所は、今や地獄と化していた。

各所で響く銃声や爆音、歴戦の猛者達の断末魔の悲鳴。

「な、何だ！？ いきなり体に傷が・・・ぐわああああ！！」
「ししっ、バイビー♪」

ある場所では己の体に起こった事も理解出来ずに引き裂かれ・・・

「ば、化け物だぁ！ 銃が効かな・・・うがぁぁ！！」
「それは君自身の想像力の産物だよ。」

ある場所では異形の怪物に成す術もなく捻り潰され・・・

「レヴィ・ポルタ！！」
「ぎゃあああああああ！！」
「ボスの邪魔は何者にもさせん。」

またある場所では晴天の空で起こるはずのない雷光に身を焼かれ・・・

「あら、中々いい体してるじゃない？ でも残念、私のお気に入りになるにはもう少し遅くなるか、満流みたいに可愛くならなきゃダメよ？」
「があああああ！！」

ある場所では一方的に蹴り殺しにされた。

たった数人の侵攻によってその戦力を削り落とされるボンゴレ。
ボンゴレの戦力をよく知る者ならば誰もが思うだろう、これは何の
悪夢だ、と。

激化していく戦場、その中心たる場所で・

「うゝおゝおおい！！ さっさと死ねえ！！」

「かつ消えろ老いぼれがあ！！」

「くっ！！」

両陣営の大將が対峙していた。

三人とも既に全身傷だらけの満身創痍、しかし溢れんばかりの闘志
と殺気は衰えることなくその場に渦巻いている。

しかし九代目は顔に迷いを浮かべており、防戦一方だ。

スクアアロが側面から斬りかかり、それを手に持つロッド状の武器
で防ぎ、即座に押し返して後方に飛ばす、すると右側から凄まじい
威力の炎が放たれ、九代目を焼き殺そうと迫ってくる。

しかし素早く身を低くし、前方に防御の炎を集中してやり過ごす。

炎が晴れると目の前にXANNXUSが迫っており、至近距離で先
ほど以上の炎を放とうとするが、九代目がロッドでXANNXUSの
腕を払って射線を横にズラす。

直後に撃たれた炎はあらぬ方に飛んで行き、部屋の壁を跡形もなく
吹き飛ばす。

両者が一旦距離を置いて対峙する、スクアアロは先程、飛ばされて
柱に身を強く打ちつけてしまい、ダメージで動けずにいた。

「まさか貴様がここまで出来るとは思わなかったぞ、老いぼれが・

」。

「家光はお前を殺すなど言ってくれた。だがこれだけの犠牲を出したお前を、ボスとして見過ごすわけにはい かん。」

九代目の顔にはさっきまでの迷いは無く、何かの決意が見えた。

「せめてワシの手で・・・。」

「やっと本性を現したなジジィ！　これでお前の念願が叶うわけだ！！！」

「何故だ、なぜお前は・・・。」

「うるせえ！　それはテメエが一番よく知ってるはずだ！！！」

怒りと共に、XANXUSの手の炎が激しく燃え上がる。

「わかったらかつ消えろ！！！」

「みんなすまん、やはり私には・・・。」

そう言う九代目の炎が大きくなったり小さくなったりと不規則に脈打つ。

次の瞬間、突然光が弾け、XANXY S体が凍っていく。

「な、なんだ！　この技は！？　ぐわあああああ！！！」

成す術も無く凍っていくXANXUS。

氷が首まで達し、全身を覆う瞬間、彼の脳裏にある少女の姿が浮かぶ。

秘密を知っても変わらず、いやむしろ今迄以上に馴れ馴れしい笑顔を向けてきた少女。

「ちくしょおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「！」

鼓膜が破れるかと思う程の音量で叫ぶXANXUS、それは九代目への憎悪の叫びか、それとも・・・

らしくもない事を考えた自分への怒りの叫びか・・・。

血飛沫が上がる音が辺りに響く。

周りは既に土の色を見つけるのが困難な程に血の海に染まっており、その中心には不気味に笑う銀色の仮面を付けた小柄な、というよりも小さな子供。

『あゝ、たゞのしゝ・・?』

エコーの掛かった少女の声。

しかしそれはおどましい程の恍惚とした声音であり、この少女が今どれだけの悦楽を感じているかがハッキリと感じ取れる。

手にした鎌は血でベツトリと汚れ、周りには死体の山、さらに少女は小さく鼻歌を口ずさみ、とても楽しげだ。

『もう完全にキャラぶつ壊れ状態だゝゝ、もうそろそろアジトの中入ろうかな? 下っ端掃除も満足したし、いい加減強い個人と殺りたいなゝゝ?』

そう言いつつゆっくりと歩く少女だが、彼女の歩みを邪魔する者はここにはもういない。

少女はアジトの建物の周りを一週し、外にいる者たちを皆殺しにしたからだ。

正面の大きな玄関を開き、堂々と建物の中に入る、外と同じくあちこちから血の臭いがする。

そらはつまり仲間が上手くやっている証。

『さゝて、いつそ九代目を殺すの混ぜてもらおうかな?』

「残念ながらそれはさせん。」

『おや?』

「オメエはここまでだガキ。」

少女の前に立ち塞がったのは二人の男。

一人は三十代半ば位で、メッシュの男。

もう一人は見た目は初老でありながらも、今迄の下っ端達とは次元の違う威厳を放つ人物だった。

立ち振る舞いからして高い技量を持つことが伺える二人。

しかし少女はその二人の顔を見た瞬間、仮面の内で珍しく驚きの顔を、そしてその次にはとてつもない歓喜の表情を浮かべた。

『へー、驚きました。 事前の情報では貴方達は今日ここには居ない筈なんです。』

「そうそう自分たちの行動をさらけ出すような事はしないさ、それが役目でもある。」

「俺たちを甘く見てんじゃねえ。」

『いえいえ、甘く見てなんてませんよお？ むしろ嬉しいです、ここにいてだけでもサプライズなのに二人共独占出来るんですから？』

「『首狩り王女』にそこまで言ってもらえるなんて光栄だな。」

「くだらねえ事言ってるじゃねえ、さっさと潰して他の援護行くぞ。」

それぞれが構え、張り詰めた空気が一瞬でばを満たす。

『それじゃあ遠慮なく行きますよー？』

駆け出す『首狩り王女』。

『ボンゴレ？世の雷と嵐の守護者さん？』

第七話（後書き）

おい、ゆりかご終わってねえじゃん！　と思っただ方、ごめんなさい

m (m

一話で書こうと思っていたんですが、予想以上に長くなりそうだったんで分割しました。

九代目の守護者出しちゃった！

満流の見せ場作りたかったばかりにW W W W

次回こそ日本に行ってみせます！！

第八話（前書き）

ゆりかご終了。

第八話

突然だが、今私は凄く興奮している、それはもうもの凄く。

何故か？ それは、やっつっつっつと！ 大物と殺り合う事が出来るから！！

守護者だよ守護者、ボンゴレの中でも別格中の別格。

唯一ヴァリアーと渡り合えるかもしれない個人戦力と言っても過言じゃないよ。

しかもそれが一度に二人も！！

こらはもう日頃の行いの賜物としか思えないね！

特にここ一ヶ月の働きっぷりは尋常じゃなかったからね、きっと神様のご褒美をくれたに違いないよ？

何でここに居るのか気にはなるけど些末なことだ。

今は目の前の極上品を味わい尽くす、それしかない。

『それじゃあ行きますよう、ボンゴレ？世の嵐と雷の守護者さん？』

「ああ、来な！」

「身の程を教えてやるぜ！」

『開始早々の死亡フラグご苦労さまです。』

私は鎌を振りかぶって駆ける。

嵐と雷、たしかコヨーテさんとガナツシュさんだっけ？

それぞれ銃を構えたり素手のまま構えたり、ガナツシュさんは銃を取り出すなり二発発射、銃口の向きと視線からして、弾は正確に私の心臓と右足首を狙っており、普通ならここでそのまま撃たれるか、または心臓守って利き足をやられるかしかないが、私は左に跳ぶ、しかしそうすれば空中にいる所を撃たれる、それでも跳ぶ。

案の定、ガナツシュさんは空中の私を撃とうとするが、私は跳ぶときに体が宙で一回転するように跳び、その途中で先程私の心臓を狙

って撃たれた弾を、刃の腹の部分で、遠心力追加で打ち返した。

弾はガナツシュさんの鳩尾に向かって飛び、彼はギリギリ避けたが、脇腹に少し深く掠ったらしく、一瞬だけ顔を歪める。この間約1.3秒。

その隙に床に着地、接近して懐に入ろうと

「こっちだガキ。」

『おお!?!』

した時に視界の右横にコヨーテさんが出現、次の瞬間には殴り飛ばされていた。

右手で防いだけど、折れるかと思った。

地面に鎌を突き立てて勢いを殺す。

ガナツシュさんもとづくに立て直していて、位置的にも振り出しに戻った。

「銃弾を打ち返すとは、噂通りの化け物だな。」

「まったくだ、その細腕でどうやって受けきったんだか。」

『お褒めに預かり光栄でゝす?』

始まってから一分も経っていない、なのにこの高揚感、体のそこから笑いが込み上げて来るようだ。

だから少し力を使おう、出来ることなら何時間でも殺り合っていたいけど、それはさすがに自重。

ならせめてある程度全力で潰したい。

『そろそろボスの所に行きたいので死んでくださいねゝ。』

言いながら仕込みを済ます、特に体を動かす事がないのでバレにく

いのがこの力の長所だね。

「まだまだ始まったばかりだろう。」

「死ぬのはテメェだガキ。」

何を言っているんだって感じに言葉を返してくる二人、余裕な顔した人を絶望の底に叩き落とした時の顔ってスッゴイそるよね〜？想像しただけでゾクゾクしてきた。

仕込みが済んだ直後に疾走、真正面から突っ込んだ私に、二人は一瞬だけ目を見開いた。

しかしすぐにコヨーテさんは迎え撃つための構えをとり、ガナッシユさんは体の要所を正確に狙って撃ってくる。

銃弾を防ぎながらコヨーテさんの方に突撃、間合いに入る直前に仕込みを発動させる。

「ヤケになったか？ この距離で俺と闘ろうってのか。」

コヨーテさんは拳を私の顔面目掛けてとんでくる、しかし私は避けようともせずに突っ込む。

拳が私の顔面に

「なっ!？」

当たる事はなかった。

しかし私は避けていない、単純に届かなかっただけ。

私はそのまま懐に入り、鎌を思いつき右斜めに切り上げる、肉が斬り裂かれる音が静かに響いた。

「ぐううっ!!」

「コヨーテ!!」

左腕を切り飛ばされ、さすがに呻くコヨーテさん。
ガナッシュさんが驚いてるうちに私は鎌の刃を外してブーメランの
要領で彼に投げる。

投げた刃はガナッシュさんの右足を深く切り裂き、彼が痛みで硬直
している間にUターンし、持っていた銃を真っ二つにして私の手に
戻った。

ちなみに刃が戻ってくる間にコヨーテさんの右足を棒で思いっきり
殴って折っておいた。

崩れ落ちる二人、しかし目はずっと私から離さずにいる。

『いやゝ大成功？　ぶつつけ本番だったから成功するか分かんなか
ったけど結果オーライだね。』

「デメエ、何しやがった。」

「何故、コヨーテの拳が・・・」

『ああ、あれですか？　簡単な話ですよ、蜃気楼と似たような
トリックですよ。』

私がやったのは単純な錯覚の誘発だ、私と二人の間の床に火種を設
置し、それを一気に発火、つまりは光の屈折をちょびっとだけ変え
て二人の距離感を狂わせるだけ。

コヨーテさんはタイミングよく拳を出したつもりでも、実際には早
すぎて私の顔に届かなかった。

『とまあ蓋を開ければなんてことのない手品みたいなモンですよ？』
「火種だと？　そんなもん一体どうやって・・・」

『それは残念ながら企業機密ですよ、というかそろそろゲームオー
バーにしますよ。』

「くっ！」

刃を付け直し、振りかぶる私を見て、顔を歪める二人、まずは嵐からご退場願いますようか？

『それではさような・・・っ!？』

突如感じた力に、手を止める。

『これは・・・』

感じる場所は方向からしてボスとスクアーロのいる所、何やら嫌な予感がしてきた。

相手はたとえ老人でもボンゴレの長なのだ、今更だが何が起こるか解らない。

それに、聞き間違いかもしれないが・・・・・・・・

ボスの叫びが聞こえたような・・・・・・・・。

『急用が出来ました、さよならです?』

「「な!？」」

驚く二人に目もくれずに走る、嫌な予感が増すばかり。

というよりもそれは、ほぼ確信に変わっていた。

たどり着いた扉を蹴破り、中に入る。

『! !』

「はあ、はあ、満流かあ。わ・・りい・・。」

私を見て謝る傷だらけのスクアーロ、そして、全身氷漬けにされたボスの姿。

『負けたん・・ですねえ。』

こうして、ヴァリアーのクーデターは失敗に終わった。

クーデターの失敗から二週間が経った。

ボスは氷漬けのまま幽閉され、ヴァリアーは無期限の謹慎処分。あまりの過剰な温情措置に周りから猛反発が起こったらしいが、九代目が全く譲らなかつたらしい。

私の事については、あくまでヴァリアーとして任務をこなしていただけと言う事で、特に素性などについては言及されなかった。これにも九代目が関与しているみたい、なんのつもりなのやら。

そもでもって今私が何をしているかと言えば・・・・・・・・

「日本人よ！ 私は帰ってきた！！」

日本にいます？

話が飛びすぎ？ なら簡潔に話すと・・・

一週間で謹慎生活に飽きた。

そうだ、海外に行こう。

そう言えば何だかんだで顔とかバレてないし、抜け出せんじゃん！
皆に話す。

そう言えば飛行機とかどうやって乗るの？ と聞かれる。

え？ 普通に貨物室に忍び込むだけだよ？ と答える。

一日で準備する。

外ではヒッチハイクなどで空港へ。

適当に止まっていた荷物を運ぶ車に乗る。

着いた飛行機の貨物室に侵入する。 ちなみにこの飛行機がどこ行きかは知らない？

それからスヤスヤ眠ることウン時間。

「まさか日本に戻ってくるとは・・・。」

まあとにかく行き先を決めよう。

ネットで検索、自作パソだぜ！

ヴァリアーのアジトで、無駄に高い部品を無駄にふんだんに使って
無駄に高性能に仕上げた。

日本中の市町村の名前が画面上にズラッと並ぶ、目を瞑って適当な
所でクリック。

目を開けるとそこに映った街の名は

「並盛町ね、どんな所かな？」

早速道なりを調べ、意気揚々と歩き出す。

私たちの冒険は、まだまだ続くぜ！！

第八話（後書き）

ガナッシュとコヨーテの戦い方知らないんで、とりあえず勝手に決めちゃいました W W W W W

コヨーテの左義手のフラグ回収してしまった・・・まあ原作じゃ死んでるからいいよね W W W W W

錯覚の件ですが、作者自信あんまり原理をよく覚えてません W W W W W

こんなの出来なくね？ と思った方もいるかと思いますが、ご容赦ください。

最後の方がちょっと手抜きだったかも（汗

さて、とりあえず一段落ついたので、今更ではありますが、ここまでの感想・アドバイス等お待ちしております。

罵詈雑言になっけししまいそうな時は、極力オブラートに包んでください W W W W W

ではまた

第九話（前書き）

ついに日常編（？）に突入！！

第九話

「夜月満流です。趣味はネットサーフィンです。好きな食べ物はラムの香草焼きです。特技は手刀で人を気絶させられることです。宜しくお願いしまーす?」

並盛に来て早一ヶ月半。

なんと今、私は小学校に入学しています!

いや大変でしたよ。なんせ親がくたばってるもんだから家とか入学手続きとかどないせえっちゅうんじゃない、って感じだったけど、パソでちよつと不動産やら学校やらの記録をいじって、ちゃんとお金は支払って無事解決。

家具とか教科書類とか揃えるのに二週間もかかるし、子供って不便だなあとしみじみ思った。

そんで今はクラスで自己紹介の時間。

皆が無邪気に精一杯のアピールをしている所。

いいよねえ、見ていて微笑ましい。幼さとか元気とか無垢な笑顔とか。

このクラスで、というよりこの学校で唯一私だけがドロドロのグチヨグチヨのニチヨニチヨな人生送ってるんだろぅなあ?

この子たちも二十年後には意地汚い大人たちのネチヨネチヨの世界に触れて穢れていくんだね。

ああ、時間の流れとはなんと悲しきかな。

こんなにも純粹無垢な天使達をウンコ臭いクソ野郎共に変えてしまふなんて(笑)

「とっても元気があってよく出来ました、じゃあ次の子ね。」

私の自己紹介を背伸びしたがりな子供の冗談と受け取った担任は普通に進行を続ける。

まあ予想してたから言っただけだね。

やがて自己紹介が終わり、担任が簡単な説明や注意をした後、初日なので今日は解散となった。

しかし子供達は一人でも多く友達を作るべく、周りの人に声を掛けていて、一向に帰る気配はない。

担任がその光景を微笑ましく見て、静かに教室を出ていった。

さて、私も誰かに声をかけようかな？　　と思い、周りをざっと見る。

しかし殆どの子は話相手を見つけ、改めて名前を教え合い、雑談に入り始めていた。

どうやら出遅れたらしい、そう思った矢先、教室の真ん中の列、前から三番目に座っている男の子（因みに私

は窓際の列、後ろから二番目だ）が、誰とも話さずに俯いているの発見。

時々近くの会話に混ざろうと声をかけようとするが、踏み出せ入れずにいるみたい。

なるほど、クラスに一人はいる根暗っ子だね、と言いつつ私は学校生活初めてなんだけど、そんな事は気にしない。

何となくあの子と友達になりたいななんて思い、席を立て近づいていく。

その途中で何故か何人かの男の子に声をかけられたが、やんわりと受け流してその子の所へ辿り着く。

「ねえ、君？」

「えっ!?!? ……あの……ボク?」

声をかけた瞬間すごい ビクッ! っとなつて、見てることちが罪悪感に駆られそうな程に怯えた様子で言葉を返してくるツンツン頭の子。

「そうそう、私は夜月満流だよ。 君は?」

「えと……さ……沢田………綱吉……。」

今にも泣きそうな顔でこちらを見てくる。

というか既に目が若干潤んでるんですけど。

「うん、綱吉君ね? 私の事は満流でいいよ?」

「う……うん、み……満流………ちゃん。」

「そんなに怖がらなくても、別に虐めたりしないよ?」

「ご……ゴメンね! 一人ぼっちで……怖くて……。」

ヤッヴァイ、ダム決壊寸前だよ。

これじゃあ入学早々いじめっ子の称号が付いちゃうじゃないか!

「そ、そうなんだあゝ! じゃあもう怖くないよ? 私が友達第一号だもんね!」

「いいの?」

「もっちろん! じゃああれだ! 友達の証として、今からツナ君と呼ぼう! 友達にあだ名は付き物だよ?」

「友……だち、じ……じゃあ!」

「うん?」

「僕はえつと……みーちゃんって……よんでいい?」

「おお! みーちゃん!! 全然オツケだよ?」

私が笑って了承すると、ツナ君も笑顔になった。
こうして私は、始めて友達と言うのを手に入れた。

ツナ君と友達になって四日経ち、今日はツナ君の家に遊びに来た。
何でも親に友達が出来たと言ったら、早速遊びに来させなさいと言われたようだ。

「ただいまー!。」

「お邪魔しまゝす?」

二人で元氣よく挨拶、すぐさま奥から若くて綺麗な女性が出てきた。

「お帰りなさいツツ君。 あらいらっしゃい、あなたがツツ君のお友達?」

「はい、夜月満流です? 初めまして。」

「礼儀正しいわね、この子の母の奈々です。 ツツ君と仲良くしてあげてね?」

「もちろんです。」

お母さんだったのか、ちょっと年の離れたお姉さんだと思った。

「おっ、その子がツナの友達か。これまた将来有望なカワイ子ちゃん連れて来たな。」

今度は無精髭を生やした男の人、恐らくツナ君の父親っぽい人が現れる。

「満流ちゃんって言うんですって。ホントに可愛いわよね、ウチのツツ君も隅に置けないわね。」

「まったくだ。まさかこんなに早く未来のお嫁さんを連れて来るとは、我が息子ながら恐れ入ったな。」

「お、お母さんお父さんやめてよ!!」

ツナ君が顔を真っ赤にして叫ぶ。

細かくは分からなくとも、お嫁さんの単語でなんとなく理解出来たのだろう。

ツナ君の様子を見て二人が笑い、ツナ君がそれを見てまた怒鳴る。果てしなく微笑ましい光景に、私も声を出して笑う。

「み、みーちゃんまで!」

「ふふっ・・・ご、ごめんツナく・・・ふふっ、あははは!」

その場が笑いで包まれ、その中で一人涙目で怒鳴るツナ君。

「おお、なにやら楽しそうだな。」

「あ! お爺ちゃん!」

突然現れたもう一人の人物、ツナ君がその人に気づいた途端、嬉しそうに駆け寄り、その人も近づくツナ君を抱き上げ、優しそうな笑顔を向ける。

しかし、私はその老人の顔を見て、体が凍りついた。

幸いにも、老人は意識をツナ君に向けており、両親も同じくだった為、私の異変には気付かれていない。

その間に何とか外面だけは落ち着きを取り戻し、しかし頭の奥では困惑が残っている。

仕方ないだろう、だって

「お爺ちゃん、ボクの友達連れてきたよ！」

「おおそうか、どれどれ。」

私の目の前に

「初めまして、満流ちゃんだったね？ 私はツナ君のお爺ちゃんですね、昨日からこのお家にしばらく住んでいるんだよ。」

ボンゴレ？世がいるんだから。

第九話（後書き）

感想お待ちしております（
^
|
^
）
／
~
~

第十話（前書き）

十話まで来ちゃったよ。

どうせ二・三話程度で飽きて終わると思ったのに W W W W W W

ここまで来たからには突っ走るぜ！！（終了フラグ W W）

ではどうぞ。

第十話

衝撃の再開（？）からさらに四日。
今日もツナ君の家に遊びに来た。

「お邪魔しまーす？」

「おお、満流ちゃんか、いらっしやい。」

笑顔で迎えてくれたのはボンゴレ？世。

あの後何とか平常心で話をして、その間に頭の中で何故九代目がここに居るのかと言う事について考えたが、結構すんなりと答えがでた。

そう言えば前にボス以外の後継者候補の話を聞いた時に、日本人が一人だけいたのを思い出したのだ。

他の人達と違ってまだまだ子供、しかも一般家庭で過ごしていると聞いて、その時は興味が無くてすぐに忘れていたが、今思い返せばその子の名前が沢田綱吉だった。

だけど、最初こそ驚いたものの、しかしだからと言って別にどうこう変わりはない。

もう友達になった訳だし、そもそもツナ君がマフィアとか無いでしょ。

出会ってからまだ一週間だけど、ツナ君の能力の低さはもう常軌を逸したものだった。

体育の時間では毎週二回は転び、バトンは受け取るどころか弾いてどっかに飛んでいたり。

勉強では1+2+3を321と答えたり、カタカナの練習の時間ではリンゴをウンコと書いたり。

給食の時間では時分の分を貰って席に戻るとき、何もないのにまるでバナナでもあったのかと言う位に見事にすっ転んで、中身がピンポイントで頭に降り注いだり、。

そんなこんなで一日五回以上は大泣きして、意地の悪い奴らから付けられた呼び名がダメツナ。

いくらまだ小学生だからと言ってもこれは酷いよ。

これがボンゴレのボスになるとか、サマージャンボ五回連続一等賞当てるくらいの偉業だと思う。

という訳で悶々とした疑問は晴れ、いつもどおりに過ごそうと結論した。

九代目には何だかんだで素性知られてないし、問題なし。

むしろ今ではすっかり気に入られ、私もツナ君みたいにお爺ちゃんと読んでいる。

「みーちゃん、いらっしやい！」

「ツナ君、遊ぼう。」

「ほっほっほ、二人は本当に仲がいいのう。」

二人で奥に走る、それを笑顔で見送る九代目。

いやー、正直子供に混じって生活するのもどうなんだろうって思ってたけど、やってみると案外楽しいもんだねー。

え？ 人を殺しておいて云々？

んなもん知ったこっちゃないね？

たかが六才の小娘に殺られる程度の弱者の癖にマフィアなんかになるからいけないんだよ、自業自得ってやつだねー。

そんな奴らの事で何で一々私が行動に制限付ける必要があるの？

そっちの方がイミフだよ。

「お！ ツナよー、今日も嫁さん連れ込んで愛を育んでるのか？」

さすが俺の息子!!」

「お父さん!!」

ツナ君がお父さんにかかわれ、真っ赤になって怒鳴る、これももはや通例になってる。

私と奈々さんがその様子を傍で眺めるのもいつも通り。

学校の方も、男女共に友達が多く出来て、勉強については言うに及ばず。

まさに順風満帆な学校生活と言える。

ツナ君も頑張っではいるが、ダメツナが定着し、イジメとまでは行かないけど、からかわれキャラになっている。

ああそ言えば、あんまり関係ないけど現在私はヴァリアーにいた頃と違い、髪は首の後ろで二箇所に纏め、前髪は顔がちゃんと見えるぐらいまで切った。

さすがに貞子みたいに顔見えなかったら怖がられるしね。

「みーちゃん! かくれんぼしよー。」

「おっ!」

声をかけられ、ツナ君の元に駆けていく私。

平和だね~~~~~。

な〜んて思っていた時期が私にもありました。

「初めまして、宮城静菜みやしろしずなです！ みんなよろしくね！」

入学してから既に半年、季節は秋。

飛びすぎ？ 仕方ないよ、書くこと無かったんだもん。

「宮城さんは親の事情で皆より遅れて来ちゃったけど、仲良くしてあげてね？」

【は〜〜〜い！】

そう、突然ウチのクラスに転校生がやってきた。

まあそこはいい、世の中色んな事情をもった人がいるのだから、時期外れだからと言ってそこまで特別意識しなくてもいいだろう。だが問題なのは

「それじゃあ宮城さんは一番後ろの席に座ってね。」

「はい。」

窓際から二列目の最後列、つまり私の右斜め後ろ、ということ。

そこまで歩いていく宮城さん、しかし彼女の視線は、この教室に入った時から一人に固定されているのだ。

「……（ニコッ）」

「!!」

笑いかける宮代さん、そして半分怯え、半分羞恥の割合で僅かに赤くなって目を逸らす……ツナ君。

そう、宮城さんは、ずっとツナ君だけを見ているのだ。

あ、別にフラグじゃないよ？

ツナ君に友達が出来るのいいことだし、もし宮城さんがツナ君にそう言う感情を持っていたとしても、ツナ君にも春が来たなあと応援したいくらいだ。

私が問題視、というか疑問視？ しているのは 宮城さんの雰囲気だ。

一目見た瞬間に一般人じゃないのがわかった。

少なくとも何かしらの力を持っている事は明白、しかもツナ君に送る視線が、何というか、妙なんだよね。

好意的な部類ではあるんだけど、初対面とは思えないような親しみが込められているような、そんな気がする。

知り合いかな？ とも思ったけど、ツナ君の反応を見ると少なくともツナ君自身は見覚え無さそう。

後で聞いてみようかな〜とか思っている内にチャイムがなり、担任が出ていくと、宮城さんの元にクラスの皆が殺到する。

まあ恒例の質問タイムって奴だね、私は集団を迂回してツナ君の元へ

「ねえツナ君、宮城さんって知り合い？」

「え？ ううん、知らない。」

「でもなんか笑いかけてたけど。」

「め、目がたまたま合ったからじゃない!？」

思い出したのか、また赤くなるツナ君。
しばらくこのネタで遊ぼうかな〜？

「ねえ、沢田綱吉君だよ？ 初めまして。」

「「へ？」」

突如話しかけられて、振り向くと、そこにはいつの間にか宮城さんがいた。

その後ろを見ると、質問していた集団を抜けて態々こっちに来たらしい、何故に？

「う、うん……よろしく。」

「うん、よろしく。私のことは静菜って読んでね。」

ニッコリと、先程と同じく笑いかける宮城さん。

花のような笑顔ってこういうのを指すんだろうなあーと思った。

「う……うん。」

色々限界に達したようで、ツナ君が私の後ろに逃げるように引っ込んでしまった。

むしろツナ君にしては良く頑張った方だ、ツナ君の成長が嬉しくて、つい頭を撫でてしまった。

そのせいか、林檎のように真っ赤になるツナ君、その時、宮城さんが私を見る。

「そう言えばあなたは？」

「あ、私は夜月満流だよ。よろしくね宮城さん？」

まるでいま気づいたかのように聞く彼女に、ちょいカチンとしたが、表に出さずに名乗る。

「ふうん、まあよろしく。」

随分おざなりな態度、ツナ君の時とは大違いだ。

顔は笑顔なんだけど、視線が物凄い上から目線なのだ。

値踏みするような、比較するような、そして勝ち誇った視線へと変わり、最終的に見下すような視線に落ち着いた。

明らかに七歳児がするような目じゃないんですけど

「それよりもさ、綱吉君、私とお話しよう？」

「え……えっ……と。」

話かけられて困惑し、私に縋るように目を向けるツナ君。

いや、私嫌われてるっぽいんですけど、今も視界の端で私にお邪魔虫に向けるような目を向けてるんですけど。

しかし見捨てるわけにも行かず、三人でお話する事に……

その間、邪魔そうな視線をチラチラと向けられる羽目になりましたとき。

第十話（後書き）

現れた転校生、果たして彼女の招待は！？

まあキーワード見りや一発なんですがW W W W W W W

それでは次回。

感想お待ちしております（^ | ^）／~~~~

第十一話

ふふっ、来たわ。

とうとう来たのよ、何がって？　それは

「初めまして、宮城静菜です！　よろしくね！」

私の時代が！！！！

そう、わたしは転生者よ！

死んだ後の世界で神に会い、力を授かってこの世界にやって来た。神が言うには、ここはリボーンの世界に限りなく酷似した世界。

多少の差異はあるけど、人物や辿る運命は私の知る世界と同じだそうなので、全く問題ないわ。

能力は、最初はチートな能力を貰おうとしたけど、世界の根本を覆すような力は無理、つまりは他作品の能力は与えられないそうで、ならばと雲雀並みの身体能力、あと私の属性を大空にして欲しいと頼んだ。

まあ子供が雲雀レベルはさすがに変だから徐々に上げるようにした。それでも常人なんて遥かに及ばないけど。

この二つで能力に関する特典は限界を迎えたそうで、案外大した神じゃないなあと内心思いつつも、転生させてもらった。

ここまで言えば分かるでしょうけど、私は生前リボーンが大好きだった。

特に主人公のツナは、最初は頼りないダメ男だったけど、戦いを経ていく内に段々と逞しくなっていく所が大好き。

ハイパーモードの時のツナはもう堪らない程カッコイイ！　白蘭戦の時なんかもう興奮しっぱなしだった。

だから転生の話をされて、まっ先にリボーンの世界にして欲しいと頼んだ。

生前の私は、地味の一言に尽きるような見た目だったので、勿論とびつきり可愛くしてもらった。

転生する時期はツナが小学校の頃、中学だと京子に惚れちゃってるしね。

まあそれでも今の私なら乗り換えさせる事も余裕だろうけどね！
念には念をとてやつよ。

さて、今は転校初日、名前の関係でツナと席は離れちゃったけど、今のツナに仲のいい友達なんていないしね。

きつと寂しと思ってるだろうから、そこに可愛い女の子に優しくされたらイチコロの筈、完璧！！

チャイムと同時に沢山の子供たちが群がってくる、特に男子が積極的だ。

早速容姿の効果が効いてるみたい、まあこんな子供なんかには無いんだけど、これからの事を考慮してある程度の友人関係は作っておかなきゃね。

浴びせられる質問の数々に適当に答えながら、なんとなしにツナの方を見る。

さっき笑いかけた時は顔を赤くして目を逸らした姿が可愛かったな、あれで私を意識して見ているかもしれない、と、ツナを視界に捉えた時、衝撃が走った。

女の子が一人、ツナと話していて、ツナの顔が赤くなっているではないか。

なによあの女！！ 私のツナに馴れ馴れしいのよ！！

思わず立ち上がり、邪魔な子供たちを押しつけてツナと女の所に行

く。

「ねえ、沢田綱吉君だよな？ 初めまして。」

「「え？」」

驚いた様子で振り返る二人、キョトンとしたツナの顔が可愛い。女はやけに意外そうな顔をしていて、マヌケヅラになっていた。

「う、うん……よろしく。」

「うん、よろしく。私の事は静菜って呼んでね。」

ここで飛びっきりの笑顔を見せる。

女のことは最初から見えていない、私のこれからの人生においては只のモブキャラでしかないんだから。

案の定赤くなるツナ、やっぱり可愛いなあ〜と思っていたのも束の間。

なんとツナは横にいたあの女の後ろに隠れ、縋り付いている！？

しかもツナの頭を女が撫で、ツナの顔が真っ赤になってる。

なんなのよこの女は！

とりあえずコイツが私とツナが仲良くなる上で障害になるのは確定ね。

「そう言えばあなたは？」

「あ、私は夜月満流だよ、よろしくね宮城さん？」

そう言って笑顔を向ける夜月とかいう女。

「ふうん、まあよろしく。」

適当に返事をして、観察する。

そこらの子供と同じでヒョロい体、隙だらけだし、容姿なんて私と比べるのも可哀想だ。

見れば見るほどクラスメイトCとかの凡人じゃない。

あんたとツナは住む世界が違うのよ！ ただの一般ピーポーが調子に乗んなってのよ。

「それよりさ、綱吉君、私とお話しよ？」

「え・・・えっ・・・と。」

またもや夜月に縋るような視線を送るツナ、私は邪魔そうな視線を向けるが、夜月は空気も読まずに参加してきた。

やっぱりこんなガキに空気を読ませようってこと事態が無理な話ね。結局その後も、邪魔女がいるせいで、ツナと余り会話が出来なかった。

ただの凡人の癖に！ その内思い知らせてやるわ！！

「はあああああ~~~~~」。

学校からの帰り道、私は人生最大の溜息をついた。

宮城さんが来て二日、なんか最近このフレーズ使いすぎじゃない？
彼女は暇さえあればツナ君に話かけ、しかしその度にツナ君は私の背中に隠れると言う悪循環に陥っている。

二人の時ならまだしも、今日なんか、一人の時に話かけられたツナ君が、丁度トイレから帰ってきた私を見て、あからさまにホッとした顔で駆け寄ってきたのだ。

目に見えて彼女を避けるツナ君、何故か理不尽な程に睨まれる私。
なんで私が悪いみたいな視線を向けるかね、懐いてもらえないのはそっちの落ち度でしょって話ですよ。

だがしかし、もしツナ君が私に依存している、とかいうのだったら話は別だ。

彼女の事はどうでもいいが、ツナ君が他人との交流を疎かにするのはいかんよ。

「ねえツナ君？　どうして宮城さんの事避けてるの？」

「うーん、よくわからない。」

「他の人と話すのがイヤとか？　私以外の子とも話したほうが・・・」

「ううん、そうじゃなくて、上手く言えないけど、嫌なんだ。」

「そっか。」

どうやら彼女限定らしい、じゃあ問題ない。

いや、あるっちゃあるけど、彼女一人と上手くいかなくてもツナ君の人間関係に大きな影響は無い。

幸いあと半年もすればクラス替えて別々になる可能性は大だし、他の子と友達になればいい。

「じゃあツナ君、また明日ね？」

「うん！　バイバイみーちゃん。」

てを振ってツナ君と別れる。

明日はもう少しマシな日常でありますように。

あれ？ フラグ？

「夜月さん、ちょっといい？」

見事に回収してしまった・・・。

翌日、昼休みに給食を食べ、皆が校庭に遊びに行く時間。
珍しく宮城さんが私に、それも自主的に話かけて来た。

これがフラグの力か！

「うん、いいけど。どうしたの？」

「話があるか、付いてきてもらえる？」

「わかった。ツナ君、後だね。」

「う、うん。」

不安そうなツナ君を残し、教室を出る。

そのまま校庭に出て、さらに歩き、その方向にはなんと体育館。

まさか、小学一年生にして初呼び出し!?

テメェ調子乗ってマジムカつくんですけどお、とか、いいから飛べよ!、とか言われて、あり金全部絞り取られるという、幻の学校イベント!

最近の子供は進んでるとは言われているけども、七歳にしてもう金銭に対する欲が芽生えるなんて・・・。

きっとこれから体育館裏まで行き、大人数に囲まれ、将来性の欠片もない不良連中に身の程を弁えないデカイ態度でガン飛ばされながら金を要求されるに違いない!!

私の予想通り、ついたのは体育館裏。

校庭で遊ぶ子供たちの声が遠くに聞こえる。

しかし予想していたようなヤンキーな子達はいない、茂みにでも隠れてるのかな? と思ったが、人の気配は私達以外には無し。

まさかとは思うがワンマンアーミーなのか。

「ここならだれもないわ、さて、単刀直入に言うけど。」

振り向いて私を見る宮城さん。

いつも以上に見下すような目を、しかも今日は隠そうともせずに露骨に向けてくる。

まあ全然隠せてなかったけどね。

「あなた、もうツナと関わるのやめなさい。」

「・・・・・・はい?」

第十一話（後書き）

転生者のうざったさを上手く表現出来ていたでしょうか？

早くも死亡フラグ W W W W W

キーワードでも言いましたが、この作品に置いて、転生者は脇役の雑魚です。

なので一人の出番はそんなに長くありません。

例外はいつか出るかもしれませんが W W W

ではまた

第十二話（前書き）

転生者の運命やいかに！

第十二話

「えっと、ごめんね。 もう一回言ってくれる？」

「はあ？ 耳でも腐ってんの？ まあいいわ、ツナともう関わるな
って言うてんのよ。」

言葉の意味が理解できず、聞き間違いかと思い、聞き返したが。
帰ってきたのは先程と同じ、むしろオマケまで付けて打ち返された。
なんかもう隠す気はこれっぽっちも無いみたい。

「とりあえず、何でそんな事言われるのかな？」

「あんたに説明したって理解できないわよ、ツナとあんたじゃ住む
世界が違うんだから。」

ツナって呼び捨てしてるし。

もう完全に化けの皮が剥がれてるんですけど。

というかツナ君の住む世界？ もしかしてこの子マフィア関係者？

「住む世界ってどう言う事？」

「だから言っても分かんないつつたでしょ！ いいからあんたは
私の言うこと聞けばいいのよ！！！」

カッITCHーン。

さすがに今のは来ましたよ、何コイツ？ 何様？

完全に下に見られてるのは知ってたけど、こっちにも限度ってもの
があるよねえ。

死にたいの？

「嫌だよそんなの、あんたに言われる筋合い無いもの。」

「はあ！？ 調子乗ってんじゃないわよ！ 痛い目にあいたい訳！？」

「そっちこそ調子に乗んな、ツナ君に避けられるような残念女がグチグチいつてんじゃないやねえぞ？」

「このっ！！」

安い挑発に乗ったアホが突っ込んでくる、やっぱり一般人とは思えないような速さだった。

「おっとお。」

「なっ！？」

でも私には当たらないけどね？

一般人よりってだけで、今迄殺って来たマフィアの下っ端に毛が生えた程度でしかない。

掠りもしないよ。

右に避けて、すかさずアホの足の前に自分の足を置く、あとは勝手に引っ掛かって転んでいくだけ。

しかしアホは辛うじて受身を取り、体勢を立て直した。

「お、やるねえ。 とてもただの七歳児とは思えないよ？」

「くっ、このお！！」

馬鹿の一つ覚えみたいに突っ込んでくる。

それを避けては転ばせ、避けては転ばせを繰り返し、五回くらいやった所でアホが距離を取った。

降参・・・なわけないよね。

「ふふっ、なるほどね。 そうか、そういうことか！！」

「はい？」

突然肩を震わせ、俯いてブツブツと何か喋ってるアホ。
地味に怖いんですけど、もしかして転んで頭打っちゃった？

「あんたも転生者ね!!」

「はい？」

何回私に「はい？」って言わせれば気が済むんだこのアホは、しかも今度は意味不明な単語が。

「もう誤魔化しても無駄よ！ 特典で身体能力を上げてる私が、ただのガキにやられる訳が無いもの!! 大方相手の動きを読む類の特殊能力をもらってるんでしょ!？」

「え〜〜と・・・。」

これは・・・ツツコミ待ちなんでしょうか？

だとすれば何て高レベルのアドリブなんだ、ヴァリアーの幹部である私ですらついて行けない程の無茶ぶりだよ!？

次元が違いすぎる、ある意味完敗だ。

「とりあえず、カメラはそこですか？」

「まだしらを切る気？ どうせあんたも神に転生チャンスを貰って、この世界でツナや他の男達を落とそうってつもの、前世がグダグダだったブスでしょ!？ ツナはあんたには渡さないんだから!」

「・・・・・・・・・・」

コメントが浮かばない・・・。

というか・・・何？ もしかしてこの人・・・マジで言ってるの？
リアクションに困るところの騒ぎじゃないんですけど!？

まさか転校生は究極DQN! だったなんて、人生って何が起こるか

分からないね。

「もういいわ、あんたはここで殺して、欠片も残らずに燃やし尽くしてあげる。」

「随分物騒な話になってきたね、その年で犯罪者になりたいの？」

「死体が見つからなければ行方不明で迷宮入りよ、問題ないわ。」

「死体を隠し通すのってそんなに簡単じゃないよ？」

「はあ？ 何言ってるの？ そんなのこれで一発解決じゃない。」

そう言ってアホは手の平に、死ぬ気の炎を灯した。

「!? それは！」

「驚いた？ そうよ、私の炎は天空の属性、凡人とは違う選ばれた人種にのみ宿る炎よ！」

アホが何か言っていたが、私は聞いてなかった、いや、聞けなかったのだ。

それほどの衝撃だったのだから。

目の前の光景が信じられない。

嘘だ、有り得ない。

だって……だって……。

「ちつつつつつつさ!!!!!!!!!!!!!!」

思わず大声が出てしまった。

何あれ、小ささ!!

服の袖にライター三本くらい仕込んでんじゃね？　ってレベルの小ささなんですか！？」

「というか何？　あの勝ち誇った顔？」

これで勝負は決まったと言わんばかりの笑みを浮かべているあのアホは何？

スッゴイ痛々しいんですけど！

最初は驚いたけど、あまりの小ささに一瞬で吹き飛んだよ。

「えーっと、勝ち誇ってるってこ悪いんだけど、そのピンポン玉サイズの炎で何する気？」

「あんたの死体を燃やすのよ、これなら燃えカス一つ残らないわ。」

「まあ、それぐらいなら出来そうだけでも……。」

なんか段々可哀想になってきた。

これじゃあこっちが弱いものイジメしてるみたいじゃない？

そんなの……

「死になさい！！」

そんなの……

「ツナは私の物よ！」

楽しすぎるじゃん？

「……え……？」

アホが叫びながら私に突っ込んで来た瞬間、静かに響く四つの風切り音。

宙に浮く感触に、アホは惚けたような声を上げ、とっさに地面に足

を着けようとする。

しかし、足は体を支える事は無く、アホはそのまま地面に落ちる。途中で手で支えようとしても、何故か全然前にこない。

地面に落ちて数瞬後、何かが地面に落ちる音が四つ分、自分の周りで聞こえ、アホはそれを見る。

「え．．．え？ う．．．そ．．．」

それは自分の右腕、その隣に左腕。

すぐ横を見ると、そこには左足、反対側には右足が転がっていた。それを見た後、自分の体が濡れている事に気づき、地面を見ると。自分を中心に広がる血溜まりがあった。

「あ、ああ．．．あああ．．．ぐぶう！？」

「だあめだよお？ こんな所で叫んじゃあ、流石に人が来ちゃうよゝ？」

叫びを上げかけたアホの口に、ハンカチをねじ込む、ついでだから切り落とした足の靴下とかを脱がして詰め込む。

アホのポケットに入ってたハンカチでナイフを拭き、服の内にしま
う。

「これで喋れないよねゝ、さあてどうしようかなあ？」

「ムグッ、ムグウィウゝゝ！」

涙と鼻水と血で顔をぐちゃぐちゃにしながら喚くアホ。
これじゃ話が出来ないので、仰向けにして腹に一発？

「グブウッ！！」

「うるさいから喚かないでくれる？ 次喚いたら一回につき三発殴

取った瞬間に咳き込むアホ。
叫び出した時のために、残った足から靴下を脱がして手に持っておく。

「じゃあ質問するからね？　嘘ついちゃだめだよ？」

「ひっ、・・・は・・・はいっ・・・」

すっかり怯えちゃってるねえ？

まな板の上の魚みたいにビクビク震えちゃって、S心をくすぐられるよ。

「まずあんたの言ってた神とか転生者とかって話だけど、あれってマジで言ってたの？」

「は、はい・・・本気・・・です。」

「ふうん、じゃあそれについて詳しく話せる？」

「はい・・・。」

そこからアホは語りだす。

自分が生きてたのはことは別の世界であり、アホはそこで一度死んで身で、死後に神と名乗る人物と遭遇し、力を与えられてこの世界に来了た。

この世界が、元の世界でアニメや漫画として知られる物語と殆ど同じ世界であり、アホはその物語が大好きだったからこの世界に来了たと言う事。

だから、多少の差異はあれ、これから起こる事の大筋は知っているらしい。

まさにDQNとしか言えないような話が披露された。

「こんな・・・感じ・・・です。」

「ふうう~~~~ん、別の世界、ねえ〜。それで、あんたの知る物語には私と言う存在が居なかったから、私の事を自分と同じ転生者だと思った、と。」

「は、はい。」

たしかに辻褄は合うね〜。

アホがツナ君のことを一方的に知っていたのも、私に敵意を向けるのも、必要以上にツナ君に関わろうとするのも、それなら一応筋が通る。

まあこんなもんか、これ以上は聞く必要ないし。

「そっか、それじゃあ質問は終わりね。」

「ほっ・・・。」

「じゃあお別れね?」

「っ!?!」

即座に手に持っていた靴下をアホの口にねじ込み、封じる。

「そんな面倒な存在はさっさと殺っちゃうに限るしね? 排除させてもらいま〜す。」

「ム、ムググッ! ムウウー!!」

「ああ、言っとくけど未来の情報で取引しようってつもりなら意味ないよ?」

「っ!?!」

「だってあなたが言ったんだよ? ここはあくまで酷似した世界だって。変化が起こるかもしれないのにそんな不確かな情報は変な先入観植え付けちゃうからね、万が一あなたの言う通りになるとしても、未来の事知っちゃったら楽しくないじゃん? 人生は何が起るか解らないから面白いって習わなかったあ〜?」

言いながら私は、手に炎を灯す。

アホが出した物とは比べ物にならないサイズで、しかし騒ぎにならないように二十倍程度に抑えて。

それを見て、再び震えながらボロボロと泣き出すアホ。

いい加減視界から消えてほしいなあ？

「ぼく、いい？」

「……………っ！！！」

一気に燃えるアホ、叫ぶことすら出来ず、無力に灰になっていく。
灰すら燃え尽きて、残るのは僅かな黒い染みのような跡。

「うわっ！ チャイム鳴るまであと一分切ってんじゃん！ 急げ？」

クラスに走ってたどり着き、担任にアホは気分が悪くて早退したと伝えた。

数日もすれば行方不明で騒ぎになるだろうが、アホが言ってたように死体が見つからなければ迷宮入りだ。

私は最後に会っていたとして事情聴取はされるだろうが、まさか七歳児が犯人だとは思わないだろう。

疑われたとしても、証拠が無ければ無意味だし、まさに完全犯罪だね？

久しぶりにスッキリした気持ちで授業を受けましたとき。

第十二話（後書き）

と、言うわけで転生者第一号は無様に退場です W W W W W W W W

コイツうぜえええええ！ っと思っていた方々にスッキリしてもらえたでしょうか？

感想まってまゝす（＾　　＾）／～～

第十三話（前書き）

今回は会話が多いです。

説明大半ですので、退屈させてしまうかも!？

第十三話

「あれ？」

目が覚めるとそこは広い草原だった。

見渡す限りの緑に、咲き誇る綺麗な花々、美しい青空に、大小様々な雲が浮かんでいる。

そんな世界を、気持ちのいい風が時より吹き抜けていく。

「いや、どこやねん。」

思わず関西弁になってしまった。

夢の中だとしてもおかしいよ、何で私がこんな爽やかな夢見んの？
私の見る夢って言ったら血なまぐさい死体の山の頂点で片手に生首
持ちながら延々と高笑いしてるのがデフォなのに。

180度どころか540度くらい違う夢やん？

《起きたか・・・》

「？」

突如として世界に響く声。

周りを見渡すと、少し遠くの地面に半分埋まった岩の上に、一人の
青年？ が座って、空を見上げていた。

その人に近づき、岩の傍まで来ると、青年がこちらを向く。

「誰ですか？」

《私か、私はそうだな、君らの言葉で言うと、神だな》
「・・・・・・・・」

これ以上ないほどにキャラが粉々に砕け散ってるけど。

《何でいきなりグーパン!? しかも顔面!? 俺お前に何かしたか!!!?》

「とぼけてんじゃねえよこのクソ神野郎? あんな面倒なビッチ女こっちに送り込んで置いて何もしてねえとは言わせんぞ〜?」

《な、なる程そう言うことか。ならまず最初に言っておくが、アレを送ったのは俺じゃない。》

「へー、神様のくせに僕は悪くありませんですかあ? 随分無責任な駄神もいるもんですねえ。」

《いや、ホント、マジで俺じゃないんだって。やったの下の連中なんだって。》

「うわっ、出たよ・・責任部下に押し付ける気だよこの人、こんな大人にだけは成りたくない典型的なタイプだよ。」

《ぐふっ!》

胸を抑えてくの字になる神、大分堪えた様子で。

「まあ、弄るのはこれくらいにしてあげるから、早く本題に入ろうよ。」

《始めからそうしてくれよ、まあいいか、ここにお前を呼んだのは他でもない、お前に頼みたい事がある、夜月満流。》

「ほお〜神直々の頼み事ですか〜、結構凄いいんじゃないですか?」

《その通りだ、だから心して聞いてくれ。》

なんかやる気無くなったな。

人にモノを頼む立場の分際で何? この上から目線。

頼んでやるから有り難く思え的な。

「とにかく概要だけでも聞きますか。」

《ああ、まず先程も言ったが、あの転生者を送ったのは俺の下に就く下級神の一人だ。ちなみに俺は神達の中でもトップの座についている存在ね、つまり最高神とか創造神とそんな感じの奴。何故お前に会いに来たかと言うと、簡単に言えば、お前に転生者を狩って欲しいからだ。》

「何故に？」

《最初から説明する。まずお前も転生者から話を聞いただろうが、この世には幾つもの世界が存在し、ファンタジーやSFの世界、それらのパラレルワールド等、人間の数の概念では計り切れない程のおびただしい数の世界がな。》

それらを区分けして、それぞれの神が管理するのがこの世のシステムだ。

しかし、神といえどもミスはある、それによって手違いで死んでしまった者を、上級神以上の神がその者のために好きな世界に、時には新しい世界を作って第二の人生を与えるのが本来の転生だ。》

「ふむふむ。」

段々シリアスな空気になってきたんだけど。

《しかしある時期から、下級神や一部の中級神が暇潰しの為に、死んだ人間を既存の世界に転生させるケースが爆発的に増えている。》

酷い時には、本来死ぬ筈のない者をワザと殺してまで転生を行う奴もいる。》

「うわー。」

《当然そんな事をすれば、生命の循環に乱れが起き、やがて転生者で溢れた世界は崩壊する。》

「じゃあそもそも転生のシステムそのものが危険なんじゃ？」

《いや、さっきも言ったように、その人物用に新しい世界を構築すれば、たとえその者が強大な力を要求しても害はない。だが、中

級神以下の神には世界を想像する程の力は無い、だから既存の世界に無作為に放り込むアホ共が多い。≫

「なんで上級神とかあんたが何とかしないの？」

《転生者とは言え、一度世界に組み込まれた存在を無理やり取り除くのは危険だ。簡単に言うと、ジェンガのラストスパートで傾いている側のパーツを抜き取ろうとする位に危険だ。≫

「なんと・・・。」

《そして、そう言う感じで転生した奴らというのは、大概が自分は物語の主人公になった気分になる事が多い、というかほぼ九割がそうだ。お前が殺した奴なんかはその典型だ。≫

「面倒な奴らだね。」

《そうだ。上級神以上の神々は、この事態を重く見て、議論した結果。現地の者に協力して貰うことにしたんだ。取り除けないなら殺して強制的に生命の循環に戻すしかないからな。≫

「なる程、つまりはこの世界で選ばれたのが私だと。でも聞く限りそいつらってかなりの力を持ってるって事だよな。あのバカ女は雑魚だったけど。」

特典とか思い通りの力貰うとか、チートでしょ。

《いや、実はそれについてはさほど問題じゃない。≫

「なんで？」

《さっきも言ったが、中級神以下の神々には世界をどうこうする程の力は無い。よってその世界の根本を揺るがするような強大な力を与えられないんだ。≫

「なる。」

《それにお前は这个世界の中ではトップクラスのチートだからな、元々の人生がただのオタクや中二病末期患者が大半の奴らに負ける事はよっぽどの事がない限り無いさ。≫

失礼な、人を化け物みたいに。

「最後に、何で私？」

《お前がチートで、先に転生者に遭遇したってのもあるんだが、最大の理由は、最後に転生者に言った言葉だな。》

「なんだっけ？」

《「人生は何が起こるか解らないから面白い」だよ、中々言えるもんじゃないさ。》

「言うだけなら誰でも言えるでしょ。」

《かもな、でもお前は転生者が未来の知識を持っているのに欲しがらなかった、これだけで口先だけじゃないって分かる。この依頼をする人間には、転生者に接触することで手に入るメリットに目がくらまない人物である事が最も重要だからな。》

「確かにそう言う意味じゃ適任かもね、まあ納得。」

《勿論、出来る限りのサポートはするつもりだ。例えば、お前を転生者を見たら一目で判別出来るようにしたり、近くにいたらある程度感じられるようにしたりとかだな。》

それは確かに便利だ。

近づく奴を一々疑うのなんて面倒だし。

「いいよ、引き受けてあげる？」

《助かるよ。改めて、よろしくな、満流。》

差し出された手を握り返す。

「任せて！ グダグダ長ったらしい説明だったけど、要はあんたら上級神共の管理不行き届きと言う名の職務怠慢の尻拭いをしてくださいって事だもんね！ バッチリやってあげるよ？」

《グッハアッ!!》

弾丸に撃たれたかのように仰け反って倒れる神でした。

第十三話（後書き）

誤解が生まれぬよう、詳しく説明したかったので、こうなりました。

第十四話

「おはよう、みーちゃん！」

「おはよう、ツナ君。」

駄神共の尻拭いの依頼を受けた翌日、いつもの場所でツナ君と合流し、一緒に登校する。

昨日お父さんにまたからかわれた、とか、お爺ちゃんから手紙が来た、とか、たわいのない話をしながら歩く。

因みに九代目は夏休みの半ば頃にイタリアに帰った。

これから仕事が忙しくなるらしく、しばらくは来れないそうで、ツナ君が大泣きしたなあ。

やっぱクーデターが原因なんだろうなあ、後悔はしないけどね？

やがて学校に到着し、教室に入ると、何人かの男子が私達を見て、ニヤリと笑う。

「おい、アイツらまた二人っきりで来てるぞー！」

「カップルだカップル！」

「いや、きつともう夫婦だぜー！」

最近これも恒例となっている。

こう言うのって三・四年生くらいから流行るもんじゃないの？一年で男女が一緒でもさして弄られる事ってあんまり無くない？まあそれだけ私達がいつも一緒にいすぎて事かもだけど。

「ち、違うよ！ みーちゃんとは夫婦じゃないよー！」

「うわぁー、ダメツナの奴赤くなってやんの、照れ隠しだ！」

「リンゴみてーだー。」

真っ赤になって必死に反論するツナ君、しかし見事に受け流されてさらなる追い打ちを受ける。

ここまでパターン化すると逆に面白いな、なのでここは一つ、さらなる刺激を与えよう。

「そう？ 私はツナ君なら夫婦でもいいよ？？」

「み、みーちゃん！！」

【おおお～～～！！！！】

爆弾を投下した瞬間、これ以上ない程にツナ君が真っ赤っかになり、同時にクラス重から驚きの声、黄色い声、一部で断末魔のような叫び声が聞こえた。

「ああ、あう・・・あ・・・な」

言葉が出ない様子、そろそろ限界かなあ、と思った所で、タイミングよくチャイムが鳴る。

担任が入ると同時に全員が席につき、授業が始まる。

しかし、私の右斜め後ろの席、つまりアホ女の席は当然空っぽ。

だが、それを気にする者は居ない。

担任が名前を呼んで出席を確認するが、アホの名前は呼ばれず、素通りしていく。

アイツどんだけ嫌われてたんだよ、と、普通なら思うがそうじゃない。

あのアホは外面はよかったので、それなりに人気はあった、見た目だけはマシだったしね。

これには昨日の神が関わっている。

依頼を受けたあとの話だ、では回想～～～～

《ああ、そう言えば。 お前が狩った女の事なんだが。》

「なに？」

《あいつに関する記憶を皆から消しておいたから騒ぎになることは無いからな。》

「は？ それってダメなんじゃないの？」

干渉出来ないから私に頼んだ筈じゃ・・

《干渉出来ないのは存在そのものだよ、記憶や記録を少し弄っただけだから問題ない。 幸い、あの女が関わった人間は百人に満たない少数だったからな。》

「なるほど、あくまで私が殺した訳で、皆が覚えて無ければ居なかったも同然か。」

つまり社会的な消去の神様バージョンみたいなもんだね。

つとまあそんな感じで、誰もアホの事を覚えていないのです。生まれ変わる前も後も残念な人生でしたね、ドンマイ？
うっとおしい存在が消え、清々しい日常が戻ってきたのさ。

そんでもって放課後、ツナ君と別れ、少し寄り道をしながら、普段行かないような場所を散策中。

ただの気まぐれなんだけどね、たまにはこう言う無意味な時間も乙なもんかな〜と。

こうしていると偶に面白い発見があったりするんだよね。

路地裏の先に懐かしの（まだ七歳だけでも）駄菓子屋さん見つけたり、窓際にスーツを来た猫を飾ったオシャレな店があったり。

他にはいきなり目の前に緑色の穴が出来て吸い込まれそうになったり、黒い和服着た女の人が電柱の上を飛び回ったりなどなど。

いやはや、中々どうして世の中は面白いね。　ちよつと足を伸ばすだけでこんなに楽しい物が見れるんだから。

次は何が出るかな〜と、ウキウキしながら角を曲がると。

「うがぁ!!」

「へへっ、おいおいどうした？　いつもの威勢はよお！」

「調子に乗るからこうなんだよ!!」

「おにいちゃん!!」

満流はランチ現場に遭遇した！

なんと小学生一人相手に中学生が六人ですよ、プライドもクソもあ

ったもんじゃないですね。

少数ボコって自分が強いと錯覚するのが精一杯の哀れな脇役人生のモブ共だね？

しかも子供のほうは見ると限り全身打撲、頭も一箇所が割れてるんじゃない？

さらには妹っぽい子が人質にされてるみたい、なんとまあ。

加減も分かんないバカのか、それとも牢屋にぶち込まれたイドM集団なのか。

どっちでもいいけどね、え〜と、とりあえず携帯で現場全体と犯人共の顔を撮影っと。

ハイ、チ〜ズ？ パシャ☆

「あん！？ 何だデメエは！！」

「つか何撮ってんだコラア！！」

「え？ 証拠写真の撮影だけど？」

なにを当たり前の事を言ってるんだこのバカ共は、そんなことも分からないのか。

兄妹と思われる二人もコッチに気づき、困惑している様子。ちやつちやつとすませるか。

「撮り終えたんで、さっさとくたばれ？」

「何ふざけたこと・グベツ！」

「何しやがっ・ゴハッ！」

「てめっ・ブハアッ！」

「このy・ギャアアアアア！！！」

一人はボディブロー、二人はアップercut、最後は玉蹴りで沈める。

あんまり痣とかが残らないダメージにしとかないと後で面倒だしね、あくまで向こうが全面的に悪いようにしなきゃ。

「ひいっ！ た、たすk・・・ぎゃああ！」

「わ、わるかつt・・・がああああ！！！」

玉蹴りで怯えた残り二名を、お望み通り玉蹴りで沈める。

終わったその場には、気絶してる奴三名、白目を剥いて泡を吹いてる奴三名、啞然とする子供二名、それらの中心に君臨する子供の姿の悪魔一名。

これにて一件落着？

「おにいちゃん！！！」

「きよ、京子・・・」

ってわけでも無いみたい。

妹の方が正気に戻り、泣きながら兄の元へ駆け寄る。

私も行きますか、一応。

「やああ大丈夫？」

「あ、ああ・・・助かったぞ。」

「ありがとう！」

「いいってことよ？ それより君は病院行った方がいいよ？ 頭割れてるし。」

「ああ・・・そう・・・だな・・・ぐうつ！」

「おにいちゃん！？」

立ち上がろうとするが、バランスが取れずに崩れる。妹さんがとっさに支えようとするが、力が足りない。二人が倒れる寸前に、私が支える。

「おっと。」

「す、すまん。」

「これじゃあ自力で行くのは無理っぽいね、私が運んであげるよ。」

「こ、これしきの事はなんでもないぞ!」

「問答無用?」

さっさと背負って病院へ向かう、この距離なら直接行った方が早い。妹さんも後ろから付いてきて、何度も繰り返して私に礼を言ってきた。病院の受付に要件を言い、背負った子を見せると、看護師は慌てて医師を呼び、あの子は担架に乗せられて緊急治療室に入っていた。残された私と妹さんは、傍のイスに座り、終わるのを待った。

その途中で、私が妹さんに、親に連絡したほうがいいんじゃないかと言うと、すぐに親御さんに連絡。

しばらくして親御さんが来て、妹さんと二人で事のいきさつを説明。今度は家族三人に深々と頭を下げてお礼を言われた。

通りかかっただけで気にしないで欲しいと伝え、時間も時間なのでそろそろ帰ることにした。

「ねえ、お姉ちゃん名前はなんていうの?」

「私? 夜月満流だよ?」

「私、笹川京子! 七才だよ!」

「京子ちゃんか、ちなみに私も七才だから、お姉ちゃんじゃないよ。」

「え、そうなの!? じゃあ満流ちゃんって呼んでいい?」

「いいよ? 私も京子ちゃんって呼ぶね!」

「うん!」

「じゃあ京子ちゃん、バイバイ!」

「バイバイ！」

帰り際に、親御さんに証拠写真のデータを渡し、犯人のいる学校の名前を教えて家に帰った。

数日後、とある学校の生徒が児童への過剰な暴行で少年院行きになったと新聞に載ってた。

第十四話（後書き）

まさかの笹川兄妹とのエンカウント！

これがこの先どう関わっていくんでしょねえ・・・

感想まっています。

ではまた次回。

第十五話（前書き）

更新が若干遅くなる恐れあります。

ですがけっしてネタが無いとかではありませんので。

単に作業時間が少なくなるだけです。

第十五話

京子ちゃん達と出会ってからというもの、私はちよくちよく同じようなアホ共はいないかなあゝと歩き回る事が多くなった。

あ、別に人助けに目覚めたとかじゃないよ？

普通の日常ばっかに慣れると体が鈍る可能性があるからね、最低限人をボコボコにする感触は偶に味わっとく方がいいかなゝって？

京子ちゃんと、兄の了平さんとは時々会うことが多い。

驚異的な速さで退院した了平さんは、強くなろうと必死になり、会うたびに「極限に試合だー！」とか言って追いかけてくるようになった。

中々にしつこく、だけでもランニングにはちょうどいいかなゝと思つて黙認してる。

まあそんなこんなで二人とは仲良くなり、近いうちにツナ君にも紹介しよつかなあと思ってる。

すでに日も落ち、七歳の子供が出歩くには遅すぎる時間。

こう言う時、一人暮らしのフリーダムが存分に発揮されるというものだね。

前に大通りを歩いてたら警官に迷子かと言われて、家の場所を聞かれた事があるので、人通りが少ない道を選んで歩くようにした。

「おじょうちゃん、迷子かい？」

まあたまにこう言う酔っ払いとかに絡まれるんだけどね。

万年係長止まりみたいなオッサンが、頭にネクタイ巻きと言うなんともベタな酔っ払いスタイルで、フラフラしながら近づいて来る。

その後ろには部下であろう同じく酔っ払いの会社員AとBがいる。

「ご心配なく、迷子じゃないので。」

「遠慮しないでいいんだよ？ 一緒に親を探してあげるよ。」

「そうそう、なんなら家まで付いて行ってあげるぜ？」

変態ロリコンオヤジ認定ですね。

この対峙してるだけで湧き上がるうざったさは間違いなく変態オヤジの能力と言っても過言じゃない。

今も目の前でゲラゲラと笑っている変態トリオ、物凄くぶん殴りたい。

「ひっひっひ、そんな俺たちと・・・」

「おいおい見ろよ、酔っ払いどもが幼女襲ってんぞ？」

「「！？」」

「おや？」

突然声がしたので、そちらを見ると、不良っぽい中学生がニヤニヤしながら此方を見ている。

偶然通りかかって見つけた光景を楽しんでる、と言うような感じだね。

「あん？ なんだよ中坊かよ驚かせやがって、ガキはさっさとお家に帰んな！」

「今は大人の時間だっつの。」

「そうそう、はっはっは！」

中学生だと知ってまた調子に乗るアホトリオ、なんか展開が透けて見えるようだな

「は？ 何オヤジが調子に乗ってんだよ、おい、やっちまおうぜ」
「さくんせくい。」

「クソオヤジ共でストレス発散く。」

「ついでに有り金貰うか」

「いいねく、それで今夜は豪遊しちゃう？」

「今なら先着一名様には美少女が付いて来ますってか？」

「おめえいつからロリコンになったんだよ。」

「「げえっ！！」」

後ろからぞろぞろと出てくる中学生達、ざっと十人以上はいるかな？
予想外の展開に、一気に青ざめるアホトリオ。

トリオが固まっている内に、周りを囲む中坊集団、妙な手際にちょっと驚いた。

と言うかこの状態って私はどんな立場なんだろう？

なんかもうトリオとのいざこざはうやむやになったし、中坊集団には結果的にトリオを引き受けてもらった形になってるっぽいし。

・・・・・・エスケープしてもいいでしょうか？

「抜き足差し足忍び足くく・・・・。」

「おっと、どこいくんだよ少女ちゃん？」

「ピンチを救ってやった王子様達になんの挨拶もなしかよ？」

「おいおい、お前が王子様なら世の中の八割の男が神様じゃね？」

「ぎゃっはっはっはっはっは！」

作戦失敗、まあ抜け出す気は無かったんだけど。

まずトリオは元からぶん殴る予定だったし、今のでこいつらもとりにあえず病院行き決定。

「それはすいません、おかげで助かりましたく。」

「いいってことよ、このあとちょっと相手してくればなく、へへ

っ。」

「うっわ、こいつまじで幼女趣味に走ってやんの。」

「そういうお前もこの前小学生に声かけてただろうがよ。」

「ちよっ！　言うなっでいったろうが。」

「おいおい人の事言えねえな。」

ますますゲラゲラと笑う、なんかトリオと同レベルになってる気が・

「じゃあもう用済みなんで、さっさと逝ってください。」

【は？】

突然の言葉に全員がキョトンとした顔をする。

その隙に足元にあった石を一気に蹴り上げ、飛んでいった小石五個は、正確に中坊の玉に命中。

五人が退場。

その光景にいち早く正気に戻った四人程が、鉄パイプやらナイフやらを手に襲い掛かってくる。

紙一重で避け、地面に落ちていた鉄パイプを拾って、すれ違い様に一撃（どこにかは最早言うまい）。

これであと三人、あとトリオ。

その時、髪が前に垂れてきて、確かめると髪紐が解けてしまったみたい、しかも両方。

そろそろ古いから買い換えようと思ってたからちょうどいいか。

髪も長くなってきたなあ、前髪も以前みたいになってきたし。

とりあえず今はゴミ掃除しないと。

しかしトリオは既に気を失っている、よく見るとちびってるし。ださっ！！

じゃああとは中坊三人か。

「な、なんだよこのガキ！ バケモンかよ！？」

「言いて妙ですねー、と言うか前はよく言われました。」

「ひい！ く、来るなあ！！！」

「だが断る。」

石ころを蹴って三人とも瞬殺。

またこの前のような死屍累々の光景が広がっている。

なんかパターン化してきたな、もうちょい強いのではないのかな？

「ねえ。」

「？」

またもや後ろから声、振り向くと了平さんと同じくらいの男の子が惨状を見ながらコッチに歩いてきた。

「これ、君がやったの？」

「そうですよー？ か弱い少女を襲う変態共に制裁を加えたところですよ。」

「ふうん、か弱い、ねえ。」

そういう子供の目は、面白い物を見つけたように嫌々な光が灯っていた。

「じゃあ今度は僕の暇潰しに付き合ってよ。」

「え？ いや、そろそろ帰ろっかなあと思って・・・」

「いいよ別に、帰ればねっ。」

「うわっ！？」

いきなり襲い掛かってきた子供。

いつぞやの痛者^{いたしや}一号を思い出す速さだった。（ちなみに痛者とは、痛い転生者の略）

もしかして痛者二号か！？　　と思ったけどこの子は違うね、駄神のおかげで痛者と遭遇したら分かるようになったし、まだ実際にどんな感じた事はないけど、何となくこの子は違うと思う。

しかし痛者一号と違うのは、速さに見合った複雑な動き。

ただ早いだけの雑魚だったアホとは違い、戦いに対する経験がある程度積んでみたいだね。

なんで七歳で戦いの経験積んでんの？　　というのはツッコんだら負けだろうね、やっぱり。

両手に持った木製のトンファーで交互に連撃を繰り出す男の子、後ろに下がりながら全てを避けて……って

「あのー一つ聞きたいんだけど。」

「なに？」

「何故にそんな物持ってるんでしょうか？」

「一番使いやすいからさ、当然だろう？」

「……そう……っすか……。」

そう言う事を聞いたんじゃ無いんだけど、なんかもういいや。

因みにこの間もずっと攻防は続いている。

ずっと避けてるだけだね？

なんというか、終わらせるタイミングを逃した感じ。

いや、やろうと思えば終わらせられるけどね？

「あのー、そろそろ終わらせても？」

「へえ、やってみなよ。」

「え、マジ？　　いいの？」

なんという唯我独尊っ子だ。

困惑している内に再び歩きだす男の子。

このまま逃がしてなるものか！

「待てーい！ 是が非でも名前を教えて貰うー！！」

「やだよ。」

「教えて！」

「やだ。」

「教えなさい！」

「やだ。」

「教えろー！」

「ヤダ。」

「あ、もしかして太郎とかイモい名前だったりとか？」

「・・・」

ピタツと止まる太郎君。

「あれ？ もしかしてずぼs・・・」

「そんなわけ無いでしょ。」

「えー？ じゃあ教えてよ太郎君。」

「咬み殺すよ？」

「咬みつて・・・物理的に無理でしょ。」

猛獣じゃあるまいし。

「・・・君、変だね。」

「はい？」

いきなり変人扱い？ よりにもよってこの太郎君に？

「普通ボクと出会うと全員が怖がって近寄らないんだけど。」

「そりゃ出会い頭にトンファーで襲撃されて友達になろうとか思わないよ。」

「じゃあ何で君は関わってくるの。」

「私の方が強いから?」

「・・・」

「嘘、嘘だから殺気全開で睨むのやめて? ちゃんと話すから。」

「次ふざけたら咬み殺す。」

「はい、まあ簡単に言えば君が面白いからだね?」

「は?」

キョトンとする太郎君、おお、こいつはレアっぽい表情いただきました。

「面白い? どこが。」

「さっきも言ったけど、いきなり襲ってくる子供なんてそうそういないでしょ? しかも太郎君の場合、かなり強い部類だしね、少なくとも同年代ではほぼ無敵なんじゃない? そう言う子と仲良くなくておくと、必ず面白くなる。と思うのですよ。」

「・・・変なの。」

「バッドで打ち返してあげるよその言葉。」

私も人の事は言えないけどね?

「はぁ・・・雲雀恭弥。」

「うん?」

「ボクの名前だよ、次太郎って呼んだら咬み殺すから。」

「うん、わかったよ太r・・・恭弥君?」

「・・・まあいいよ、じゃあボクは帰るから。」

「うん、じゃあね。」

お互いに背を向け、帰路につく。

いやあ、本当に退屈しないよね、人生って？

第十五話（後書き）

連続で原作キャラと遭遇 W W

転生者達を簡単に表すために、適当に略語作ってしまいました（汗
いや、これは無いだろう。 と思ったら言ってください、やめま
すんで W W W W W

それではまた次回。

第十六話（前書き）

四日ぶりです w w w w w

遅れて誠に申し訳ありません m () m

ではどうぞ

第十六話

クリスマス・イヴ

ある場所では順風満帆な家族が笑顔に満ちた暖かい家庭で過ごし。

ある場所ではリア充達が愛する異性と共に聖なる日を迎え。

ある場所では独り身のサラリーマン達が肩身の狭い思いをしながら道の端っこを歩き。

ある場所ではリア充死ネなオタク達が薄暗い部屋の中でネットゲのイベントに全力を注ぎ。

ある場所では彼女に振られた青年達がお互いの傷を舐め合うように酒盛りに明け暮れる。

それぞれの者達が、それぞれの場所で、自分の人生の現状を叩きつけられる日である。

そんな中、私、夜月満流は言いますと。

「く、クソ！ さてはお前も転S・・・。」

「はいはい、出落ちオツ。」

「ぎゃああああああああ！！！！！！」

絶賛痛者狩り中でした。

人の気配のしない廃倉庫、物言わぬ肉塊となった痛者18号を炎で綺麗さっぱり消し去る。

飛びすぎじゃい、とは思うだろうが仕方がない。

何故なら、今はもう1号を狩ったあの日から三年の月日が流れているからです！！！！

仕方ないよ、だってどいつもこいつも同じなんだもん。

簡単に纏めるなら。

ある日突然転校、あるいは元からいたらしく、ツナ君に接触してくる。

偶に京子ちゃんと良平さん、恭弥君に関わって来ることもしばしば。

何でか全員、痛者共には好感が持てない、恭弥君に至っては咬み殺す。

全員に親しく接する私に、痛者共が妬みを抱く。

イラつく視線を向けてくる。

一週間くらいすると呼び出し、または待ち伏せされ、関わるなどかお前とアイツじゃ住む世界が云々、etc・・・。

お前ら打ち合わせでもしてるの？　ってくらいに同じ事を何度も何度も繰り返す。

結局は実力行使になり、軽く捻ってやると　お前も転生者かー！
って騒ぎだし、それを黙らせて終了。

これが痛者共の基本的な末路。

例外としては、二・三人の男が私を手籠にしようとしてきた事がある。

女子達に絶大な人気を得るような容姿を与えられた奴は、全員がク
ラスの女子でハーレムを作ろうと尽力している。

その中で唯一ちっともなびかない私を、興味本位からか、積極的に
アプローチを繰り返す。

薄っぺらい笑顔を向け、しょっちゅう手を握ろうとしたり、頭を撫でようとしてくる。

気色悪いことこの上ない気分を味わい、思わずぶん殴ってしまう事も多かった。

しかしどれだけ邪険に扱おうとも、そのたびに「ははっ、満流は本当に照れ屋だな!」とか「このツンデレさんめ。」とかほざいて周りをうろついてくる。

うぜえ、見事な程にうぜえ。

本当はこのウザったさこそが神から与えられた能力なんじゃね?と思う程にだ。

しかし、だからこそ、そいつらが死に際に見せる恐怖と絶望に染まった顔ったらもう~~~~~?

たまらない!!

もう癖になっちゃうくらいに快感だよっつ、あの顔見ると体がゾクゾクしちゃうっ?

偶にそこそこ戦えるやつも居るから適度な運動にも持ってこいだしね!

「さってとく、ツナ君待たせちゃ悪いし、早く行かなきゃ?」

今日はツナ君の家の食事に招待してもらっている。

ツナ君の両親には、私に親がない事は既に話した。

いつかバレルだろうし、知られても不都合はないしね。

今は親戚の一人に世話になっていて、しかしその人も滅多に帰って来る事は無い、と言う事にしておいた。

完全に一人っきりってことにすると、奈々さんとかが「ウチで暮らせば?」とか言い出しかねないからね。

「お邪魔しました〜?」

「本当にいいの? 今日くらい泊まっていってもいいのに。」

「いえいえ、用事もあるんで、今日は帰らせてもらいます。　　あり
がとうございました。」

「そう、じゃあね満流ちゃん。」

「バイバイ、みーちゃん。」

「バイバイ。」

沢田家との夕食を終え、二時間程してから出た。

何というか、今日は夜通し出歩いていた気分だったから。

ツナ君を連れて行く訳にもいかないしね。

商店街を当てもなくぶらつく。

やはりというか、周りはカップルが大半を締め、仕事帰りの会社員
さん達が居心地悪そうに歩いている。

たまに見る男だけの若者集団は、カップルの、しかも男の方だけを、
まるで親の仇でも見るような目で睨んでいる。

しかし、見られている方は
それに全く気付かず、彼女とイチヤイチヤするのに夢中だ。

なんか見てて面白いな。

勝ち組と負け組、まるで一つの世界の縮図のようじゃないか？

な～んて事を考えながら歩いていると、不意にどこから鈍い音が
聞こえてきた。

普通なら気付かないような微かな音、しかしそれは紛れもなく

「人を鈍器で殴ったような音だね。」

進路を変えて、音が聞こえた方に向かう。

店と店の間の路地に入り、段々と人の喧騒が遠ざかっていく。

音も次第に大きくなっていき、さらには被害者であろう悲鳴も聞
こえてきた。

最後の角を曲がると、少しだけ開けた場所に出る、そしてその先には。

「おう、やっぱり恭弥君じゃ～ん？」

「満流かい？ 何でこんな場所にいるのさ。」

「いやいや、恭弥君にだけは言われたくないからね？ その人たちは？」

恭弥君の周りには二十人くらいの青年達が転がっており、さらには
現在進行形で五人の青年が咬み殺されている最中であった。

「こう言う日には並盛の風紀を乱す群れが繁殖してくるのさ、それを
駆除してるところ。」

「へ～、まあ確かに羽目を外し過ぎちゃう人は多いよね～、私も昨

日とか五・六人の人に声かけられたし。」

「だろう？ だからこうして数を減らさなきゃいけないんだよ。」

「相変わらず並盛ラヴだね、何でそこまで好きなのか激しく気になるんだけど。」

「言わないって前にも言わなかったかい？」

「いつかきくと聞き出してみせる！ って、両親の墓に誓った？」
「あっそう。」

この間二十秒も経ってないが、既に立っているのは二人だけ。
やっぱり恭弥君は別格だね？

「さて、群れも咬み殺したし、この前の続きやるよ。」
「やっぱり？ まあいいけど。」

出会ってから、私達は会う度にほぼ毎回戦う。

と言っても、二ヶ月に一回会うかどうかくらいのペースなんだよね、何故か。

大体は、私が勝ったり、私が用事を思い出して途中で逃げたり、恭弥君の体力が尽きるまで長期戦に持ち込んだり、そんな感じでのりくると勝ち逃げしている。

最近では私の動きを徐々に追うようになり、お蔭様で腕が鈍る心配は無い。

「じゃ、行くよっ。」

「ばっちこーい？」

そばに落ちてた鉄パイプを拾って構える。

恭弥君はいつもの鉄製のトンファを両手に構え、疾走する。

因みに、初めて会ってから次の時にはトンファが木製から鉄製に変わっており。

どうやって手に入れたの？　と聞いたら「ボクが欲しかったからさ、当然だろ？」と言われた。

なにが当然なのかは分からないが、もう恭弥君の持ちネタってことで強制的に自己完結した。

「今日こそ咬み殺す。」

「その妄想をぶっ壊す？」

互いの武器がぶつかり、暗い路地裏に火花が散る。

間を開けずに連撃を繰り返す恭弥君、最小限の動きで左右に避ける。むこうが大振りの一撃を仕掛けて来た瞬間に懐に入り、下から左上に振り上げる。

バックステップでそれを避けて、すかさず踏み込んで空いてる胴を狙って右のトンファーを叩き込まれる。

同じくバックステップで衝撃を殺すが、少しだけダメージが入り六メートル程後ろに飛ぶ。

「おゝいつつ、ちょいと危なかったね。」

「あのタイミングで避けておいてよく言うよ。」

「ふふん、経験の差ってやつだね。」

「・・・咬み殺す。」

「おっつ。」

どうやら仕出かしちゃったみたい。

表情変わらず、殺気爆発。

今までの倍近い速度で突っ込んでくる恭弥君。マトモに食らったら結構やばそう。

「回避？」

《おい、満流。》

「はい！？　ぎゃっふああっ！！」
「っ？」

余りにも突然に聞こえてきた声に、つい止まってしまった瞬間、思いつき一撃を食らってしまった。ゆうに十メートル以上吹っ飛んで、その先に偶然あったゴミ置き場に頭から突っ込んだ。

「いっつつああゝゝ、何故に今・・・」

《いや、すまん。　取り込み中とは・・・お前に転生者の事で頼みたい件が出来てな》

つまりこの痛みは痛者共のせいってことだね、よし、ぶっ殺す。

（今から家に帰るから後でね。）

《わかった、なるべく急いでくれ。》

「ねえ、なにしてるの？」

「え？　あゝいや、実は大事な用事があった事をたった今思い出してね？」

「またそれ？　まあいいさ、逃がさないけどねっ。」
「やっぱりか！」

案の定、見逃しては貰えない。

素早くゴミから抜け出し、視界がグラつくのを必死に堪えて攻撃を防ぐ。

何とか逃げようとしても、周り込まれてしまって上手く行かない。ちくしょう、帰ったらまずあの駄神をぶっ飛ばす！

「いやホント、かなゝり大事な用事だから見逃してくれない？」

「いやだよ、今日こそ咬み殺すって言っただろ？」

「あれだよ、また今度にしよう。人生焦る必要ないって、私達まだまだ若いんだから。」

「やだ。」

「出たよ！ 駄々っ子モード！」

「絶対に咬み殺す。」

「うおわくく！？」

ますますヒートアップする連撃。

ヤバイな〜とか思っていた私の視界の隅に、さっきのゴミ置き場が映る。

そしてその瞬間、私の頭にある策が浮かぶ。

我、天啓を得たり！！

「てい！」

「くっ。」

力いっぱい恭弥君を遠くに飛ばし、その隙にゴミ置き場に駆け寄る。先程の激突の時に口が空いてしまった袋を引っ掴み、思いっきり後ろに放り投げる。

ゴミが辺りにばらまかれ、空の袋が宙を舞う。

「なにしてんの？」

「ふっふっふ、恭弥君。勝負はもう決したよ、だから、あえて言おう。」

右の人差し指を向け、言い放つ。

「お前はもう、死んでいる。」

「……………」

沈黙する恭弥君。

しかし私は気にしない、理由は分らないが、今私はかつてない程の達成感を感じているのだから！

「意味が解らないけど、何故だか無性にムカツクよ。」

「え、まじ？」

「だからさっさと這いつくばって貰うよっ。」

先程の様に全力で突っ込んでくる恭弥君。

しかし私は動じず、むしろ笑みさえ浮かべて立っている。

もう勝敗は揺るぎはしない、私の策はすでに、彼の足元まで迫っている。

そう、お笑い界の、絶滅危惧種にして頂点、その名も！

「なっ！！？」

バナナ滑りネタ！！！！

足元にあったバナナの皮を思いっきり踏みつけ、見事に足を滑らせる。

見たか！　これぞ頂点の力なり！！

しかし、ここで誤算が出た。

恭弥君は全力疾走中であり、体の重心も思いっきり前にした状態。そんな時に一気に足を滑らせればどうなるか。

脱出を第一に考えていた私は失念していた。

「あり？」

「っ！？」

全力疾走の勢いが止まらず、私の方に飛んでくる恭弥君。
宙に浮いてる為に、恭弥君にはどうする事も出来ず、私は何故か思考が停止し、啞然と突っ立っていた。
当然そうなれば結果は明白で

「グヘッ！！」

「ぐっ！！」

見事に正面衝突した私達。

重なり合って後ろに倒れ、下敷きになった私には恭弥君の体重分のダメージが加算される。

「ウツ・・ウグウ・・・・・ウグツ？」

呻き声を発するが、予想以上にくぐもって聞こえる自分の声に、疑問を覚える。

目を開けて前を見ると。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

目の前には恭弥君の顔、それはいい。

私たちは重なり合って倒れたのだから不思議はない。

問題なのは・・・・・・・・

私たちの顔の距離が・・・・・・・・

ゼロである事だ。

第十六話（後書き）

あと一話くらいで一氣に日常編まで持って行こうと思います。
なるべく早く投稿出来るよう頑張ります。

第十七話

果てしない青空

壮大に広がる草原

咲き誇る花々

そよ吹く風

そして、血溜まりに沈んだ肉塊

そう、かつて満流が訪れ、神と初めて邂逅した空間である。
唯一違うのは、その景観を著しく損なう醜い塊が転がっている事のみ。

「・・・・・・・・」

《っ・・・・・・・・ちよっ・・あのっ・・マジでこm・・グウヘッ！！・・

》

血溜まりの前に立ち、能面の如く無表情で肉塊を見下ろす満流。

血溜まりの中に沈む肉・・・・もとい神。

何かを口にした瞬間、満流が携える釘バットのフルスイングをお見舞いされる。

既に出血量は人間が五回死んでもお釣りが来る量に達しており、血溜まりの半径はそろそろ十メートルに及ぶかと言うところだ。

「・・・・・・・・」

《みちr・・・グバツ！・・・ゆるしt・・・ウゴォツ！！・・・
たすk・・・ブウツハアツ！！！！》

顔色一つ変えず、機械の様にひたすら振り下ろす。

グチャツ、グチャツ、と、振り下ろす度に肉が飛び跳ね、一般人なら聞くに耐えない音が響く。

顔に血が飛び散ろうとも全く気にせず、ただ威力だけが増していくばかり。

《おねg・・・グウヘツ！・・・はなs・・・ギャブツ！！・・・
聞いt・・・ゴハアツ！！！！》

「さっさとシネ。」

《いや、俺神だから死なn・・・ギユハツ！！・・・だからマジで止
めておねg・・・グッフウツ！！！！》

「・・・ハアアア・・・」

溜息を吐き、とうとう釘バットを下ろす満流。

神にとって、まさに四時間に及ぶ地獄が終幕した瞬間だった。

「で、私に頼みたい事って何・・・？」

《やっと・・・本題に・・・入れ・・・る・・・な・・・》

「さっさと言えよハゲ。」

《ごめんなさい。》

今だ能面の表情が抜けきらない満流。

あの事故の後、完全に石化した二人であったが、満流が何とか先に正気に戻り、恭弥を押しつけてそのまま脇目も振らずに全力疾走。家まで逃げ帰って来たのである。

「ああ、気が重い・・・。」

《何というか、ホントにスイマセン。》

「はぁ~~~~~。。」

その後、彼がどうしたかは知らないが、次に会ったときにどんな目にあうかと思うと気が重い満流。

ぶち切れて襲いかかって来るか、案外平然と接してくるか、それとも全く予想外の反応が来るか。

流石にキスしたとなると、どう転がるか検討もつかない。

満流自信、あれが初めてであった為、判断材料が無いのだから。

「キスしちゃったんですけど〜。。。。」

《ごめんなさい。。。》

「何気に初めてだったんですけど〜。。。。」

《申し訳ございませんでした。。。》

ひたすらに謝る神。

表面上は普通に会話している様に感じるが、未だに神は血溜まりの中に沈んでおり、モザイク判定必須の状態で会話をこなしているのだから、余りにもシュールな光景だ。

「まあそれはいいや、早く続けて。」

《いいけど、やっぱり反応違うよな、もうちょい恥ずかしがるもんじゃね?》

「きゃあああー!! 恭弥君と、キ・キ・キ・キ・キス・しちゃったよおおおおー!!!!!!と
か?」

《いや、まあ。。。うん、はい。。。》

「これでも結構パニクッてるんだよ? 現に今も心臓バクバクだしね〜。」

《え、マジで?》

「マジ、まさかあんな事になるとは予想もしてなかったし、いきなりアレは流石にビックリだよ。」

《ですよね。》

「だけどもいつまでも話が進まないのはアレだから、話を聞いていてやろうって事だよ。」

《どうもです。 それでは・・・》

一度咳払いをして、真剣な表情になる神。

《まず結論から言う、海外に出張してくれ!》

「・・・・・・・・期間はどれくらい?」

《大体七年くらい!!》

「・・・・・・・・」

再び能面の顔に戻り、無言で釘バットを再装備する満流。

美しき世界に悲鳴が響き渡り、草原に二つ目の真紅の巨大な花が咲くのだった。

「み、みーちゃん、大丈夫？」

「うん？ ああ、大丈夫。」

「そ、そう・・・。」

駄神との話の翌日、私は全身から哀愁を漂わせていた。

ツナ君が心配して声をかけてくれるも、いつものような返事が出来ない。

「ほ、ホラみーちゃん！ サンタさんが風船配ってるよ、行こうよ！」

「うん。」

商店街の一角にある店の前で、サンタの格好をした男性が子供達に風船を渡している。

ツナ君は嬉しそうに風船を受け取り、私の元へ走ってくる。
が、途中で足を滑らせ、思いつきり転倒した。

「うわあっ！」

「ツナ君!？」

慌てて駆け寄り、ツナ君を抱き起こす。

鼻を軽く打ったらしく、赤くなっていた。

「大丈夫!？」

「う、うん・・・平気・・・。」

涙目になりながらも笑顔を作ろうとするツナ君。

「でも・・・風船が・・・。」

「え?・・・あっ・・・。」

ツナ君が見上げた先には、既に空高く浮いている赤い風船。
流石にあればもう取れない。

「じゃあちよつとまってて。」

「え?」

先程のサンタの所に行き、一つだけ残っていた紫の風船を貰い、ツナ君の元に戻って渡す。

「はいこれ。」

「いいの?」

「うん、いいよ。」

少し躊躇っていたが、誘惑に抗いきれずに手にとった。

「ありがとう! みーちゃん。」

「どういたしまして。」

満面の笑顔を浮かべるツナ君。

それを見ていると、少しだけここを離れるのが名残惜しくなってくる。

昨日の駄神との話が、頭の中で何度も反復される。

「で、何でいきなり出張なわけ？」

《じ・・実は、海外のマフィア各所の関係者達の子供として、大量の転生者達がやってきたんだよ》

「何でそんな所に？」

《前にも言ったが、転生者にも色んな奴らがいる。大半は物語の中心に関わろうとするのが殆どだが、全く関係ないところから自分のオリジナルな展開に関わろうとする奴も沢山居るんだ。》

「例えば？」

《俺がボンゴレ以上の大ファミリー作って最強になってやるぜ！！とか、全てのマフィアに恐れられるような最強の殺し屋になって、クールな一匹狼を貫くぜ！！とかだな。》

「うわぁ・・・。」

《まあそんな感じで、今海外にとんでもない数の転生者達が溢れているんだ。それを片付けて欲しい。》

「それを全部こなすのに七年かかるってこと？」

《いや、七年ってのはあくまでかなり多く見積もって計算した年数で、実際二年から四年くらいだと思う。》

「紛らわしいなオイ。」

《悪かった。年明けくらいから始めて欲しいんだが、その前にあるマフィアのアジトに出向いて手に入れておきたい物がある、三日後くらいには出発してくれないか？》

「随分急だね、手に入れておきたい物って？」

《これからいろんな場所に行くのに、まだ九才のお前には色々と不便な事が多いだろ？それを補う為に必要な物だ、詳しい説明は現地に行ってから話すから、とりあえず今日はここまでだな。》

「了解。」

二日後には日本を離れる、その話をするために、ツナ君と一緒にいる。

既に荷造りは済ませた、元々物を多く持たない質だから。

今日一日はツナ君と一緒にいて、明日は京子ちゃんや了平さん、可能なら恭弥君にもお別れを告げる予定。

「ねえツナ君。」

「なに？ みーちゃん。」

「ちょっと話があるんだけど、聞いてくれる？」

「う、うん。」

雰囲気が変わったのを感じ取ったのか、若干困惑気味に頷く。

二人で手を繋いで歩き、商店街の道を進んでいく。

「突然なんだけどね、私、明後日には外国に行く事になったんだ。」
「え・・・？ な、なんで？」

立ち止まり、信じられないと言った様子で聞いてくるツナ君。
私も立ち止まり、ツナ君の方に振り返る。

なんかドラマのワンシーンみたいだなあ、と、心の中で苦笑する。

「えっとね、世話になってる親戚の人の仕事の都合でね、私も付いていくことになったから。」

「なんで行っちゃうの？ みーちゃんだけこっちに居られないの？」

早くも涙目になりながら必死な様子で訴えるツナ君。

実に子供らしい考えに、またもや心の中で苦笑してしまう。

「だめだよ、迷惑かけちゃうし。」

「で、でも・・・でも！」

泣き出すツナ君。

声を出そうとしても、言葉になっていない嗚咽が聞こえてくるだけ。

「大丈夫だって、今はさよならだけど、必ず帰ってくるからさ！」
「グスッ・・・ほんとに？」

「ホントホント!」

「いつ帰ってくるの?」

「えっと、二年半くらい?」

早くて、だけど。

「ヒック・うん、わかった! みーちゃんが帰ってくるの待ってるから!」

「うん、なるべく早く帰ってくるからね。」

なんとか笑顔に戻ったツナ君と、もう一度手を繋ぎ、人混みの中へと歩いて行った。

また会うと約束して。

「さってとく、行きますか。」

あっという間に出発当日。

昨日は予定通りに挨拶を済ませ、京子ちゃんには泣かれたが、最後には笑顔で送り出してもらった。

了平さんは、「次会うまでにお前よりも極限に強くなるぞー!!」
と言っていた。

残念ながら恭弥君に会う事はできなかった。

相変わらず何処にいるのか分からない。

今頃どこかで不良をボコボコにしているだろう。

《もういいか?》

「うん、まずは手に入れる物だっけ?」

《そうだ、一つあれば充分だが、念のために二つ手に入れておくぞ、最初はイタリアだ。》

「戻るだけじゃん。」

《イタリアと言っても端っこのほうだ、ヴァリアーに寄る時間は無いぞ。》

「ええ〜、まあ仕方ないか、むこうで電話するか。」

バッグを背負い、タクシーで空港まで行き、端っこの方のフェンスから侵入。

イタリア行きの便を探す。

「で、どれよ?」

《ちょいまち。たしか〜・・・、お、あれだ!》

神が指差す先に、いかにも海外行きのジャンボ機が見える。

荷物運搬用の車を乗り継ぎ、目的の便まで辿り着き、えっと・・・
タイヤ? の所から中によじ登る。

「ふう、侵入成功〜!」

《いつもこんな感じなんだよな？》

「そう、まあ前は一度空港の中でどの便が何処行きなのか調べたりしてたから、今日はかなり楽だったね。」

《そうか、でも、目的の物を手に入ればさらに楽になるだろう。》

「まじ？　ってかいっぴになったら教えてくれるのさ。」

《それは手に入れてからのお楽しみだ！》

やがて機体が揺れ始め、ゆっくりと移動しているのを感じる。

「時間だね、寝るから何かあったら起こして。」

《了解。》

横になると、すぐに睡魔がやって来た。

眠気に身を任せて目を閉じる、痛者共をいかに苦しませてからブチ殺すかを考えながら。

第十七話（後書き）

一気に日常編までぶっ飛びます！

m 早く原作と絡ませたくて仕方がないので、ご了承ください m
「」

第十八話（前書き）

ついに日常編！

テンション上がってキター（。▽。）ー！

執筆も進みそうなので、早く更新出来る！ かも！

ではどうぞー！！

第十八話

『大丈夫だって、今はさよならだけど、必ず帰って来るからさ!』

いつも通りに笑う彼女。

小学校の時に出会い、一人ぼっちだったオレに話しかけてくれて、友達になった同い年の女の子。

いつもニコニコ笑い、楽しそうな事に出くわせば片っ端から突っ込んで行き、とにかく楽しく生きる事を優先していた。

その反面、誰かと敵対すると容赦なく叩きのめしたりする事もあり、彼女に絡んで病院送りになった不良は数知れず。

本来なら苦手だったり怖かったりする筈なのに、自然と一緒にいたくて彼女とばかりいた気がする。

クラスの奴らからカップルだの夫婦だのと言われて何回恥ずかしい思いをしたことか。

しかも彼女はそれすら楽しみ、火に油を注ぐような事をして、さらにエスカレートしていくばかりだった。

『グスッ・・・ほんとに?』

『ホントホント!』

オレの泣きながらの問いに、より一層明るく答える彼女。

今思い出すと死ぬ程恥ずかしいよな、めっちゃくちゃ泣いてたし。

『いつ帰ってくるの?』

『えっと、、、二年半くらい?』

また泣きたくなった。

小学生の子供にとって、二年なんて気の遠くなる程長い時間だ。それ以上かかるなんて、一生会えないと言われるくらいに悲しい。だけど当時のオレは、なけなしの努力をして何とかこらえた。これ以上大好きな子に迷惑を掛けたくない、なんて思ったから。

『ヒック・うん、わかった！ みーちゃんが帰ってくるの待ってるから！』

『うん、なるべく早く帰ってくるからね。』

笑って言う。

彼女は少しだけ驚いた顔を見ると、嬉しそうに笑い、静かに約束してくれた。

『だから・・・・・・・・・・』

「さっさと起きやがれ。」

「うぎゃあぁっ!!」

そこでオレは腹に激痛を感じ、叫びと共に夢から覚めた。

「まったく、もうちょっと穏便に起こしてくれよう。」

「寝坊したツナが悪いぞ。」

「だからってボディブローはないだろ！ 死ぬわ！！」

「いつまでもグチグチうつせえな。」

塀の上を歩く赤ん坊らしきもの、リボーンが眉間に銃を突きつけてくる。

「ひいいいっ！ ちょっと、タンマ！！」

「マフィアなら過ぎたことを気にすんな。」

「だからマフィアにはならないって！」

これが最近のオレの日常。

彼女が外国に行ってからオレの生活は、まさにダメライフの一言に尽きた。

少しは頑張ってみようかなと思い、勉強も運動も努力してみたけど、結果として自分のダメっぷりを再確認するだけに終わった。

それからずっとダラダラと毎日を過ごし、気が付けば中学生になっていた。

学校が変わったって何も変わらず。

そんな中、ある日突然リボーンがやってきて、オレの毎日は確実に変わった、いや、終わった？

いきなりマフィアのボスになれとか言われ、転校生の獄寺君に狙われ、今はオレの右腕になるとか言ってるし。クラスメイトの山本と仲良くなり、最近じゃ京子ちゃんやそのお兄さんとも話す事が多くなった。

京子ちゃんやお兄さんとは、彼女を通して知り合ったけど、彼女が居なくなってから疎遠になっていた。

だけどリボーンのせい？ おかげ？ で、お兄さんにボクシング部に勧誘されたことをきっかけに、また話すようになった。

「・・・ナ・・・おいツナ、聞いてんのか？」

「へ？ あ、ゴメン。なに？」

「何突然ボーっとしてんだ、熱でもあんのか。」

「いや違うよ、昔の事思い出してた。」

「昔？」

「うん、始めて出来た友達のことを・・・な。」

「なに？ ツナに友達なんていたのか・・・。」

「ひどっ!？」

そんなやり取りをしながら学校に着き、教室に向かう。

扉を開けると、既に獄寺君や山本は来ていた、京子ちゃんもいつも一緒にいる花って女子と話している。

獄寺君と目が合うと、まっ先に此方に来た。

「十代目、お早うございます！」

「うん、お早う獄寺君。」

「おっ、ツナじゃんか、今日は遅刻じゃないんだな。」

「山本、お早う。リボーンに叩き起されたよ。」

「ハハッ、小僧は相変わらずみてえだな。」

笑う山本。

悔しいけど、今こうやって友達と話せるのは結果的にリボーンのおかげかな。

チャイムが鳴り、皆が席につく。

担任が教室に入り、出席を取り始める。

（今、あの子はどうしてるだろう・・・。）

自然と窓の外に目が向く。

彼女が外国に行って、もう三年半以上。

向こうで何かがあったのか、それとももう、オレの事なんて忘れているのかもしれない。

そう思うと、暗い気分になる。

向こうで仲のいい友達が出来たり、好きな男が出来ていたりするのかも知れない。

でも、せめて覚えててくれるといいな。

「よし、全員いるな。あゝ、突然だが、今日は転校生を紹介する。」

「おおおゝゝ！！」

担任の言葉に、クラスが活気づく。

男は美少女を、女は美少年を強く望んでいるだろう。

だけどオレは・・・

（転校生かあゝゝ、嫌な予感しかしねえゝゝゝ）

何故か、昔から転校生と言う言葉を聞くと嫌な気持ちになる。

理由はよく解らないが、こう、何というか、生理的に受け付けない

とでも言うのか。
とにかく嫌なのだ。

事実、彼女が居なくなってから、転校生が四人程、しかも全員オレのクラスにやってきて。

しかも何でか全員オレに話かけて来るのだ。

皆そこそこ顔が整っているの、クラスの子から沢山話を振られて
いるのに、まるで眼中に無いみたいにオレに関わってくる。

男ならまだしも、女の子だった時はかなり辛かった。

クラスの男子だけじゃなく、上級生からのイジメ。

いつもオレに関わるのに、困っている時は不思議な程に現れない転校生。

まさにオレにとっては疫病神といっても過言じゃないくらいだ。

獄寺君はそんな事は全く無く、例外的な人だったけど、今回もそう
だとは限らない。

朝からブルーになりつつも、なるべく前の席の人の背中に隠れるように、マトモな人でありますようにと祈りながら目を瞑った。

「またしても帰国子女だそうだ。では、入ってきなさい。」
『は〜い?』

扉の向こうから聞こえた女子の声に、クラスの男子のテンションが上がる。

きっと何人かはガッツポーズでもしているだろう。

オレは机の上で顔を俯かせ必死に祈り続ける。

扉が開き、軽快な足音が響く。

全然緊張してないようだ。

やがて教卓の横に来たのか、足音が止まり、チョークで名前を書く音が響く。

「初めまして！ 夜月満流です。 趣味はネットサーフィンです。好きな食べ物はラムの香草焼きです。 特技は手刀で人を気絶させられることです。 宜しく願いしまーす？」

【おおおおおおおおおー！！！！！！！！】
「・・・えっ・・・？」

よほどレベルが高い子だったのだろう、クラスの男子が学校中に響かんばかりの歓声を上げている。

しかし、オレは完全に思考が停止していた。
聞き覚えのある自己紹介。

楽しそうな雰囲気が顕著に伝わってくるような弾んだ声。

どれも、居なくなった彼女を思わせる声で。

オレは自然と顔を上げ、転校生の顔を見つめる。

「おっ！ ツナ君見つけ！！ 久しぶり〜〜〜〜？」

【何ーーーーー！？】

オレの顔を見た瞬間、太陽みたいな笑顔で手を振ってくる彼女。
同時にクラスの男子から「またか！」とでも言いたそうな視線が突き刺さる。

しかし、いつもと違ってオレにはそれが全く気にならなかった。
嬉しそうに手を振り続ける彼女に、目が釘付けだったから。

「みー・・・ちゃん？」

第十八話（後書き）

三年ぶっ飛んで再会！！ W W W

勿論ですが、ツナの嫌悪感は満流が居なくなる前の転生者達に対する嫌悪感を、体が何となく覚えてるって感じですね。

それが満流が居なくなってからもどんどん増していたと。

もはや転校生がトラウマになっているツナでした。 W W W W W W

因みに時期としては、少なくとも雲雀との初戦闘は終わった頃かな？

九月の後半くらいだろうか？

ではまた次回。

第十九話

いや、予想以上に驚いてるね。

私の顔を見た瞬間、まさに鳩が豆鉄砲くらった様な顔をするツナ君

流石に三年も経つと成長してるね。

常時ポカンとしているような雰囲気は変わってないけど。

それにしても、いるねえ。痛者共が。

このクラスだけで三人、学校全体だ十五人かな？

一人は訝しげながらも、周りの人達と大差ない反応の女子だ、多分この世界の誤差程度に思っているんだろう。

二人目も女子で、こっちはあからさまな敵意を向けて来る。

私の事を自分と同じ転生者だと思い込んでるなああれ。

一番スタンダードなタイプだ。

三人目は男子で、もう完全に下心丸出しの気色悪い視線を向けてくる。

よし、とりあえずコイツを最優先にぶっ殺すのは確定だね。

上から順に、痛者325号、326号、327号としよう。

いやあ、改めて見ると番号増えたなあ。

あまりにも多すぎて漢数字表記が英数字表記に変わってしまう程に。

それでもって、コイツらとは別に、さっきから物凄いガン飛ばしまくってくるのが居るんですけど。

前から二列目の席に座る灰色の髪の子生徒。

自分、不良ですから。と主張せんばかりの格好で、いたる所をアクセサリー類で飾っている。

「静かにしろ！ 何だ沢田、お前たちは知り合いか？」

「え！？」 あっ、えっと……まあ……。」

突然話を振られ、口ごもってしまうツナ君。

人との会話が苦手なのも相変わらずみたいだね。

なんか久しぶりにからかいたくなっちゃった？

「先生、知り合いじゃありません。私はツナ君の許嫁でゝす?」

「え？」

【・・・・・・・・え？】

沈黙する教室。

しかし、耐性のせい、いち早く状況を理解しだしたツナ君の顔が青くなり始めた。

【なああああんだつつつてええええええ！！！！！！！！！？・？】

「み。みーちゃん!？」
「何てことを!」
「テヘツ?」

今度は昔の様に、真つ赤になつて訴えるツナ君、懐かしいなあ。

「し、静かにしろ！！ 驚くのは無理もないが、質問は授業が終わってからだ。とりあえず、夜月の席は窓際の後ろから二番目のあ

そこだ。」

「はあい。」

この状況で授業を優先出来る辺り、この担任はかなりのやり手みたい。

席に着き、周りの生徒と挨拶を交わす。

案の定、授業が終わった瞬間クラスの九割の生徒に囲まれ、質問攻めに会う。

「何処に住んでるの？」

「趣味は？」

「好きな男子のタイプは？」

「スリーサイズは？」

「さっきの話って本当なの！？」

「マジであのダメツナと付き合ってたの！？」

「嘘だと言ってくれー！！」

などなど、人混みの隙間からツナ君を見ると、二人の男子と話しをしているようだった。

その内の一人が、先程の不良っ子だったのは意外だったけど。ちゃんと友達が出来たんだね、よかった。

それからも、何故か他のクラスの男子までもが押し寄せ、結局休み時間にツナ君と話す機会は無かった。

なので、昼休みのチャイムが鳴った瞬間、私は自分の弁当を引っ掴み、ツナ君の横まで移動。

「ツナ君、一生にお昼食べよう！」

「え？ あ、みーちゃ・・・うわあ！！」

問答無用で首根っこを掴み、猛ダツシュで離脱。

なんか後ろから「十代目ーーーーー!!!!」とか聞こえたけど無視。

階段を駆け上がり、屋上に続くドアを蹴破り、そのままの勢いで着地。

ズザザーっと、上履きが地面に擦れる音が鳴り、若干焦げ臭い臭いが漂う。

「よっし、到る着？」

「到る着？ じゃないよ！ 窒息死するかとおもったよ!？」

「ドンマイ。」

「・・・はあ、何というか。 みーちゃんは相変わらずだね・・・」

悟った顔で溜息を吐くツナ君、だけどその顔には、隠しきれない笑みがあった。

「改めて、久しぶり、ツナ君。」

「うん、久しぶり、・・・それと・・・」

「ん？」

「・・・おかえり・・・。」

「・・・ただいま？」

優しく笑い合う。

痛者共のゴキブリ並のしぶとさと繁殖率のせいで、一年以上遅れちゃったけど。

それでも、約束通りに帰ってこれた。

「十代目ー！ ご無事ですかー!？」

「おや？」

「げえっ！ 獄寺君！？」

「おいおい獄寺、落ち着けって。」

「うっせえ山本！ 野球バカは引っ込んでろ！！」

そう言っつて、慌ただしく屋上にやって来たのは先程ツナ君と話した二人。

「みーちゃん！ 逃げて！！」

「？ なんで？」

「いいから早く・・・」

「果てろっ！！」

不良っ子が、懐から何やら筒状の物体を取り出し、そこから生えている短いヒモにタバコの火を点けている。

そんでそれを私の方に一斉に放り投げてきた。

「なんか見た目ダイナマイトっぽいものが・・・」

「みたいじゃなくて本物だから！！」

「マジか・・・」

「とにかく逃げろ・・・って！ うわー！！！！」

面白いくらいに慌てふためくツナ君と共に、私は爆炎に飲まれた。

「十代目っ!!」

「おい、いくらなんでもやり過ぎだぜ獄寺!」

山本の馬鹿が言ってくるが、俺の耳には届いてなかった。

突然やって来た妙な女、事もあるうに十代目の許嫁とか抜かしやがった!

休み時間はクラスの連中に囲まれてやがったから、さして警戒せずに済み。

十代目も、奴とは昔の友達だとおっしゃっていた。

だが、なんとアイツは昼休みになるなり十代目を拉致りやがった!!
油断していたのが間違이었다。

昔の知り合いが敵に寝返り、命を狙ってくるなんざ、俺らの世界じゃ日常茶飯事。

いくら十代目のかつての友人だからって、今もそうである保証は何

処にもねえ！

もし十代目の身に何かあったら、右腕として、そしてオレに十代目の安全を任せて下さってるリボンさんに合わせる顔がねえ！！
急いで追いかけて、辿り着いたのは屋上。

そこでは、なんと十代目が勇敢にもあの女と向き合い、立ち向かっているお姿だった。

命を狙われてるにも関わらず、余裕の笑みさえ浮かべておられる。

その姿は、まさに次期ボンゴレに相応しい勇姿だった。

こうしちゃいられねえ、俺も右腕として、加勢して差し上げねえと！

そう思い、ダイナマイトを投げた。

女は安心して反応出来てねえ、楽勝だと思った。

しかし、何と十代目はアイツを庇って爆発に巻き込まれちゃった。
自分の命を狙った奴を、知己だからって庇うなんて、何て器のだけえお人だ！！

「十代目ー！ー！！ 大丈夫ですかー！？」

「ツナーー！ 返事しろー！！」

山本と共に何度も呼びかけるが、十代目からの返事はない。

あの人がこれしきの事でくたばる訳はねえが、重症を負っちゃってたら大事だ。

「いったゝゝ、危ないって、何でそんな物騒なモン持ってるかなゝゝ？」

「っ！ テメェっ！？」

「おっ、無事みてえだな。」

煙の中からひょっこりと現れたのは、十代目を抱えたあの女だった。

危ない危ない。

咄嗟に炎で相殺しなかったら危険だったよ。

前に漫画の主人公がやってたのを適当に真似てみたけど。

こんなん本当に出来んの？　って思ってたけど、人間やれば出来ちゃうもんだね？

煙のなか、ツナ君を抱えて歩き、さっきからツナ君を読んでる声の方へ行く。

私の姿を見て、爆弾少年は再び警戒し、もう一人はホッとした顔を見せる。

「十代目に何かしてねえだろうな!？」

「いやいや、君にだけは言われたくないよ。ただ気を失ってるだけだって。」

ツナ君をゆっくり床に寝かすと、二人が駆け寄って来た。

一応一歩下がって警戒されないようにしておく、またダイナマイトは勘弁して欲しいから。

「十代目!」

「うっ・・・うう・・・ん・・・」

「傷も全くねえみたいだし、全然無事みたいだな。」

傷が無い事を確認し、安堵する二人。

確か山本? とか呼ばれてた方がニカッと笑って私を見る。

「あんがとな、俺のダチ助けてくれてよ。」

「いいってことよ、ツナ君は私の大事な友達だからね?」

「ハハッ、そうか! じゃあダチのダチって事で、俺らもダチって事だな!」

「おおっ、いいね! そう言うの。嫌いじゃないよ!」

「そっか、俺は山本武ってんだ、よろしくな!」

「夜月満流だよ、よろしくね、武君?」

お互いに握手を交わす私達、どうやらツナ君はいい友達を見つけたみたいだね。

「おいコラ! 何仲良くなってるんだ野球バカ!!」

「いいじゃねえか、夜月はツナを守ってくれたんだぜ?」

「ぐっ!? だ、だからって・・・。」

「と言うか、何で君は私を襲ってきたの？」

なんやかんやで不明のままなんですけど。

「テメエが十代目のお命を狙ったからだろうが!!」

「はい？」

「おいおい獄寺、ここでもマフィアごっこやってるのか？」

「ごっこ？」

「うっせえ！ ごっこじゃねえって言ってんだろうが!!」

ぎゃあぎゃあど騒ぎ出す獄寺なる不良、それを呑気な笑顔で受け流す武君。

その会話を聞いていると、どうも私が殺し屋か何かと思われていたらしい。

なる程、ツナ君を拉致ったのがそう言うふう解釈されてしまったか。

というかこの発想と今の言動からして、この爆弾不良っ子はコッチの世界の人間だよね。

「ちょっと待たれい爆弾っ子よ、私は殺し屋なんかじゃないですよ？」

「じゃあ何で十代目を拉致りやがった！」

「それはホラ、積もる話もあるのにクラスの質問攻めのせいで時間が取れなかったから、実力行使に移っただけだよ。」

「そ、そうか・・・なら、あの爆発からどうやって逃れた！ 一般人に出来る芸当じゃねえぞ!!」

「さあ？」

「はあ!？」

「いや、逃れるも何も。ただツナ君庇ってうずくまってただけだ

し。」

平然と嘘をつく、ホントの事言う訳にもいかないしね。

「まあ運が良かったんじゃない？」

「そ、そんな訳！」

「おい、もうやめろよ獄寺。いくら何でもネタ引き伸ばし過ぎだぜ？ それに夜月はツナを守ってくれただろうが。」

「・・ちっ！ 今回はこれくらいにしといてやる・・。」

「ううん・・あれ、ここは・・。」

タイミング良く目を覚ますツナ君。

「十代目！ 大丈夫ですか！？ 何処か具合が悪かったりとかはっ！？」

「うわぁ！ ご、獄寺君！？ う、うん、別に大したことないよ・・。」

「そうですか、よかった・・。」

ホッとした顔をする爆弾っ子、本当にツナ君の事大事にしてるんだねえ。

「よかったなツナ、夜月が助けてくれたんだぜ？」

「え、みーちゃんが？」

「ブイ？」

「そっか・・ありがとう。」

「まあ助けたって言うてもうずくまってただけだけどね。」

「それでも・・。」

「君たち、何してんの？」

「「「っ!?!」」」
「ん?」

屋上の入口から聞こえて来た声に、全員がそちらを向く。
そこには、学ランを肩に掛け、腕を組んで佇む男子。

細く、つり上がった目に、腕には風紀の字をあしらった腕章。
触れただけで傷が出来そうな空気が体から滲み出ている。

って言うかアレって……。

「校内での破壊活動と、それによる屋上の損壊、咬み殺すには充分過ぎるね。まあボクのお気に入りの場所で群れてる時点で終わるんだけど。」

「ひいいいっ! ひ、雲雀さん!?!」

「くっ! テメェ!?!」

「やっべえな……。」

思わず吹いちゃいそうなくらいに怯え出すツナ君に、再び爆弾を取り出して威嚇する爆弾っ子。

武君も、顔に冷や汗が浮かんでいる。

この四人、何かあったのかな?

「はっ! みーちゃん、今度こそ逃げて!?!」

「これまたどうして?」

「雲雀さんは本当にヤバイんだって!?! 女の子でも容赦ないんだから!?!」

「ワオ、今日は女連れかい? まあ同罪だから君の言うとおり……」

に・・・・・・。」

私と目が合った瞬間、固まった。
その様子に、ツナ君達が困惑してる。

「え？ アレ？ 何で雲雀さん、固まってるの？ 何でみーちゃんをじっと見てんの？」

「わかりませんが、何があるか分かりません。 十代目は下がっててください！」

ツナ君を庇う様に移動し、様子を伺う爆弾っ子。
私？ とりあえず第一声は向こうに任せようと思って？

ツナ君達からすれば痛いくらいの沈黙が続く。
時間してみれば数十秒程度だが、まるで何時間にも感じているかもしれない。

「君・・・もしかして、満流かい？」

「そうだよ、久しぶりだね、恭弥君？」

ようやく放たれた私達の言葉に、周りの時が止まった。
数瞬後、屋上に驚愕の叫び声が響き渡った。

第十九話（後書き）

あれ？ 何で雲雀が転校生の事を把握してないの？

って思った人、次回説明されるのでご安心を。

ちよつとずつ主要キャラ視点も取り入れて行くつもりです。

とりあえず今日は獄寺視点、不自然ではなかったでしょうか？

獄寺の、日常における基本バカっぷりを少し入れてみましたWWWW
WW

ではまた（〇・・・〇）／

第二十話（前書き）

ちよい短いです。

ネタを文章にするのが難しくなってきた W W W W W

ただでさえ書く時間が少ないのに、書くスピードも落ち気味 W W W
ではどうぞ。

第二十話

屋上に鳴り響く金属音。

普段なら並盛の町を一望出来て、昼にご飯を食べたり昼寝をするにはもってこいの、一部の人には人気な場所であり、しかしある人物が好んで昼寝の場所に使っていることもあり、あまり使われていない所でもある。

そこは今や獄寺君のダイナマイトの嵐によって、悲惨な光景となっており、あちこちにクレーターが出来ている為、デコボコ状態である。

下の階に被害が及んでないのが唯一無二の奇跡と言えるくらいだ。

そんな屋上のだ真ん中で、さっきのある人物こと雲雀さんと、オレの大切な幼馴染のみーちゃんが闘っていた。

雲雀さんとみーちゃんが知り合いだった事も驚きだったけど、それ以上にみーちゃんの強さには唖然とするしかない。

オレの隣で、獄寺君も口をあぐりと開けて固まってるし。

山本ですら驚きを隠せない様子でいた。

「おいおい、夜月ってすんげえな、雲雀と互角にやり合ってるぜ？」

「マジ・・・かよ・・・」

みーちゃんが普通の人よりも強いのは知ってたけど、まさかこんなに凄いなんて。

雲雀さんは並盛最強で、獄寺君と山本、それに死ぬ気弾でそれなりに戦えるオレの三人で手も足も出なかったのに。

それと互角、むしろまだまだ余裕って顔してるようにも見える。

そもそも雲雀さんも妙だ。

さっきだって、みーちゃんが雲雀さんの呼びかけに答えると、突然ニヤリと笑って、次の瞬間には一氣に襲いかかってたんだから。

みーちゃんはみーちゃんて、最初から分かってたみたいに警棒みたいな取り出して普通に対応してたし。

それを見て、雲雀さんが嬉しそうに笑った様に見えたんだ。

「ほれほれどくした恭弥君？ この程度なのかな？？」

「何言ってるの？ これからだよ。」

みーちゃんの挑発に対し、今までの倍近い速さと手数で攻める雲雀さん、案外乗りやすいんだな。

しかしみーちゃんも余裕の態度を崩さずに避ける、というかもうオレには見えなくなってきた。

いや、最初からよく見えないんだけど、何というかもう二人の体がブレてきて見にくい。

ただでさえクレーターのせいで足場が悪いのに、二人はそんなの構いなしに動き回る。

というか、今更だけど何でこんな騒ぎが起こってるのに誰も来ないんだ？

教師が確認に来たりするんじゃないの普通？

そんな事を考えていると、校内に昼休み終了のチャイムが鳴った。

「あ、チャイムだ。」

「じゃあそろそろ教室に戻るか。」

「そうだな、ここにも面倒なだけだ。」

二人が、どこか悟ったような様子で言葉を交わす。

「で、でもみーちゃんが・・・。」

「ああ、私はいいよ～～？　もう少し恭弥君と遊んでいくから～～」

「よそ見してる暇があるのかい？」

「実はあるっ！」

「咬み殺すっ。」

雲雀さんの猛攻を避けながらヒラヒラと手を振っているみーちゃん。なんか全然大丈夫っぽい・・・。
気にしつつも、三人で屋上を後にし、教室へと戻っていった。

ツナ君達が教室に戻ってから、既に三回チャイムがなっている。
そう、つまりは現在放課後である。

「えっと〜、まだやるの？」

「当たり前だよ、今日こそ咬み殺してあげるから。」

「いや、謹んでお断りします。　ていうか、お腹が空いて力がでない〜。」

会話をしながらも、勿論攻撃は続いている。

昼飯すら結局食べていない、それどころか朝だって実は遅刻しかけていたから食べてないのだ。

流石にお腹の虫の叫びが尋常じゃない。

「あれだよ、ちょっと休憩しよ？　ちょこっとコンビニ行つてのり弁でも買ってさ〜。」

「却下、そう言つて逃げる気だろう？」

「いやいや、絶対逃げないから、神に誓うよ！　これが嘘をつく人の目に見える？」

「見える。」

「即答ですか・・・。」

軽くショックを受けながらも、恭弥君の攻撃を受け続ける。
やっぱり力は男の子には勝てず、ちょっと腕が痺れてきた。

まあ律儀に受けずに避ければいいんだけど、あんまり避けすぎると不機嫌になってさらに勢いが増すからね。

「委員長！」

「っ！」

「ん？」

突然聞こえてきた声に、お互いに止まる。
声のしてきた方を見ると、リーゼントがいた。

なにあれ？　今の時代にリーゼント？　もはや希少種だよ、幻獣種だよ。

日本の幻の遺産に遭遇した私は、しばらく硬直してしまった。
恭弥君がその人と何やら会話している。

「なに？」

「お楽しみの所申し訳ありませんが、風紀委員の仕事が溜まっておりまして、委員長でないと処理出来ない物も多数あります。それに先程、複数の場所でチンピラ共と役員達が交戦状態になりまして、応援要請が来たのですが、人手が全く足りていません。」

「ふうん、そう……。」

何やら重い雰囲気になってきたような、思案顔になってる恭弥君。とりあえず、これでやっとなご飯にありつけそうなので、あのリーゼントにはお礼がしたいくらいだ。

その時、ふと恭弥君が私を見て、ニヤツと笑った。

笑った、と言っても場を明るくするようなモノでは決してなく、嫌な予感しかないような邪悪な笑みだ。

何か言われる前に逃げろ！　私の第六感的な物が警報を鳴らす。

「そ、それじゃあ私はこれd……。」

「ちょっと待って、一緒に来て貰うよ。」

遅かった……。

「いや、実はちょっと急用が……。」

「却下。」

「持病の尺が……。」

「君が持病なんて持ったまかい？」

おいちょっと待て、どう言う意味だそれ。
どんだけ人外扱いされてるんだ私は。

「実はお父さんが現在進行系でデッドオアアライブをさ迷っている
状態で……。」

「君、両親とつくに死んでるって言ったよね。」
「あ……。」

そーいや恭弥君には家庭事情は言ったんだった、因みに沢田家に言
ったのと一緒。

「もういいかい？ 暇じゃないんだから時間を無駄にしないでよ。」
「ついさっきまでおもつくそ無駄に過ごしてた人間のセリフじゃない
よね。」

「何か言った？」
「いえなにも。」

仕方なくついて行く。

恭弥君にの後ろを歩き、隣でリーゼントさんのリーゼントがゆっさ
ゆっさと揺れていた。

名前を聞いたら草壁さんと言うらしい、風紀委員の副委員長だそう
だ。

「そう言えば、君が転校してくるって話聞いてなかったんだけど？」
「ああ、そりゃあ今朝早く手続きしたから知らなくても無理ないよ
。」

「どうやったのさ……。」
「ヒ・ミ・ツ？」

「・・・・・・・・・・。」

「無視しないで・・・・・・・・。」

やがて着いたのは、何と応接室。

誰かお客さんにでも会うのかな？　と思ったら、なんとここが風紀

委員の部屋だそう。

「恭弥君、応接室の使い方って知ってる？　学校の客人をもてなす
為に使うんだよ？」

「学校の部屋の使い方方はボクが決めるんだよ、当然だろ？」

「さいですか・・・。」

外国に行った時とかに、文化の違いによる価値観の差異で、会話が
噛み合わなくてお互いに？　な状態になる時って偶にあるじゃない？

その時と非常に似てる気がするんだ。

一番奥にある立派な椅子に腰を降ろし、草壁さんがお茶を置く。

椅子に座るよう促され、客用のソファに座る、結構座り心地が良
く、寝たら気持ちいいだろうなあ〜と思った。

私にも草壁さんがお茶を入れてくれたので、お礼を言いつつ一口飲
む。

は〜〜、何というか、和む。

「さて、話だけど、まあ簡単な事だよ、満流には風紀委員に入って
もらうから。」

「いや、予想はしていたけども・・・。」

既に決定事項、と言わんばかりの口調。

いや、彼の中では実際にそうなんだろうね。

「嫌だよ面倒くさい。」

「これは決定事項だよ。」

「だが断る。」

「却下。」

「嫌だ。」

「却下。」

「嫌。」

「駄目。」

「イヤ。」

「ダメ。」

「あ、あの委員長・・・とりあえずウチの風紀委員会について説明してからの方が良いのでは？」

小学生レベルの言い合いになった所に助け舟を出したのは、やはり
と言うか草壁さん。

どっかの委員長（笑）と違って大人だね？

「・・・まあいいや、じゃあ草壁、宜しく。」

「はい。では夜月さん、ご説明させていただきますね。」

「ほい。」

そこから草壁さんによる並盛風紀委員の説明が行われた。

正直、話の間に逃げる策でも考えようかとか考え、しかしせっかく説明してるんだからちゃんと聞かなきゃな〜とか思いながら聞いていた。

しかし、話を聞いていく内に、私の考えは傾き始め、聞き終える頃には逆転していた。

「何て楽しそうなんだ!!」

つまり、うざったいクズ共を好き放題にボコれると言うわけだ。

法律？ そんな常識、俺の風紀には通用しねえ！ な存在になれるわけだ!!

さっきまで感じてた倦怠感なんて吹っ飛んだよ、参加しない理由がない！

しかも遅刻欠席やり放題？ まさに樂園フロンティアっ!!

さらには武器の携帯、バイクなどの乗り物も自由！

書類仕事なんぞ、ヴァリアーに居た頃の地獄勤務に比べれば紙切れ同然、入らない手は無い!!

「是非やらせて頂きますっ!!」

「そ、そうですか。では、この書類に記入を。」

「はい？」

渡された書類に必要事項を書き込んでいく。

所々に、ヴァリアー入隊時のと似たような部分がある辺り、やっぱり普通じゃない。

「出来ました！」

「はい、確かに。」

「終わったかい？ なら早速他の委員の応援に行って来て。」
「了解です、委員長殿？」

恭弥君が投げ渡してきた腕章を付け、早速現場に急行する。

いやゝ。初日からこんな事になるとはね！

これから楽しくなりそうでワクワクするよ、やっぱ人生楽しんだ者

勝ちだよな？

第二十話（後書き）

リボーンのSSで風紀委員加入って多いですよ〜。

雲雀との絡みはやっぱり風紀員っしょ。

いや、単に私に独創性が無いかwwwwww

次はもっと早く投稿出来るよう頑張ります。

ではまた

第二十一話（前書き）

一度でいいからネタ回やってみたいなあっと思って思いかきました。

二話構成でお送りします。

第二十一話

「はあ、みーちゃん怪我とかしなかったかなあ？」

あの後、授業中もずっと屋上から金属音が微かに聞こえていた。

クラスの皆が何事かと思い、さらには目撃者が一人居たらしく、その人が「転校生が雲雀さんに絡まれた。」と発言し、それからクラスの間が通夜状態だった。

最早完全にみーちゃんは地獄行き決定になっており、中にはマジですすり泣きしている人すらいた程に。

あれは短時間でみーちゃんが好かれていたのか、それとも雲雀さんの恐ろしさを改めて実感して恐怖していたのか。

どちらにせよ、次の時間も、そのまた次の時間も、クラスの状態に疑問を持った教員に生徒が事情を説明し、雰囲気が重くなるという負のスパイラルが続いたのだった。

しかし、皆の予想を大きく外し、金属音は放課後まで鳴り続けた。いつまでやってるんだと言う思いと、何故こうまで続いているんだと言う疑問を、クラスどころか全校生徒が抱き、勇気ある生徒が偵察に行った。

その結果、並盛中の全体に、「転校生が雲雀さんと五角に殺りあっている！」との情報が回った。

当然、全校生徒が驚愕し、証拠が見たいと多くの生徒が口々に言い出した。

しかし、大勢で押しかけるのは大きな危険を伴うため、陸上部の主将と剣道部の主将（代理）、空手部の主将の三人を筆頭に、カメラ等の機材に詳しい生徒が二人選抜された。

かくして、《雲雀さんの戦いを隠し撮りしよう大作戦》と言う名の、並盛中学歴史史上、永遠に語り継がれるだろう究極のミッションが開始されたのだ。

「こちらヒーロー、現在三階と屋上の中間地点、階段の踊り場にいる、オーバー。」

『こちら司令部、了解した、アイボイからの報告では、現在も特撮バトル展開中との事、充分に用心されたし、オーバー。』

一体どこから持ってきたんだ、とツツコミたくなる程本格的なトランシーバーを持った怪しげな男。

緊急避難用のヘルメットを被り、陸上競技用のユニフォームを着たこの男は、陸上部主将である。

今回の究極ミッションが立ち上がった時、まっ先に志願した英雄である。

因みにヒーローとは彼のコールサインであり、言うまでもなく英雄・

ヒーローから来ている。

アイボとはサポート部隊、相棒からもじっている。

サポート部隊は、現在人外バトルの現場の屋上の隣、もう一つの屋上から、双眼鏡で現場の状況を把握し、司令部を通して伝える役割を担っている。

「よし、引き続き任務を続行する。俺たちが、並盛の新たな歴史の記録者になるんだ！」

「ヒーロ2、了解！」

「ヒーロ3、了解！」

「ヒーロ4、了解！」

「ヒーロ5、了解！」

リーダーの声に鼓舞される様に、他の実戦部隊四名から意気のいい声が上がる。

ヒーロ2は剣道部主将代理（諸事情により）、ヒーロ3は空手部主将。

ヒーロ4・5は撮影用カメラを扱う為のカメラマンと、何かあった時のサポートである。

これが、今回のミッションに名乗りをあげ、その中から全校生徒の厳選により選ばれた精鋭の勇者だ。

何でこんな短時間で全校生徒の厳選が終わるんだよ、とか、準備するの早すぎだろ、等の疑問は残るが、それは今回の出来事が、並中心にとってどれだけ重要度が高いかを示していると言えるだろう。

心をつににした者たちの作業スピードは、まさに団体と言う枠において、境地とも言える物だったに違いない。

「よし、それではこれより、屋上への侵入を試みる。」

「了解っ！」
「了解っ！」
「了解っ！」
「ん？」

三名が返答する中、残り一名、カメラマン役の生徒が暗い顔であった。

「どうした、怖いかな？」

「い、いえっ！ そんなことは・・・」

「無理をするな、震えているぞ。」

「あ、こ、これ・・・は・・・」

凶星を突かれ、黙る生徒。

「少年、お前は一年生だな？」

「はい、そうです。」

「何故、この作戦に志願した。危険なのは承知だろう？」

「勿論です。」

ヒーロー1の問いに、即答するヒーロー4。

「ではなぜだ。」

「俺は、ずっと機械弄りしか能がない落ちこぼれでした。勉強も、運動もダメで、これしか取り柄がないんです。」

何やら突然身の上話を始め、これまた何故か全員が静かに聞き入っていた。

「親や友人には、取り柄があるだけいいじゃないかって言われました。俺も、何もないよりはマシかなって思っていました。」

「ほう。」

「でも最近、小さいころから何の取り柄もなく苛められてた、一年の沢田って奴がいるんですけど。そいつがやけに凄い事をやるようになったんです。」

「沢田と言えば、剣道部主将の持田を素手で倒したっていう奴じゃないか？」

「はいそうです。」

代理で主将をやっているヒーロ2が答える。

「それ以外にも、バレーの試合で活躍したり、噂じゃボクシング部の主将に誘われたり、色んな事がこの短期間で起こってるんです。」
「ふむ、確かにそれは凄いな。苛められていたと言うのが信じられん。」

「だから思ってたんです。安心なんかしてちゃ駄目なんだって、あれだけ駄目な奴って言われてたアイツが、あんなスゲエ事やってるんだから俺だって何かやりたいって。そんな時、今回の作戦で、カメラを扱える人が必要だって聞いて、これしかないって。」

「ふむ、成程な、よくわかった。」

モブキャラの長話が終わり、やっと進展である。

「皆も聞いてのとおりで。ここには、この少年のように、己を変えたいと言う高い志を持ってこの任務に当たっている者もいる。」

そして、それは俺にも、いや、お前達にも言える事だ！」

「「「？」」」」

分かっていない様で、三人が不思議そうな顔をする。

「いいか、今回我々は、雲雀恭弥の戦いを隠し撮りすると言う偉業

を成す。しかしそれは当然、本人には無許可だ。従ってこの任務は、風紀委員に刃向かう行為でもある。」

「「っ!!」」

「無論、バレればタダでは済むまい。いや、間違いなくバレるだろう。私達の任務達成条件は、撮影し、皆に届けられるかどうかだ。撮影する前に取り上げられれば、制裁だけでなく、この作戦に臨んだ多くの者たちの思いが無に帰すのだ!!」

無駄にシリアスな空気に染まりつつある現場。

因みに連絡用の回線も開いており、司令部やアイボチームも聞き入っている。

もはや彼らの顔は、これから戦場に赴く兵士のそれである。

「しかし、それでも我らはやり遂げねばならない! これまで、あの雲雀恭弥がこの並中に入學してきたあの日から、我らは風紀委員の驚異に怯え、従ってきた。しかし今日、この日、我らは自らの意思を持って風紀委員に反抗するのだっ!」

周りから、おおおっと声が上がる。

「我らは、変わらなければならない! 学校生活を、いや、未来を切り開く為に!!」

「そうだっ!」

「俺たちがやるんだ!!」

「目にもものませてやるぜ!」

「やってやる、やってやるさ!」

部隊の士気は無駄にMAXである。

「よし行くぞ。だが、これから死地に赴く諸君には無理強いであ

ろうが、敢えて言わせ貰おう！ 死ぬなっ！！」

【了解！】

一致団結となったチームが、いよいよ戦場へと踏み出す。

これは、並盛中学校に永遠に語り継がれる、モブ勇者達の物語・・・。

第二十一話（後書き）

本編が早く読みたかった人、ごめんなさい m () m
もう一話続きます。

第二十二話（前書き）

続いてGO!!

第二十二話

最強の風紀委員長こと、雲雀恭弥。
謎の美少女転校生こと、夜月満。

二人の人外が、これまた人外バトルを繰り広げている屋上を見た瞬間、彼らの脳は停止した。

しかし、それを責められる者は何処にも居ないだろう。

何故ならそれ程までに、彼らはとんでもない光景を目の当たりにしたのだから。

「さっさと咬み殺されなよ。」

「やなこったい？」

平然と殺すとか言っている雲雀恭弥に、平然と応戦している転校生。これはいい、いや、本来ならこれらも尋常じゃない状態ではある。不良達を束ね、並盛最強と呼ばれる男と、見た目はか弱そうな少女が平気な顔をして五角に戦っているのだから。

さらには二人の動きが早すぎて、こころなしか残像すら見えている気がする。

これだけで既に人外魔境である。

しかし、それ以上に勇者チームの思考を停止させるものがあつた。

「おい、これ、夢だよな？」

「いや、夢以外ありえないだろ。」

ヒーロ2・3が現実逃避を始めた。

「お、落ち着け。気持ちには解るが、これは現実だ。」

「だ、だって隊長。これはあんまりでしょう。」

「そうですよ、だって・・・地面が。」

そう、彼らの見た屋上は、もはや彼らがのんびりと過ごしたかつての姿を残していなかった。

そこらかしこにクレーターののような物が出来ていて、一面がデコボコになっているのである。

とてもじゃないが、人が歩ける場所ではない。

「ありえねえ、こんなことが人間に出来んのかよ!？」

「マジで化け物だ、アイツら!」

「こんな状況だなんて聞いてねえぞ。」

恐らく、アイボチームの視点からでは、ここの地面の状態までは見れなかったのだろう。

しかし、この惨状は二人の仕業ではないが、彼らにそれを知るよしもなく、彼らからすればこの惨状は二人によってもたらされた地獄以外の何者でもない。

「くっ、怯むな! 私達が吉報を示す時を、多くの者達が待っているのだぞ!!!」

「「「っ!!! 了解!」」」

「よし、所定の位置に移動する。」

何とか使命を思い出し、前進する一行。

自分たちが入ってきた入口のさらに上、貯水タンクの所まで移動し、少し上の場所から撮影する作戦である。

ここで最も重要なのが、二人に極力気づかれずに撮ると言うこと。

色んな意味でとばっちりを食らわぬ様にして、被害を最小限に止め、撤退時の戦力を確保すること。

万が一の場合、記録テープをカメラマンが持ち帰り、他の者が全力で足止めする為だ。

いわば緊急時の死兵である。（実際には階段の時点で気づかれているのは知らぬが仏）

しかし、彼らに降りかかる驚異は、それだけでは無かった。

「ぐはあっ！」

「!? どうした、ヒーロ2！」

突如倒れたヒーロ2の元に行くと、足元に拳大のコンクリの塊が転がっていた。

「! こ、これは、まさか!？」

そう、雲雀と満流。

二人が戦う余派として、例えば雲雀の攻撃を満流が避けた結果、地面に当たり、衝撃でコンクリの破片などが周りに飛ぶなどの二次被害が発生しているのだ。

「くっ、まさかこんな伏兵が！」

「た、隊長、行って・・・ください。」

「ヒーロ2!？」

「自分は、ここまでです。どうか自分の・・・分ま・・・で・・・」

息絶えるヒーロ2。

「あえて言った筈だぞっ！……くそっ！　行くぞ、犠牲を無駄にするな。」

【了解！】

悲しみをバネに、進んでいくヒーロ達。
貯水タンクの元に辿り着き、遂に撮影を開始する。

「よし、これより出来る限り長く撮影を続ける。　継続が困難と判断した場合、ヒーロ4は記録を持って撤退、他はそれを全力で援護だ。」

【了解！】

「よし、では撮影開始！」

号令と共に、ヒーロ4がカメラをまわし、他のヒーロは、飛来するコンクリの塊を排除している。

「くっ、数が多い！」

「三人で対処してるってのに！」

「怯むな、散っていったヒーロ2の為にも！」

何とか己を奮起させ、応戦していく。

しかしコンクリの塊は、減るどころか増える一方。

『こちら司令部、アイボ1より、戦闘の激化が報告されている！
そちらはだいじょうぶか！？　オーバー。』

「こちらヒーロ1！　戦闘の激化に伴い、コンクリの破片の被害あり！　既にヒーロ2がやられた！！！」

トランシーバーの奥から、息を呑む気配が伝わってくる。

このやり取りの間にも、破片の勢いは増すばかり。

「くっ！ カバーしきれない！」

「はっ！？ しまっ！！」

「えっ？」

ヒーロ3が対処しきれず破片を取り逃がす。

それは、まっすぐにヒーロ4の顔面へと向かい、放心した彼には避けられない。

誰もが目を逸らしそうになった瞬間、背後から一つのかげが飛び出す。

「お前は！？」

「「ヒーロ2！！？」」

誰もが息絶えたと思っていたヒーロ2が、捨て身で破片に向かっていった。

「俺はユニオン・並盛のお、フラッグファイター・・・剣道部主将（代理）だああああああああ！！！！！！」

雄叫びを上げながら破片と激突し、後方に吹っ飛んでいくヒーロ2。彼が最初に何を言おうとして修正してのかは、永遠の謎である。

「ヒーロ2ううううう！！！」

自身を庇って散ったヒーロ2の死に様に、ヒーロ4は悲しみの叫びをあげる。

しかし、被害はそれだけでは無かった。

突如、学校全体で、少年の心を震わせそうなBGNが鳴り始める。
近所迷惑ガン無視の大音量で。

「うおおおおおおおー！ー！ー！！！」

カメラを構え、屋上の地面へと降り立つイノベ・・・もといヒーロ
4。

その瞳がなんか黄色に光っていたりいなかったり。

「なに、あれ？」

「いや、私に聞かれても・・・。」

流石の二人も、中断してヒーロ4を見る。

「うおおおおおおおー！ー！ー！！！！！」

二人にむかって突っ込んでいくヒーロ4。

勿論カメラは構えたままで。

しかしそのスピードは、常人の三倍に匹敵するものだった！

「ちょ、微妙に怖いんだけど。」

「どうでもいいさ、邪魔したんだから咬み殺す。」

満流との戦いを邪魔され、不機嫌気味な雲雀が迎撃する。

「たああああー！ー！！！！！」

「っ！」

「ほお？」

それをヒーロ4はなんと紙一重で避けた。

流石の二人も驚愕する、避けられるなんて思いもしなかったからだ。その間も、ヒーロ4は二人の間や周りを駆け巡り、二人の姿をカメラに収めている。

そう、ただ収め続けている。

「えっと、どういう事？」

「僕にきかないでよ。」

ただひたすらにカメラで撮り続けるその様に、次第にうっとおしい気分になってくる二人。

しかし、偶に攻撃してみるも、見事な迄に避けるヒーロ4。まさに奇跡である。

「う、うざい・・・」

「目障りだよ・・・」

いい加減キレそうな二人、そろそろ本気で殺ろうかと思った瞬間。

「あっ！！」

「「あ・・・」」

足元のデコボコに足を引っ掛け、ズザザーっと、転ぶヒーロ4。

その際、カメラを落とし、かなりの勢いがあつたせいか派手に飛んで、とつくに壊れた柵を超えて落ちていった。

「・・・・・・・・。。」

「・・・・・・・・。。」

「・・・・・・・・。。」

流れる沈黙。

「え、えーと。 あのですね。」

一番に口を開くヒーロ4。

「じ、実はこれは・・・。」

「ねえ。」

「は、はいいい!？」

言い訳をしようとした矢先、雲雀に声をかけられて悲鳴混じりに答えるヒーロ4。

もはや先程までの気迫は無く、いつの間にかBGMも止まっていた。

「校内における無許可の撮影行為、及び放送施設の無断使用、覚悟出来てるよね。」

「い、いやそれは・・・。」

「問答無用。」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「ドンマイ?」

その日、最後に生き残った勇者の悲鳴が並中に木霊した。

因みに、落ちたカメラは全損したが、奇跡的に記録は無事であり、全生徒に配信された。

これにより夜月満流の伝説が幕を開けるのであった。

第二十二話（後書き）

やりきった・・もう悔いはないぜw w w w w w w w

さて、いかがだったでしょうか？

突然ですが、わたしはガンダムOOが大好きです。

この話を思いついたのは、書き始める十分前でした。

最初はそんな事がありましたあみtainな感じで流す話だったんですが、どうせならネタ回として書いてみよっかなあと思い、書いた所存です。

なので、ガンダムOOネタを一期と二期目、劇場版のも含めて入れちゃいましたw w w

OO見たことないって人は、茶番を見せてしまっって申し訳ありませんでした。

いや、もしかしたら知ってる人でも茶番かも（汗

つまらなかったら御免なさいm（　　）m

只の自己満足回だったので、次回から本編書きます。

もし、万が一、面白いと思ってくれた方がいた場合、感想などくれると嬉しいです。

それではまた（〇・・〇）／
～

第二十三話（前書き）

活動報告にも書きましたが、書き溜めしてたデータが吹っ飛び、やる気も一緒に吹っ飛びました。

大分遅れてしまい、申し訳ありません m () m

一度書いた文を一から書き直すというのがこんにも苦痛だとは思わなかった・・・。

しかし、ようやく一話書き上げたぜ b

ではどうぞ

第二十三話

「うわあっ！」

飛び起きて、荒い息を整える。

少し回復してから周りを見渡すと、先程と変わらない、いつもの自分の部屋。

いつの間にか眠ってたみたいだ、時計が四十分程進んでいた。

「な、なんだあ、夢か。」

溜息を吐き、再びベッドに横になる。

「変な夢見た、なんだよアレ。」

「どんな夢見てたんだ？」

「あつ、リボーンお帰り。」

「おう。」

気づいたらリボーンがドアの所に立っていた。

下校するとき、用事があるとか言って何処かに行ってしまったんだ。

「それで、どんな夢見たんだ？ 京子のエロいシーンでも見れたのか？」

「ばっっ！！ 違うって！ そんないいもn・いやいや、変態な夢じゃなくて！」

「じゃあどんなのだ？」

「だから・・・。」

リボーンに夢の内容を説明する。

不思議なくらいに鮮明に覚えていたから、話終えるのに十分掛かった。

「って夢なんだ・・・。」

「・・・ツナ。」

「へ？」

ゆっくりとオレに歩み寄って来たリボン。

何かと思えば、俺の肩にポンツと手を置いて。

「疲れてんだな、今日は早めに寝て、ゆっくり休むといいぞ・・・。」

「なあ！？」

なんて事を言ってきた。

いや、自分でも変な事言ってるって分かってるよ？ わかってるけども。

表情は全くと行っている程変わってない筈なのに、リボンの目が本気で氣遣わしげなのが無性にムカついた。

「べ、別に疲れてなんか！！」

「遠慮すんなツナ。確かに最近、お前には色々大変な思いをさせてたから・・・お前じゃなくても、疲れちまうのは仕方ねえさ。」

普段なら天地が引っ繰り返しても言わないような言葉のオンパレードだ。

あまりにも複雑と言うか、対応に困る。

「そ、そう言えば！ 結局用事ってなんだったの！？」

「ああそれか。」

無理やり話題を変える。

用事の事が気になってたのは本当だし、これ以上夢について話していたら痛い奴認定されるかもしれない。

「転校生の事を観察しに行ってたんだ。」

「ふーん転校生を……て……はああっ!!??」

「いちいちうるせえぞ。」

「グヘッ!」

左頬を思いっきり蹴り飛ばされ、ベッドの横に倒れる。

相変わらず、一体そのサイズの体のどこから絞り出してるのか聞きたくなるような威力だ。

リボンと出会ってほんの数ヶ月だけど、既に俺の中の常識はとっくに粉々になっている。

「イッテテエ。それよりも、何でみーちゃんを観察なんてするんだよ!」

「決まってるだろ、ファミリーにするためだ。」

「やっぱりかー!」

予想はしていたけども。

万が一と思って縋り付いた希望は一瞬で消し飛んだ。

「あの女の強さは相当だぞ。少なくとも、今日見た限りでは雲雀と同等以上なのは間違いねえしな。」

「ま、まあみーちゃんは昔から強いけどさ。」

「そういや、アイツお前の知り合いか?」

「うん、今朝言っただろ? 昔いた俺の友達。」

「そうか、アイツが……。」

俺が説明した途端、口元だけをニヤリと曲げて笑うリボーン。
あまりの変化に、思わずビクツとなった。

「そいつは都合がいいな。ツナ、お前がアイツを誘え。」

「ええ！？ 嫌だよ！ 絶対にお断りだ！！」

「別に言葉巧みに引き入れろって訳じゃねえ。お前が夜月の奴に声をかけて、俺の所に連れて来るだけでもいいんだぞ。」

「どれでも嫌だよ！ だってそんな事したら・・・！！」

「なんだ？」

「あっ！？ いや・・・何でも・・・ない・・・」

「？」

口ごもる俺の様子を見て、首を傾げるリボーン。

危なかった、もう少しで言ってしまう所だった。

もしリボーンがみーちゃんの性格を知れば、絶対に見逃しはしない

だろう。

だって・・・だってみーちゃんは・・・。。

そんな面白そうな事は絶対に断りはしないのだから・・・。

そうだ、昔っからみーちゃんは面白い事には何が何でも関わろうとする。

マフィアとかボスとかファミリーとか。

俺には全く理解出来ないけど、少なくとも今回の事がみーちゃんにとって、もの凄く面白そうな事に入るのは明確だ。

リボーンに勧誘されれば、まず間違いなく二つ返事で入ってしまうだろう。

それどころか、「ボスの右腕は私だ〜!」とか言って獄寺君と一騎打ちとかやり出しかねない。

「と、とにかく! 俺はみーちゃんを巻き込むのは絶対に反対だからな!」

「どの道無関係じゃいられねえと思うぞ。 アイツ、今日風紀委員に入ってたからな。」

「・・・・え?」

「帰りが遅れたのもその為だぞ。 並盛のあちこちに飛んで行って、ゴロツキ共を百人近く半殺しにしてたからな。」

「・・・・ええええええええええ。」

最早それしか言えなかった・・・・。

「ふんふんふ〜ん? きょーおーはなーにーがおっきるーかなー?」

風紀委員に入った翌日の朝。

スケボーで登校しながら、今日の学校生活に胸を馳せる。

昨日大量に不良共をボコる……もとい指導した為、気分は最好調である。

あれだね、やっぱり世の為人の為になる事したから気分がいいね？
早朝で、まだ人もまばらな商店街の中。

スケボーで自転車レベルのスピードを出しながら、その上でくるくる回りながら鼻歌を口ずさむ。

周りから珍妙な物を見る目を向けられても気にしない！
だって私、風紀委員だもん？

「おや？　くんくん……これは……。」

どこからか漂ってきた臭いに釣られ、とある店の前で止まる。

ヘッドの文字がDなアニメもかくやと言わんばかりのスライドターンによる緊急停止。

ギャギャツと地面を削る様な音が響き、店の前にいた店員さんや周りの人がビクツとしていた。

「どうも……こんにちは？」

「え？　あ、はい……こんにちは。」

啞然としていた店員……この人は店長かな？　は、声をかけた瞬間に復活。

「ここってコロッケ売ってるんですね？　三年前にはこの場所には無かった筈だから……最近出来た店ですか？」

「えっと・・・はい。ちょうど一年前に開店しましたが、引越して来た方ですか？」

「そうなんですよ、つい一昨日帰って来たばかりで、何か変わったかなあって見て回ってたんですか？」

「へえ、そうなんです・・・あっ!？」

困惑が取れ始めていた店長さんが、突然驚愕した表情で固まる。

どうしたのかと思いきや、目線を辿ってみれば簡単解決。

そこには私の左腕に付けられた風紀の腕章。

「え・・・っと、もしかして並中の風紀委員の方・・・ですか？」

あからさまに低姿勢になる店長。

顔色が真っ青である、どんだけ恭弥君は恐怖の象徴なのかと・・・。

「まあ昨日入ったばかりの新人ですけどね。あと、出来れば他の風紀委員に対するような畏まった対応はしないでいいですよ？」

「え？　で、ですけど。」

「いやいや、年上の人にそんなビクビクされたら結構傷つくんですけど。それに、私の仕事は風紀を乱すあんちきしょう共の制裁であって、町民さん達を問答無用でボコす訳じゃないですよ？」

「は、はぁ・・・。」

未だに挙動不審さが抜けきらないものの、大分落ち着いてきた店長。気が付けば周りにいた人達もホッとしている様な空気が漂っている。いくらなんでも怖がり過ぎでしょう。

これって風紀委員の存在が一番町民の安寧を損なっているのではないかい？

「あ、風紀委員と言えば！　そう言えば貴方は昨日不良達を薙ぎ倒していた人ではないですか？」

ふと店長さんが漏らした言葉に、まわりから「そう言えば・・・」
「言われてみればあの子だ。」と言った声が囁かれ始めた。

「ええまあ、確かに昨日アホ共を殺ってましたけど・・・」

「やっぱりそうですか！　昨日はありがとうございます！！」

「はい？」

「俺らも言わしてください、ありがとうございます！！」

「なん・・・だと・・・。」

気づけば他の店の店長さん達と思われる人達が口々にお礼を言うてくる。

あれ？　あんなのいつも風紀委員がやってんじゃないの？

「他の風紀委員の人達は、なんていうか、不良達を制裁する為に店とか周りの物を使って暴れますから。被害がこっちに來る事が多いんですよ、酷い時は店の中で乱闘するくらいで・・・その後はその日の営業を断念する時もある程に・・・。」

「何やってんだよ風紀委員・・・。」

「だけど、貴方は昨日、周りに被害が出ないように戦ってくれました。御陰であのあとにも無事に営業が続けられて、沢山の店が助かりました！」

「いやいや、別にそこまでお礼を言われることでも・・・」

「そう言う訳には行きません！！」

「うわお！？」

譲れないとばかりに詰め寄って力説するコロッケ店長さん。
周りの店長、sもしきりに頷いている。

どんだけ被害に会ってきたんだ……。

風紀を守る人達が店内で乱闘とか、本末転倒もいいところじゃない。これは恭弥君に言っておいた方がいいのかな？

「分かりました、私の方から委員長にそれとなく言っておきますね。」

「な、なんと！？ 雲雀さんにですか！！ 大丈夫なんですか！？」

「大丈夫です？ なにせ私は……恭弥君のパートナーですか
ら……！！！」

【おおおおお……！！！！】

歓声に包まれる商店街。

時間も迫り、段々と人も多くなっていく。

道行く人が騒ぎを聞きつけ、近くの人に話を聞いてといった具合に騒ぎが広がっていく。

「おっと、もうこんな時間。 それでは、私は学校があるので、さよ～なら……？」

「あっ、はい！ お気を付けてー！！」

商店街を抜けるまで、数々のお店から様々な差し入れを貰い、ホカの焼きたてコロッケを食べながらスケボーを走らせるのだった。

「このコロッケは……至高のコロッケかもしれない！！」

「おっはよーく？」

「あつ、みーちゃん！」

「おう、お早うツナ君！」

「うん、お早う。」

いつも通りに登校してきたみーちゃん。

どうやら雲雀さんとの戦いで傷とかは出来てないみたいだ。

ホッと息をつく、雲雀さんを相手にして無傷なんて、やっぱりすごいなあ。

「お、夜月じゃねえか。 お早うな。」

「うん、お早う武君？」

山本とはもうすっかり仲良さげに挨拶してる・・・獄寺君は自分の席に座っていてこっちに来ないけど。
それよりも気になるのは・・・。

「ねえみーちゃん？」

「ん？」

「そ、その腕章ってやっぱり・・・。」

「ああこれ？」

そう言つて左腕を前にして見せてくる。

そこにあるのは、中学校のとは思えない程の立派な意匠で形作られた風紀の二文字。

言うまでもなく並中風紀委員の腕章だ。

「実は私、昨日恭弥君に言われて風紀委員になつたんだあ？」

「や、やっぱり・・・。」

出来れば嘘であつて欲しかった。

みーちゃんの言葉を聞き、クラス中の生徒が一斉に此方を向いている。

それは驚愕であつたり、畏怖であつたり、恐怖であつたりと様々。

しかしそんな中、一人の女子生徒がみーちゃんに近寄ってくる。

というかその子は・・・

「あの、満流ちゃん。」

「うん？ おお！！ 京子ちゃん！？」

「うん！ 久しぶり、元気だった？」

「うんうんそりゃあもう！ 京子ちゃんも、三年ですっかり美少女になつちやつて！！」

とても嬉しそうに話す二人。

そう言えば、昨日はみーちゃんに群がる人、特に男子生徒達の勢いが凄くて話せなかつたんだよな。

午後は雲雀さんとバトルしっぱなしだったから、結局再会を喜ぶ時間がなかつたんだ。

京子ちゃんは特に、やつと話せて凄く嬉しそうだ。

花が咲くみたいな笑顔が、凄く可愛い。

そんな京子ちゃんとみーちゃんが笑い合って話しているせいか、教室中の男子が二人を見て鼻の下を伸ばしていた。

殆どが顔を赤くし、二ヘラと笑っている奴も一人や二人じゃない。ってかよく見ると廊下にもいるし！

そんな光景がしばらく続き、チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきた。

廊下にいた生徒が慌てて自分の教室に帰っていく。

しかし、やはり多くの生徒が風紀委員となったみーちゃんの方をチラチラと見ている。

やっぱり気になる、いや、怖いのかも知れない。

そりゃあ雲雀さんと同じになった訳だし、みーちゃんの事をよく知らない人ばかりだから仕方ないか。

そんな風に思いながら担任の話を聞き流していると、不意に教室の前の扉が勢い良く開いた。

皆がビククリしてそちらを見ると。

「夜月満流は来てる？」

心無しかいつもより不機嫌そうな雲雀さんがいた。

第二十三話（後書き）

今回はあまり目立った展開のない話でしたね〜ww

消えていった次からの話も、順次復活させていきます。

テンション的な要因で遅れる可能性は大ですが、二・三日に一話は頑張って投稿しようと思うので。

それでは・・・。

第二十四話

「はいコレ。」

「・・・・・・。」

現在、応接室の机の上にピサの斜塔が立っている。

いったい何処から取り出したのかと聞きたくなる程に高くそびえ立ち。

今にも雪崩に変わってしまいそうな程にグラグラと揺れている。

「これ？」

「これ。」

「なにこれ？」

「書類仕事だよ、君の分の。」

「・・・・なんと・・・・。」

啞然と見上げる私。

ヴァリアーもそうだったが、労働基準法なんて幻想であったかの様な鬼畜っぷりだ。

「なんで入会二日目にして罰則レベルの仕事受けさせられるの？
新手の新人いびり？」

「違うよ、昨日君が活動後の報告を怠って帰宅したからだよ。」

「罰ゲームってわけっすか・・・・。」

「そう。」

そう言われると反論出来ない。

昨日はあまりの気分爽快さに、報告なんて脳みそから抹消されてたし。

まあ、授業出ないでいいんならすぐに終わるか。

さっそく他の机に移動（いつの間にか私用の机が用意されていた）。
中から一枚ずつ引き抜いて処理する。
高すぎて上から取れないのだ。

「しかし、まさか授業中にやらされるとはね〜。」

「どうせ君なら授業なんて受ける意味ないだろう?」

「何を基準に?」

「勘だよ。」

「勘って……まあ確かにそうだけどさあ。」

中学の範囲なんて親を殺す前に済ませからね。

元々学校にだって通う意味は無いんだけど、面白いからね。

一時間、二時間と時間が過ぎていく。

私と恭弥君は無言で作業をこなしていく。

途中で草壁さんが来て、事務連絡をしたり、紅茶を入れてくれたりした。

「そう言えば、今朝商店街の人達と話したんですけど。」

「そうですか、どうかしたのですか?」

「いやですね? 風紀委員の人がチンピラをボコす時の被害が店にまで及んで営業出来なくなるって言って困ってて、私が昨日被害を出さずにボコったのを感謝されたんですよ。」

「そうでしたか。」

そう言って、草壁さんがバツの悪そうな顔をした。

「そう言った事は前々から確認していたのですが、何分うちの委員

達は血の氣が多い者達ばかりで・・・」

「ああやっぱり？　じゃあ恭弥君が直接言えはすぐに改善されそうじゃないですか？」

「いや・・・それがその・・・」

横目で恭弥君を伺う草壁さん。

私もつい目を向け、恭弥君が視線に気付いてコチラを見る。

「なに？」

「風紀委員が商店街の店に被害出してるから、恭弥君が注意してくんない？」

「いやだ。」

「何故に・・・」

「面倒。」

並盛全体の情勢にまで関与する癖に、なんでこの程度が面倒なの？

「じゃあ私が言うから皆集めてくんない？」

「別にいいよ、放課後に体育館に集めるから。」

「それはいいんだ・・・」

集めるついでに一言って発想は無いのか。

これがヴァリアークオリティならぬ雲雀クオリティなのか。

「ありがとね。よし！　終わりっど？」

「えっ！　もう終わったんですか！？」　一週間分の仕事だった筈なのですが・・・」

おい、罰則じゃなかったのかい？

「満流はこうでもしないと必要最低限の仕事しかなさそうだからね。」

「なぜそれを・・・。」

バレていたなんて。

書類仕事はそこそこに、チンピラ教育を最優先するつもりだったのが見抜かれていたとは。

「でもまあそう言う事なら暫く書類仕事な無いつてこも・・・。」

「何言ってるの？ 仕事はいくらでもあるんだから明日もちゃんとあるよ。」

「・・・草壁さん、日本はいつから労働基準法を廃止したんですか？」

「今もちゃんとご存命ですよ。 しません。」

入れたての紅茶が入ったカップを私の机に置きながら謝ってくる。なんて出来た副委員長さんなんだ。

置かれたカップを手に取り、紅茶を一口飲む。

落ち着くねえ。

「さあてと、仕事も終わったしい、どうしよっかな？」

「授業は受けないのですか？」

「いや、何かもう受ける気分では無くなってしまってますね？」

「そ、そうですか。」

「はい。 ん～～～～、とりあえず屋上にでも行ってみますか。」

室内よりはあそこに居る方が気分も晴れるだろうし。

紅茶を飲み干し、応接室を出て階段に向かう。

勿論だが廊下に人気はなく、校庭から体育の授業を受ける生徒達の

声が聞こえてくる。

階段を昇り屋上への扉を開く。

心地いい風が肌を撫で、なびく髪を無意識に抑える。

「ふう、仕事で疲れた心が癒される様だ、？」

棒読み混じりに眩き、屋上の真ん中辺りまで歩を進め、目を閉じる
先程よりも校庭の声がよく聞き取れ、風が少し強くなる。
強めになびく髪を、今度は抑えずに身を委ねる。

「さってと……そろそろいいよね？」

少しの間沈黙が続いた後、私は目を開けて、大きめの声を出して呼びかける。

「話したいから、気付きやすい視線を送ってたんでしょ？　ここなら二人っきりでお話できるよ？」

「そいつはありがてえな。」

「でしょ？」

振り向いて、屋上の出入口の上、給水タンクの方に目を向ける。

そこには懐かしのマーモンを思い出させる様な、黒いスーツ姿の赤ん坊がいた。

「それで私に何か用かな？　赤ん坊君？」

夜月満流。

ツナの昔の友達で、小学校三年の時にイタリアへ渡る。

そこから妙にあちこちの国を転々として、時々消息が解らない時期が多々あった。

この時点で一般人じゃねえ可能性は大きかったが、昨日コイツを見てそれは確定した。

雲雀と互角に戦える中学生なんぞ、そもそも凡人じゃねえ。俺が今こうして見ている、隙なんて全くねえんだからな。

「ちやおっす。初めましてだな夜月満流。俺はツナの家庭教師のリボーンだ。」

「ツナ君の？ 家庭教師なんて雇ったんだあ。リボーン君は赤ん坊なのに家庭教師やってるの？」

「見た目は赤ん坊だが、俺は超一流の家庭教師だぞ。」

「ハハッ、そうなんだあ？ ツナ君もこれで安心かな？」

雰囲気こそ子供に対する態度だが、コイツの目には子供の話に付き合ってる様な感じはねえ。

つまりは俺の言ってる事を真実だと思ってる。
大概は子供のお遊びと思う話をだ。

つまりコイツは、俺が只の赤ん坊だとは思ってねえって事だ。
そうでなけりゃただの馬鹿だが。

「それで、超一流の家庭教師さんが私に何のご用でしょう？」
「単刀直入に言うぞ。 夜月、お前ツナファミリーに入らないか？」

瞬間、夜月の眉がピクッと動いた。

「ファミリーってなに？」

「マフィアの事だぞ。 ツナはボンゴレファミリーの次期ボスになる、だから今仲間を探してるんだ。」

「ふう〜ん、次期ボス・・・ねえ・・・」

考えている様子の夜月、しかし口元は先程からつり上がっている。
どっちかつつうと好感触みてえだな。

「だから昨日から私を観察して見定めてたのかな？」

「やっぱり気付いてたか・・・」

「気配だってそんなに消してなかったじゃない？」

そう言って笑う夜月。

それだけ見れば普通の女子中学生だが、目だけは俺から逸らさずに
観察してやがる。

「で、どうだ？」

「う〜ん、面白そうだから入ってもいいけど。 条件があるかな〜」

？」

「言ってみろ。」

「面白そうなバトルがある時は必ず呼んでくれればそれでいいよ？
めっちゃ強い人がいるなら文句なし！」

親指をグッと突き出してくる、思ったよりマトモな条件だったな。

「それくらいなら問題ないぞ、他にはないな？」

「うーんと・・・あつ、それとこれは言っておきたいんだけどお・
・。」

「なんだ？」

次の瞬間、場の空気がガラリと変わった。

変わらず笑みを浮かべる夜月。

だがそれは先程までの無邪気な笑顔とはまるで違う。

獲物を狙う獣のような、森の中で息を潜める狩人のような。

犠牲者を嘲笑う殺人鬼のような、敗者を踏みつける勝者のような。

他者を下し、上へ先へと歩みを止めない。

民を見下す王女のような、どこか冷たく鋭く、そして妖艶な笑みを
浮かべている。

「私はいつも、味方とは限らないからね？」

自然と、口元がニヤけるのを感じる。

俺はどうやら、想像以上の奴を見つけたみてえだ。

「ああ、それでいいぞ。よろしくな、満流。」

「うん、よろしくねリボン君？」

空氣が霧散し、元通りの無邪気な笑顔に戻る。

丁度四時間目の終了のチャイムが鳴り、昼休みになった。

「なら丁度良いからファミリーに紹介するか。」

「オツケー？ お弁当食べながら皆で親睦を深めよつか！」

満流が屋上を出て、俺はその肩の上に飛び移る。

周りから奇異の視線を受けながら、ツナの教室へと向かった。

「と言うわけで新しくファミリーになった満流だぞ。」

[illegible]

「なっ!？」

「おお。」

昼休みのチャイムが鳴った後、獄寺君や山本と昼を何処で食べるか迷っていた時に、みーちゃんはようやく帰ってきた。しかも、肩にリボーンを乗せて。

リボーンに話があると言われ、五人で屋上に来た。

この時点でもう嫌な予感しかなかったけど、希望は捨てたく無かった。

たまたま意気投合したとか、風紀委員と取引したとか？

とにかく何でもいいからみーちゃんがマフィアに関係する事以外の何かであって欲しいと。

だけど、無情にもそれは打ち砕かれた。

信じたくない事実を突きつけられ、思わず大声を出しちゃった。

獄寺君も驚いていて。

山本は驚いてはいるけど仲間が増えてラッキーみたいな空気だ。

「という訳で、じゃないよりボーン！！ あれだけ駄目だって言ったのに！」

「それは聞いたが、諦めるなんて言った覚えは微塵もねえぞ。」

「なあっ!？」

た、確かに言っていないけど！

じゃあ昨日の苦労は最初から・・・無駄。
薄々分かっていたけれど、切ない・・・。

「待ってくださいリボーンさん！ 俺は反対です、雲雀んとこの奴をファミリィに入れるなんて!!」

そ、そうだ！

まだ獄寺君が居た。

みーちゃんとの不仲はどうかしたいと思っていただけ、今回だけは助かった。

どうにかリボーンを説得してくれれば！！

「風紀委員のスパイかも知れません！ 十代目の身に何かあったらどうするんですか！？」

その調子、頑張って！

「まあまあ、落ち着いてよ獄寺君とやら。そう邪険にしないでよ。」

「うるせえ！ お前はすっこんでろ！！」

笑って話し掛けたみーちゃんに、獄寺君が吠える。

こ、怖ええ。

でもみーちゃんは涼しい顔で話を続ける。

「聞киなつて。私もね、ツナ君にボンゴレのボスになって欲しいんだよ。」

「な、なんだと？」

あれ？

「マフィアの世界で誰もが恐れ、敬意を表するボンゴレファミリー。そんな強大なボンゴレを継ぐ資格を持つのはこの世でツナ君だけだよ。」

「わ、わかってんじゃねえか・・・。」

え？ みーちゃん？

「それにね？ リボーン君から聞いたよ、そんなツナ君をいつも傍で支える獄寺君の事。まさにボスの右腕の理想の姿だって思ったよ！」

「ま、まあな！ 十代目の右腕は俺にしか務まんねえからなあ！」

ご、獄寺君？

「今はまだまだ未熟な私だけどね？ そんな獄寺君の下で勉強させて貰って、少しでもツナ君の為に何か出来たらなあって思ったんだよ？」

「し、仕方ねえなあ！ そこまで覚悟があんならちつとは教えてやらねえ事もねえけどなっ！」

そ・・・・・・・・んな・・・・

「さっすが獄寺君！ いよっ、右腕の鏡！ ツナ君の最も頼りにする男！！」

「へへっ、当たり前だぜ！！！」

完全に懐柔させられた獄寺君。

山本はそんな光景を面白そうに見ているだけ。

リボーンは俺と目が合った瞬間、ニヤツと口元だけを歪ませた。

「嘘だあああああああ！！！！！！！！！！」

俺の叫びが、屋上に虚しく響いた。

第二十四話（後書き）

少しづつテンションが回復してきました！

速く投稿するためにがんばります。

話は変わりますが、トゥリニセツテの三乗の部分を数字で表すにはどうすればいいんでしょうか？

どうしても分かりません（汗

まあまだ気にする段階じゃないんですけどね W W W W

誰か教えてくだせえ〜。

第二十五話（前書き）

あれ？　　そう言えばスクア―ロの髪って昔は短髪じゃん！！

と、今更気付いて修正しましたW W W W W

第二十五話

ツナ君のファミリーになってからしばらく。

体育祭季節となり、今はその準備期間。

ああ、風紀委員の件なら、ちゃんと話したら皆了承してくれたよ？

少し不満を垂れる人もいたけど、めげずにお話して想いを叩きつけたら快く受け入れてくれた。

それはもうガタガタ震えて涙まで流していた程に？

並中では、A・B・Cの三つの組みに縦割りで別れて争うらしい。それぞれ組では総大将が一人選ばれ、最後の棒倒しでは壮絶な戦いが繰り広げられるそう。な。そして現在。

「極限必勝！！　これが明日の体育祭での我々A組のスローガンだ！　勝たなければ意味はない！」

了平さんが燃えています。

どうもA組の総大将として担ぎ上げられた様子。

まあ彼なら問題ないだろうけどねえ。

周りを見ると、兄を心配そうに見つめる京子ちゃん。

そしてそれを見て鼻の下を伸ばすツナ君。

相変わらず京子ちゃんLOVEだねえ？

はたから見ればムツツリに見えちゃうけど・・・。

「さて、今年も組の勝敗を握るのはやはり棒倒しだ。」

「ボウタオシ？」

「どうせ一年は腕力のある二・三年の引き立て役だよ。」

棒倒しを知らないらしく、首を傾げる獄寺君にネガティブ思考のツナ君。

最初っからそんな調子じゃ楽しめないよ？

「例年、組の代表を棒倒しの”総大将”にする習わしだ。つまり俺がやるべきだ・・・。」

了平さんがこんな含みのある言い回しをするなんて、天変地異の前触れ？

「だが俺は極限に辞退する！！！」

【っ！！！！！！】

了平さんの一言に、騒然となる一同。

突然、しかも本番前日になって辞退宣言なんて驚くのは当然だけど。

「俺は大将であるより、戦士として闘いたいんだ！！！」

「ふっ！」

あまりにも了平さんらしい言葉に思わず吹いてしまった。

室内は哑然とした、と言うよりも呆れたような空気で満たされている。

京子ちゃんは顔が真っ赤になっていた。

「だが心配はいらん、オレより総大将に相応しい男を用意してある。」

「え？」

「笹川以上に相応しい男だって？」

まさかの代行の存在に、一様に驚く生徒達。
他に務まる人なんていたっけ？

「1のA、沢田ツナだ!!」

【なっ!】

「へ？」

なんと・・・

その手があったか!!
なんて面白そうな人選!

グッジョブ了平さん! でも他人の名前とあだ名の区別くらいつけよう!

「おおおっ!」

「十代目の凄さ分かってんじゃねえかボクシング野郎!!」

「は? え、なんで!？」

「賛成の者は手を上げてくれ! 過半数の挙手で決定する!」

自身も高く手を上げ、挙手を促す了平さん。
しかし

「一年にや無理だろ。」

「オレ反対」

「負けたくないもんね」

「つか冗談だろ。」

やはりと言うか。

大半の者が不満そうだ、むしろほぼ全員？

「手を上げんか!!」

【（命令だー!?!）】

「ウチのクラスに反対する奴なんて居ねえよなあ!?!」

それぞれのやり方で強制的に手を上げさせる二人。
かなりの数になったが、しかしまだ足りない。
その様子を見て、ホッとするツナ君。

だが、私がいるかぎりそうは行かないぜ？

「はいはーい! 私も賛成でーす?」

「な!?! みーちゃんまで!」

「なに!?! 夜月さんも賛成なのか?」

「夜月さんがお望みなら俺もだ!!」

「俺も!」

「僕もだ!!」

「ええええええええええ!!!!?!」

次々と男子の手が上がっていく。

風紀委員になってから、ある程度どころか滅茶苦茶融通が聞くよう
になったので、存分に有効活用させてもらってる。

「なっ! 夜月って・・・あの?」

「そうだよ雲雀さんと互角に渡り合ったって言う伝説の・・・」

「ヤベエ、手を上げなかったらどうなるか分かんねえぞ!」

「お、俺もやっぱ賛成だ!」

「俺もだ!」

二・三年の人達からもどんどん手が上がる。

まあそんなこんなで・・・

「うむ！ それでは満場一致で沢田をA組総大将とする！！」

「は！！！？ うそ！！ 何それ！！！！！！！！！！」

「スゲエなツナ！」

「さすがっす。」

「ビビッたっす。」

「ガンバ？」

武君と獄寺君、そしていつの間にか居たりボーン君と私でツナ君を賞賛する。

「超不自然！！ と言うかみーちゃんは何であんなことを！？」

「ちゃおっす。」

「ちゃおっす？」

「マネしないでいいから！！」

「総大将つつたらボスだな。 勝たねえと殺すぞ。」

「これは負けられないねえ。」

「いいからリボーンは隠れてろよ！ 皆の前で！！」

リボーン君を抑えようとするツナ君だが、それは風船の人形だった。風船が室内を飛び回り、騒がしくなる。

「ダミー！？ って、あれ？ みーちゃんまで居なくなってる！？」

ツナ君が風船に意識を向けている内に外に出て、私は応接室に向かう。

「ふっふっふ、面白くなってきたあゝ？ 私も棒倒しに出れるようにして貰わなくっちゃ！」

ワクワク気分が抑え切れず、スキップしながら向かった。

さあやって来ました体育祭当日。

現在ツナ君の家にやって来ています。

お弁当作りに加わる代わりに皆で食べようかと思い、こうして来たってわけ。

「お久しぶりです、奈々さん？」

「ホント久しぶりねえ満流ちゃん。ますます可愛くなっちゃってゝ。」

お互いに挨拶を交わしながら、キッチンに向かうと。
そこには同じ年の女の子と年上の女生徒と、リボン君くらいの子供が二人いた。

「皆〱紹介するわね、この子は夜月満流ちゃん。ツナの幼馴染みよ。」

「よろしくお願いしま〜す?」

「ツナさんの幼馴染みですか! 私は三浦ハルと申します!」

「ビアンキよ、よろしくね。」

「ランボさんはランボさんだもんね!」

「我的名字是イーピン。」

最後の子は中国人かな?

中国語はまだあんまり覚えてないんだけど、最後のイーピンが名前だよな?

皆で楽しくお喋りしながらお弁当を作り始まる。

偶にランボちゃんが摘まみ食いをして、イーピンちゃんがそれを必死に食い止めようとする。

可愛いなあ、抱き締めてモフモフしたくなるよ〜。

カバンの中に常備していたチュッパチャプスをランボさんが発見したので、大人しくしてる代わりに袋ごとあげた。

「ランボさん満流が気に入ったもんね! 今度遊んであげてもいいよ!」

「マジ? じゃあそん時はモフモフしていい?」

「いいよ!」

「よっしやー!ー!?!?」

やがて二階から階段を降りる音が聞こえてきて、ツナ君がキッチンに顔を出した。

「母さん？」

「おはよ、総大将さん。」

「おはよーございます。」

「おはよ、ツナ君？」

「んなー！ー！ー！ー！！！！？」

キッチンの光景を見た瞬間に叫ぶ。

リアクション大きすぎない？ 疲れないの？

「なんで皆いるのー！？」

「今日は特別な日でしょ？ 皆で応援に行くわ！」

「ツナさんの好物たくさん作りました！」

「いやっ・・・あの・・・ねっ・・・」

「ほら早く着替えなさい！」

「え！？」

「総大将が遅刻じゃカッコ悪いわよ！」

「そうですよ、みんな待ってますよ！」

「満流ちゃんも一緒に行ってあげてくれる？ ツナが遅れないように。」

「了解です。」

「じゃ、二人とも後でね。」

閉められる玄関。

有無を言わせぬマシンガントークに、啞然と扉の前で立つツナ君。

「そんじゃあレッツゴー！」

「ちよっ！？ まってー！！！！」

腕を引っ掴んで全力疾走。
後ろから聞こえる悲鳴なんて無視無視？
ものの三分で学校に到着した。

「はい到着。」

「し・・・死ぬ・・・。」

「大袈裟なあ。」

「ほ、保健室・・・に・・・。」

「あいよう。」

万が一にも欠席させる訳にもいかないしね。
グロッキー状態のツナ君を背負い、保健室に向かう。
そう言えば何だか体が熱い？

「ツナ君、もしかして風邪ひいてる？」

「う、うん・・・実は少しだけ・・・。」

「それならそう言ってくればいいのに。 まあ今朝の状況じや言えないか・・・。」

言う暇も無かっただろうしね。

保健室に着く頃には、自力で歩けるくらいには回復した。
ドアを開けて、二人で保健室に入る。

「すみません・・・風邪ひいて、あの・・・熱があるみたいで・・・。」

「風邪くらいで休ませねーよ。」

「はあ!？」

「え?」

随分厳しい保健医だね。

「つーか男に貸すベッドはねーんだ。女性はいつでも歓迎だがな。」

「ド、ドクターシヤマル!？」

振り返った男は、なんか無理矢理ダンディー気取ってそうな奴だった。

私と彼の目が、不意に合う。

「っ!!!!! どうしましたかお嬢さん? どこかお怪我でもしましたか?」

「へ?」

「なあっ!!!???」

突如として立ち上がり、私の左手をそっと握りながら優しく語りかける保健医。

態度の差があんまりにもあんまりじゃない?

「ええと・・・私は特にありませんけど・・・。」

「そうですか、それは良かった。貴方の様な美しい姫君に、傷でも付いたら世界の損失だ。」

「は・・・はあ・・・。」

「みーちゃんにまでナンパしてる!?! 予想はしてたけど!!! で、でも何か何時もの時と違う?」

ツナ君は何やら相当困惑している様だ。

まあ私もだけど、さっきから顔が熱いし・・・。

だってあんな真正面から美しい姫君なんて言われたら流石に恥ずかしいって・・・。

「宜しければ、お名前をお聞かせ願いませんか？」

「あ、夜月満流・・・です。」

「おお、満流さんですか。貴方に相応しい上品な響きの名ですね。私はシャルと申す者です、医者の方なので、お怪我をした際には何時でもお呼びください。たとえば世界の裏側からでも駆けつけましょう！」

「ど、どうも・・・。」

「やっぱりおかしいよ！！　シャルどうしちゃったの！？」

ツナ君がシャルさんとやたらに喋りかけるが、完全に眼中にないみたいで、反応しない。

「ところで満流さん、出会ってばかりで不躰だとは思いますが・・・。」

「はい？」

「お近づきの印に、私にチューさせてくれませんか！！」

うん、無理。

「嫌です？」

「へブウッ！！！！」

ボディীবローをかまして吹っ飛ばす。

シャルさんは机に激突し、痙攣しながら気絶した。

「やっぱり変わってなかったー！！！！？」

「もう、いきなりビックリしたよ。そろそろ時間だし、行こうツナ君。」

「え、いや。オレ熱が・・・。」

「さっきから元気じゃん。どうしても酷かったらまた連れて来てあげるから。」

「う、うん。」

壊れた机をそのままに、二人で校庭に行く。

丁度開会式が始まる五分前だったので、急いで列に並ぶ。

《それではこれより、並盛中学校体育祭を開会します！》

波乱の体育祭が、始まる。

第二十五話（後書き）

ちよつとシャルのキャラを壊してみました
W
W
W

第二十六話

体育祭は順調に進み、A・B・C組の点数は越したり越されたりの繰り返し。

武君や獄寺君、了平さんの三人が目覚しい活躍を見せ、私達A組が現在トップである。

私自身も当然全力で取り組んでいて、出場種目では尽く一位を獲得している。

そんな訳でA組の士気は上々であり、私も気合を入れて競技に望んでいたのですが・・・

「・・・・・・・・」

借り物競争の課題が記された紙を持ち、私は立ち尽くしていた。ついさっきまでの自分を殴り倒したくなる様な後悔を感じながら。

〈雲雀恭弥。〉

手に持った紙には短くそう書かれていた。

なにこれ？ イジメ？

実は先程、私の前にこの紙を取った選手が突然泣きながらリタイアを宣言したのだ。

その余りの必死さに他の選手達も誰一人としてその紙には近づかなかった程に。

そんな光景を見て、一体何が書かれているのかが気になってしまったのが過ちだった。

手にとった私を、他の選手達だけでなく観客の人達までが見守っている。

その隙にゴール出来そうなくらいに時間が経っても、誰も動こうとしなかった。

それ程までに気になっていたのだろう、私が動き出すのを固唾を飲んで見守っている。

「・・・・・・・・」

もはや、やり直しが許される空気じゃない。

っていうかこれって、遠まわしに死ねって言ってる様なものだよね？

私はともかく、一般生徒に達成出来る物じゃないよ？

何でよりによって本人？　〈雲雀恭弥の学ラン。〉とか〈雲雀恭弥の腕章〉とかじゃない普通？

いや、たとえそうでも言った瞬間殺られそうだけでも。

それでも生存率が0.001%くらいなら上がるかも知れないじゃん。

周囲からじれったそうな空気が伝わってきたので、仕方なく私は周囲を見て恭弥君を探す。

校舎側にある木の根元で寝転がっているのを見つけ、そこに向かって歩き出す。

周りから私の課題を議論する声が次々と聞こえ、一気に騒がしくなる。

少しして、誰かが

「もしかして彼女、雲雀さんの所に向かってない？」

と言った瞬間……音が消えた。

手に持っていた物を思わず落とす者。

注いでいるお茶が、コップから漏れていても固まったままの者。

何やら数珠の様な物を両手に巻き、ブツブツと何かを唱える者。

涙を流しながら、目の前で十字をきって必死に祈り出す者。

驚愕、絶望、恐怖、尊敬、畏怖。

あらゆる感情が360度全周囲から注がれている。

「恭弥君、ちょっといい？」

「……なに？」

声をかけると、瞑っていた目を眠そうに片目だけ開けて聞いてくる。

「いやゝ実はね？ 借り物競争の課題がなんと恭弥君なんだよ、まいったね？」

「ふゝん、それで？」

「ぶっちゃけ恭弥君を私に貸してくんない？」

そう言ってを差し出す。

何故か後ろから黄色い声が多数聞こえるのは何故だろう？

それに恭弥君が目を見開き、次ぎの瞬間にはムスっとした表情に変わった。

「よくそんな言い方出来るね、君は・・・」

「へ？ 何かおかしい事言った？」

「はぁ、別に・・・」

そう言って溜め息をつき、ゆっくりと身を起こす。

自分で起きるかな？ と思って手を降ろそうとしたら、その前に握られた。

「おや？」

「何してんの？ 早く起こしてよ。」

「あゝはいはい、了解。」

少し慌てながら手を引いて起こす。

そのまま恭弥君はゴールに向かって歩き出す。

手を繋いだまま。

「借り物が人の場合は一緒にゴールしなきゃ駄目なんだよ、知らないの？」

「うゝん、そんなルールがあった様な？」

「早く行くよ、僕を連れて一位以外になったら咬み殺すから。」

「おっとそれは勘弁。じゃあ走ろう！」

「ちよっ・・・」

体育祭中にけしかけられるのは遠慮したい。

繋いだ手を腕に抱え、一気に走り出す。

突然走り出したけど、流石に恭弥君は問題なく付いてくる。

気のせいかな黄色い声は何倍にも増えた気がするけど気にしない。

他にも何名か課題を無事に獲得し、ゴールに向かっていた。

しかし私達が接近してきたの見るなり「ひいっ！」と悲鳴を上げ、横にずれて進路を明け渡してくれる。

なんて便利な人避け道具だ、初詣とかに持っていったら人混みに苦勞せずに済みそう。

「なんか失礼なこと考えてない？」

「滅相もない？」

ラストスパートに入り、一気にスピードを上げる。

ゴールテープを二人で突っ切った瞬間、A組の歓声と、当社比百倍の黄色い声が響いた。

「はぁ・・・。」

「まああれだ、ドンマイ？」

先程、ぴよんぴよんでビリッ欠になってブルーなツナ君。

運動神経が無いのは知ってたけど、三年経っても壊滅的なままでに変わってない。

そこに獄寺君がやって来て

「なる程、そーゆーことスカ。 さすが十代目。」

「へ？」

「棒倒しに向けて体力温存っすね！」

「・・・え？・・・。」

なんて言った。

あれをそう解釈するんだ、何気に大物？

「バカモノ！！ 真面目にたらんか沢田！ A組の勝利がかかって
いるんだぞ！」

いつの間に来たんだ了平さん？

「またテメーか！ うるせえぞ芝生メット！！」
「なに？」

あ、キレた。

今ブチッていったし。

次の瞬間、お互いの顔にぶち込む二人。
ゴキヤツって鳴ったよ？ 大丈夫？

「効かねーなあ。」

「蝦が止まったかー？」

お互いに平然を装う。

変な所で似てるねこの二人。

「ヒヨホホホホ！」

突如聞こえる笑い声？ みたいな奇声。
全員が振り返ると、そこにはメタb・・・相撲やってそうな人がいた。

と言うかこの人確かC組の大將だっけ？

なんかさっきから妙に視線を感じると思ったら正体はコイツか。

今もチラチラと私を見てくる、キモイ、ウザイ、デブ。

「仲間割れかい？ ヒヨホホ！ 棒倒しはチームワークモノを言うんだよーこりゃA組恐るるに足りないねー。」

「あー！」

「余計なお世話だ！」

「何だテメーは？」

「タダ見してんじゃねえよ？」

「「すっこんでろ！！」」

「ぶっ！！」

三人の攻撃で吹っ飛び、無様に倒れ伏すデブ。

気分爽快？

「この人C組の総大将だよー！」

「誰だろうが殴る。」

「弱えー奴。」

「豚はブヒブヒ鳴いてりゃいいんだよ。」

C組の生徒達が騒ぎを聞きつけ、集まって文句を垂れてくる。
了平さんと獄寺君が啖呵を切って突撃しようとした時、一人の生徒が血相を変えて走ってきた。

どうやらB組の総大将がトイレで襲われたらしい。
さらには目撃者によれば犯人はツナ君に命じられたそう。

いつの間にかやるようになったんだねツナ君、お姉さんは嬉しいよ！

「思ったより勝利に貪欲だな沢田、見直したぞ！」

「ナイス策略！」

「いよっ！ さすが我らの総大将？！！」

「違うって！！！」

B・C両軍による批判。

それに挑発を重ねる了平さん。

アナウンスにより、昼休み中に協議が行われるそう。
私は了平さんに付いて行く。

「いやー面白くなってきましたねー？」

「ああ全くだ！ 沢田があそこまでお膳立てしてくれた以上、取るべき手段は一つ！」

「やっぱそうですよね！ 私もそう思っていました！！」

「流星が夜月だ！ では行くぞ！！」

「そうですね、勿論目指すは……。」

「B・C纏めてぶっ倒す！！！！」

《それでは棒倒しを開始します。 位置についてください！》
「ひーひー！ こんなに数が違うの！？」

昼休みの協議の結果、お兄さんとみーちゃんのコンビにより、強制的に二対一の形になった。

お兄さんが提示し、みーちゃんが風紀委員の立場でゴリ押ししたらしい。

しかも相手の大将雲雀さんだし！ 勝てっこないじゃん！！
しかも何故か女子のみーちゃんが最前列でワクワクしてそうな顔で構えてるし。

それを見て、相手の陣営は最初は驚いたものの、段々とニヤニヤしてる奴まで出てきた。

ま、まさかアイツら、どさくさに紛れてみーちゃんの体を触ろうとか考えてる？

いや絶対そうに違う！

みーちゃんはそんなの気にしないだろうし、ルールだからって割り切るだろう。

だけど、無性にムカついてくる。

大切な幼馴染みが、あんな奴らに・・・なんかよく分かんないけどとにかく嫌だ。

《開始！》

考えてるうちに棒倒しが始まった。

両生徒達がぶつかり合い、遠慮なしの殴り合いが始まっている。

そんな中、みーちゃんのいる所に大勢の敵軍の生徒が集まっていた。全員が一樣に先程の様な醜い笑みを浮かべている。

「みーちゃん！！」

「ふっはっはー！ 大漁大漁！ 死にたい奴からかかって来いや
〜？」

「ふげぶうつ！！」

「ぎゃあああああ！！！！」

「・・・・あゝ・・。」

しかし、一人残らず瞬殺され、誰もみーちゃんの服にすら触れる事

は出来ていなかった。

中には加減無しに男の象徴を蹴り飛ばされたりする者も続出している。

今や全員の顔が恐怖一色に染まっている。

それは味方も例外じゃなかった。

地面に倒れている者の一部に、若干幸せそうな顔をした生徒がいた様な気がしたけど無視。

気が付けば自分の棒が揺れ始め、下を見るとC組の生徒が・

「ひい！ もう来た〜！！」

足を掴まれ、落とされそうになる。

けど獄寺君がその生徒を蹴り飛ばして落としてくれた。

でけど、山本やお兄さんも余りの多さに攻められないでいるみたいだ。

その内に次々と多くの敵が登ってきて、顔や背中を蹴られる。

やがて棒がグラグラと揺れ始め、ついには倒れだした。

「ひい！ 倒れる〜！！」

「しょうがねえな。」

どこからかりボーンの声が聞こえた。

その瞬間、鳴り響く銃声。

眉間を撃たれ、いつもの力が湧く感覚が襲ってくる。

「空中復・活^{リ・ボン}！！ 死ぬ気で棒倒しに勝あーっ！！」

足元の敵生徒の顔を踏み台にし、生徒達の頭を次々と飛び移る。
俺の意図を察してくれたお兄さん、獄寺君、山本が騎馬になり、それに乗って敵を蹴散らしていく。

「うわああ！」

「ありゃあ重戦車だ！」

「あんなの止められない！！！」

順調に敵総大将に近づき、あともう少しと言うところで

「おい芝生メット！ てめー今足引っ掛けたろ！？！」

「ふざけるなタコ！ 人の足を蹴っておきながら！！！」

「んだとコノヤロー！！！」

「ちょ、お前ら！」

互いに殴り合う二人。

バランスが崩れて落ちていく。

負ける！

そう思った瞬間、体が浮いた気がした。

「危機一髪ってねえ？」

「満流！？！」

目を開けると、俺はみーちゃんに肩車をされている状態だった。

「おーツナ君にそう呼ばれるのは何だか新鮮だねえ？ 確かに普段

とは雰囲気が違うね。」

そう言いながら、再び走り出すみーちゃん。

俺の今の状態には何も聞かないみたいだ。

「ようし！ もうちょい、ツナ君！！ 後は恭弥君の所に一直線だよ！！」

「おう！！！」

相手の生徒達を吹き飛ばし、突っ込んでいくみーちゃん。とうとう相手の棒の所までたどり着いた。

「行っけえツナ君！！」

「うおおおお！！！！！！！！！！」

みーちゃんの力も足され、勢い良く敵大将に向かって跳ぶ。

「待ちくたびれたよ、存分に咬み殺してあげる。」

「うおりやあああ！！！！！！あっ！！？」

攻撃しようとした瞬間、なんと死ぬ気の時間切れが訪れる。

「うそ！！？ ぶぎゃっ！！？」

トンファーで思いっきり殴られ、落ちていく俺。

「ツナ君！？」

「ぎゃあああ！？ 落ちるうううー！！！！」

情けなく叫びながら、視界の端でみーちゃんが走ってくるのが見え

た。

俺はそのまま真っ逆さまに落ちるが、直前にみーちゃんが俺の下に滑り込んで来た。

「きゃっ!!」

「グヘッ!!」

そのまま激突し、折り重なって転がっていく。

当然負けになるが、それよりもあんな勢いでぶつかった彼女の方が心配だった。

「いっつゝ。み、みーちゃん! だいじょう・・・ぶ?」

「うゝん、いたたあ。なんとか平気かな?」

「・・・っそ、そう・・・よ・・・かった・・・。」

「? どうしたの? 何処かケガした?」

心配そうに聞いてくるみーちゃん。

しかし、俺はそんな場合ではなかった。

俺たちを心配し、駆け寄ってきた人達も全員が凍りついている。

何故なら、俺たちは今折り重なって倒れており、俺が上でみーちゃんが下だ。

ここまではいい、みーちゃんが庇って一緒に倒れたのだから、こうなるのも仕方ない。

俺の両手が、みーちゃんの胸を掴んで居なければ・・・。

こんな・・・どっかの漫画みたいなベタな展開になるなんて。

いや、最近の俺はそんな展開がしょっちゅうなんだけど。

それでもこんなラッキー・・・じゃなくてとんでもない展開はなかった。

周りからすれば、俺がみーちゃんを押し倒して胸を揉んでる様にか見えない。

事実、注がれる視線が段々と身も凍る様な物へと変わっていく。体がビクツツと震える。

その際、思わず手にも力を入れてしまい

「ひゃあんっ!？」

などと、途轍もなく可愛らしい声が響いた。

今頃になって今の体制になったみーちゃんの顔が、段々と赤くなっていく。

うわあ、シャマルの時もだったけど、赤くなったみーちゃんって物凄く可愛いなあ。

「あ、あの・・・ツナ君? 確かにツナ君はもう中学生だし、そう言う欲求が出てくる年頃だっていうのは解るよ? でもその・・・こういうのはお互いの気持ちが大事故だし、それにいきなりこんなシチュでなんて、余りにもハードルが高いって言うか・・・流石にアブノーマル過ぎるっていうか。べ、別にツナ君の趣味に文句を言うつもりはないよ? でも、あの・・・私も一応・・・初めて・・・だから・・・。」

何を言っちゃってんの!!!!!!!!?????

周りからの視線一気に氷河期に達した。

視界の端では、ハルが「ツナさんがそんなケダモノだったなんてー！！！！」と号泣してるし。

母さんは「ツナ・・・いつの間にか大人になっちゃって・・・。」と涙を流していた。

京子ちゃんはそんな母さんやハルにハンカチを渡している。

もはや俺は、女の子と公衆の面前で変態な行為に及ぶのが大好きなド変態になってしまった。

しかも聞き様によっては、そんなに拒んでない風な発言をされ。

しかもとんでもないカミングアウトまで披露した。

当の本人は、右手を口元に当て、その手首を左手で軽く握りながら僅かに目元に涙を浮かべ、極めつけには体をもじもじと動かしている。

そんな、文章ではかなり表現しづらいが、何とも可愛らしい仕草をしている。

いや、これは最早俗に言う萌える仕草と言える。

現に周りの男子達が、顔を真っ赤にして必死に鼻を抑えていたり。何故か前屈みになって両腕を膝の間に挟んで悶えている。

それに比例するように、俺への憎悪と怒りと嫉妬の視線は爆増していった。

「おいおい、敗軍の大將が生きて帰れると思うなよ？」

「しかも・・・何て羨ま・・・羨ましいトラブル起こしてんだこの野郎！！！！」

言い直してやっぱり言い切った!!?」

「夜月さん・・なんて可愛いんだ! 普段の快活で自由奔放な態度からは想像も出来ない弱々しさ!!」

「そして、拒絶はしなくともやはり拭いきれない羞恥心を必死に我慢しようとする健気さ!!」

「これぞ、まさにギャップ萌え!!!!」

「奪われた! そう、奪われてしまった!!」

「まさに天使だ! 並中に降臨した至高の女神だ!!!!」

もはや収集しきれない程に狂喜乱舞する男達。
女性達が若干引いている。

その隙に俺はみーちゃんの上から退いて、そっと起こす。

「ご、ごめんねみーちゃん!? 大丈夫?」

「う、うん平気。私もごめんね? へんな事・・言っちゃって・・。」

「え? ああ、うんいいよ。元々俺が悪いんだし・・。」

お互いが真っ赤になり、目を逸らす。

少しして見ると、丁度目線がぶつかり、また逸らす。

それが可笑しくて、二人で笑った。

【死ねこの糞リア充野郎――――――!!!!】

「ぎゃあああああああああああ!!???」

一瞬で取り囲まれ、リンチにされる俺。
みーちゃんは母さん達が非難させていた。

ほっ、よかった。

「自分の心配をしたらどうだい？」
「・・・・・・・・え？・・」

聞き覚えのある声に、ギギギッと軋むような音を立てながら後ろを向く。

そこには、何故かどす黒いオーラを纏った究極の風紀委員長がいた。

「公衆の面前でウチの風紀委員に手を出すなんていい度胸だね。
それに免じて、徹底的に咬み殺してあげるよ。」

「それは・・・・・・・・免じてないと思うんです・・・・・・・・けど・・・・・・・・。」

その日から、俺は全治数週間の怪我で入院。

さらには並盛全体で変態のレッテルを貼られる事になった。

第二十六話（後書き）

黒曜篇までにどの話書こうかなーって迷ってます。

とりあえず今の所は

- ・入院の話
- ・正月の話
- ・雪合戦の話
- ・花見の話
- ・マフィアランドの話
- ・ビアンキの結婚の話
- ・夏祭りの話
- ・獄寺昇進の話

などを考えてます。

いや全部書くかは分かりませんがね W W W W W W W

万が一何か見てみたい話があったり、これはいらねえから早く黒曜行けやと思う方がいましたら、是非言ってください。

入院は既に書き始めているので、それ以降でお願いします。

それでは m (_ _) m

第二十七話

体育祭が終わり、ツナ君も退院して幾らか経った頃。
草壁さんから、恭弥君が入院したと言われた。

思わず飲んだ紅茶を吹き出してしまい、掃除するのが大変だった。
あの恭弥君が、と思ったものの、まあ人間誰でもそんな事は一度くらいあるよね。

しかし容態を聞いたところ、ただの風邪らしい。

・・・風邪くらいで入院するなよ紛らわしい。

そして、何故かお見舞いに行くようお願いされ、現在こうして病院の受付にいる。

看護師に病室を聞いた瞬間、思いっきりビクッと驚かれた。

次に私の腕に風紀の腕章を見つけ

「貴方はまさか夜月満流さんですか！？　これは大変失礼しました
！！」

と、何故か全力で謝られた。

さらにはその声を聞いた他の職員、果ては他のお客さんまで私を見
てくる。

何故こんなになつたのかと聞いたところ、この間の商店街の
一件が原因らしい。

風紀委員長に唯一異議を申し立て、それを通せる女の風紀委員がい
ると並盛中の噂になっているんだそう。

そして体育祭の借り物競争が決定的になり、私の名は恭弥君に次いで有名になってしまったらしい。

「おお、貴方が夜月さんですね？ 私はここの院長を務める者です。以後お見知りおきを。」

「は、はぁ・・どうも。」

「雲雀君の病室に御案内します、どうぞ此方へ。」

そう言って歩いていく院長の後を追う。
もはや一人の客に対する対応じゃない。

苦情が来ないのが不思議なほどだと思う。

やがて一室の前で止まり、二・三回深呼吸してから慎重にノックする院長。

ビビりすぎにも程がある。

中から「誰？」、と恭弥君の声が聞こえてくる。

「失礼します。 夜月満流さんがお出でになっております。」

「ハロ〜恭弥君？ お見舞いに来てやったよ〜〜！」

ドアを開け、中に入る。

そこには、パジャマ姿でベッドに腰掛ける恭弥君と、その足元に積まれた死体の山・・もとい患者さん達の姿。

「やっと来たね。 遅かったじゃないか。」

「いやいや、聞かされたのが今朝だったし。 ていうか何したの？ それ・・。」

「入院生活が退屈だったからね、ゲームに付き合ってもらってたの

さ。」

「ゲーム？」

「そう、ルールは簡単だ。ボクの寝ている間に音を立てたら、咬み殺す。」

それってする意味あるの？

結局寝てるだけじゃん、起こされたくないなら参加させなきゃいいじゃん？

適当に理由付けて咬み殺したいだけじゃないの？

「そ、そう……。今のところ勝者はいないみたいだね。」

「そう、皆弱くってね。」

「すみません。すぐに次の生贄を用意しますので。」

うおい院長、貴方今何て言いました？

完全に生贄って言ったよね？ 患者を助ける立場の人間が患者を冥府に送ってるよね！？

種を返して退室する院長。

入れ違いに看護師の人達が表れ、死体を運んでいく。

ちゃんと担架で運んでやろうよ、何でワゴンに乗せて行くの。

いや、乗せると言うより積んでの方が正しい。

「えっと・・・とりあえずリングでも剥こうか？」

「任せるよ。」

「ほーい。」

恭弥君がベッドに横になり、その脇にイスを持ってきて座る。

異様に積まれたフルーツ群の中からリンゴを取り、引き出しの中にあったナイフで剥いていく。

シャリシャリと皮を剥く音が響く室内。

恭弥君は目を瞑ってはいるけど、寝てはいないみたいだ。

「いきなり入院したなんて聞いたからビックリしちゃったよ、只の風邪って聞いた時は紅茶吹いちゃったし・・・。」

「へえ？ 心配したの？」

「そおりやあするよ～～。逆にしない理由が無いし。」

「・・・そう。」

再び沈黙が訪れる。

だけど別に息苦しい類のものじゃない。

リンゴが剥き終わる頃、ノックの音が鳴ったので私がどうぞーと答える。

扉が開き、外から三名の患者が担架で運ばれて来た。

どうやら新しい患者・・・ではなく生贄が到着した模様。

運ばれてきた人達は、状況がよく解ってない様な表情をしていて、しかし恭弥君を見た瞬間に絶望に染まった。

それぞれが「助けてくれー!」とか「まだ死にたくない!」とか「もう騒ぎませんからー!」とか言って看護師達に助けを求める。だが、まるで何も聞こえていないかの様にテキパキと作業をこなし、終わった人から素早く退室していく。

この病院の職員には人命を救う精神を無くしてしまった人達しか居ないらしい。

生贄さん達は一様にガタガタと震え、涙まで流して必死に目を合わせないようにしている。

「剥けたかい？」

「え？ ああうん、出来たよ。」

「そう、じゃあ食べるから頂戴。」

「了解？」

切り分けた林檎の一つにフォークを刺し、恭弥君の口元に持っていく。

「はい、アーン？」

「・・・なにしてるの？」

「ん？ 食べさせてるんだけど？」

「皿に分けて頂戴って意味だよ。」

「理解はしてたけど、あえてこうした。 つかぶっちゃけ一度やってみたかったり？」

「・・・はあ・・・。」

呆れたように溜め息をつく、失礼な。

女の子にアーンなんてしてもらえるのはリア充だけなんだよ？

現に今だって周りの患者さん達が驚愕の視線を送ってきてるじゃない。

「あつれ〜〜？ もしかして恥ずかしいのかなあ？」

「そんな訳ないでしょ。」

「じゃあはい、アーン？」

「・・・。。。」

ムスッとした表情のまま、口を開く恭弥君。
それにゆっくりとリングを入れて、口が閉じたら引き抜く。

食べ終わる頃にもう一度林檎を差し出すと、黙って口を開く。
その様子が可笑しくて、思わずクスッと笑ってしまった。

恭弥君がそれを見て、何故か驚いたように目を見開き、しかしすぐにムスッとした顔でそっぽを向く。
怒らせちゃったみたい。

ふと周りを見ると、患者さん達全員と目が合った。
例外なく顔が真っ赤に染まっており、だけど慌てたように布団に潜り込んでいった。

熱でもあるのだろうか？ 随分赤かったけど。
まあ辛くなったら自分でナースコールするよね。

「ねえ、君たち。」
「「「は、はい！！？」 为什么呢！！」「」」

突然恭弥君が起き上がって患者さん達を呼ぶ。
即座に応じ、布団から飛び出す一同。

「ちょっとゲームしようか、退屈だからさ・・・。」
「ゲーム・・・ですか？」
「は、はい・・・喜んで。」
「ちなみに・・・どのような？」

流石に唐突だったようで、困惑する三人の患者さん。

「なに、至って簡単だよ。ボクが今から眠るから、その間に音を立てたら・・・咬み殺す。」

「「「ひいっ！！」」」

トンファーを構えて脅す恭弥君。

既に三人は今にもチビリそうな位に怯えている。

「じゃ、始めるよ。因みにボクは葉っぱが落ちる音でも目が覚めるから。」

それって普段どうやって睡眠取ってるの？

理論上人の住む世界では休めないんじゃない？

「それじゃ、お休み。」

「お休み、恭弥君。」

そう言った直後に、寝入ってしまった。

何気に疲れてたのかな？

何だかんだで一中学校の風紀委員長なんて次元じゃないくらいの仕事を毎日こなしてるんだよね。

風紀委員になってよく解るんだけど、学校にいる時の大半は仕事してるし。

むしろ授業はどうしたと思った時もあったけど、そもそも風紀委員は授業免除だし、学力そのものは学年上位らしいので何も問題はないらしい。

まあ授業免除って言っても全部免除なのは恭弥君と私と草壁さんの三人だけなんだけどね。

風紀委員の全員が成績優秀って訳じゃないし、例えそうでも授業に出なければ自然に落ちる。

だから、シフトに合わせてほんの一部だけだそうだ。

要は優秀な人程免除が出来るってこと。

それでも、草壁さんの様に律儀に授業に出る人もいるけど。

そして、少なくとも私は恭弥君が授業に出ているなんて聞いたことが無い。

つかそもそも恭弥君ってクラスは？ いや、それ以前に何年？

ともかく、恭弥君は生徒達が勉強している時間以上に仕事をしている訳だ。

とても中学生がこなす量じゃないだろう。

本人は大丈夫でも、知らない内に体に疲れが貯まっていたのかもね。

「お疲れ様・・・」

そう言いながら、なんとなしに恭弥君の頭をそっと撫でる。

男の子なのに、まるで女の子みたいにサラサラだ。

撫で心地が良くて、何度も撫で続ける。

そこまでして、ようやく気づいた。

これ、もしかなくても起こしてしまうのでは？

よく見ると、周りの患者さん達がこの世の終わりみたいな顔をしている。

不味い、と思って恭弥君を見る。

「・・・・・・・・・・。」

「あれ？」

しかし無言。

特に何事も無く眠っているみたいだ。

全く起きる気配がない。

葉っぱの落ちる音で目覚めるのに、直に触れて起きないって・・・。

他の三人も、困惑しながらもホッとした表情を浮かべている。

「あ、あの・・・。」

「はい？」

起きない恭弥君を見て、大丈夫だと判断したのか、一人がおずおずと話かけてくる。

「最近噂になってる夜月さん、ですよね？」

「あゝゝ、まあ・・・はい。そうです。」

「や、やっぱり！」

私が肯定した瞬間、三人共がやけに明るい表情になった。

「噂に聞いてはいましたが、想像以上に美しい・・・。」

「ああ、女神が降臨したってのは本当だった・・・。」

「ありがたやありがたやゝゝ・・・。」

それぞれにガッツポーズしたり拝み出したりしてくる三人。
流石に恥ずかしくなってきた。

何でこの町の人はこんな過剰な世辞をおくびもなく言えるのだろうか・・・

「と、ところで一つ質問なのですが・・・」

「な、なんでしょう？」

「その・・・夜月さんは、雲雀さんの・・・コレですか？」

「これ？」

手を小指だけ立てて見せてくる。

意味が分からなかったが、段々と理解してきて・・・

「そ、そんなw・・・」

「・・・ねえ、君達・・・」

「「っ！！！！？」」

答えようとした時、突如として聞こえた声。

聞いただけで不機嫌さがありありと感じ取れるその声に、三人は体を硬直させる。

「葉っぱが落ちる音だけでって言うておいたよね？」

「あ・・・あああああ・・・」

「ひっ・・・ひiiiiiiii・・・」

「あがっ・・・あががが・・・」

「なのに、呑気にお喋りするなんて・・・随分余裕じゃないか・・・」

ユラリと起き上がり、静かにトンファーを構える恭弥君。

三人の震えは頂点に達し、鼻水やら涙で顔はグチャグチャだ。

「「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああ!!!!!!!!!!!!!!」

断末魔の悲鳴と共に、鈍い音が鳴り続ける。

静まり返った場所には、つい二十分程前に私が入室した時と同じ光景が広がっていた。

生贄が捧げられた後、恭弥君がベッドに腰掛けた時に、私の携帯が震えている事に気づいた。

「あ、草壁さんからだ。」

電話に出る。

するとどうやら緊急の仕事が入ったらしく、手が足りないので手伝って欲しいとの事。

「と言うわけで今日は失礼するね。」

「わかったよ。」

「あ、それと・・・」

?

「草壁さんが、恭弥君にすいませんって言っというて欲しいって言われたんだけど、どう言う事？」

「・・・・・・・・何でもないよ・・・・・・・・明日咬み殺す・・・・・」

「へ？ 最後なんて言ったの？」

「別に・・。」

「そう？
じゃあバイバイ？」

そう言って部屋を出る。

病院を出て少し経った時、病院の方から爆発音が聞こえた様な気が

した。

ツナ君がまた入院していたと知るのは、その翌日の事だった。
あぁ後、草壁さんが必死の形相で何かから逃げるように走っていた
のを見かけた。

第二十七話（後書き）

ちよつとだけ雲雀とイチヤつかせてみたWWW

そういやまだディーノや十年後ランボと会ってない（汗

その内にまあぼちぼち絡ませます。

では（〇・・〇）／

第二十八話

「うゝゝゝ、眠いよゝゝゝ。」

「口より手を動かして。」

[illegible]

応接室の中で、恭弥君と二人で仕事中。

二つの机に積まれた二つのチョモランマ。

毎度のことながら学生にやらせるような仕事じゃない物のオンラインド。

それだけなら、まだ良かったんだけどね・・・。

「何で正月にこんな事せにやならんのかくくく。」

「風紀委員だから。」

「答えになつとらんよ。」

そう、今はお正月の真っ最中。

おせち料理の季節、お雑煮の襲来する季節なのだ。

だと言うのに、何が楽しくて休日に学校来るばかりか仕事やらされなきゃならんのかな？

しかも早朝の四時に・・・。

「何故によりによつて早朝？ もつと日が高くなつてからでも良いじゃん。」

「たまたまボクが早起したから。」

「え」

なんか久しぶりにこのやり取りした気がするよ。
きっと恭弥君なら社会に出ても無双し続けるんだろうなあ。

草壁さんがまだ来ていない為、自分で紅茶を入れる。
ああ、やっぱり入れる人が違うと変わるね。

草壁さんの入れてくれた方が倍は美味しいや。
椅子の背もたれに寄りかかり、書類の山を見上げる。

チヨモランマから富士山までランクダウンはしたものの、まだ四時
間は掛かりそうだ。
そして、現在五時半。

本来なら間違いなく自宅で爆睡している頃だ。
因みに、現在私が住んでいるのは、並盛の唯一の高級アパート。

その名もヘザ・ナミモリ（ニヨ）だ。

その最上階の部屋に住んでいる。
高級ホテルのスイートルームと見間違える程の広さと内装をほこる。

基本風紀委員以外は何の変哲もないこの町に何で建てたのかと問い
たい程の高家賃である。

ヴァリアー時代の収入と、旅の時にカジノで荒稼ぎした金があるか
らこそ住めるのだ。

しかも、オーナーに私が風紀委員である事を知られ、家賃が六割カ
ットされた。

いや、嬉しいけども・・・。

考えに耽っていると、電話が震え出したのでポケットから取り出す。

「おや電話……リボーン君？」

随分珍しい相手からだ。

連絡先を教えて欲しいと頼まれたのは結構前だけど、精々二・三度くらいしか来ない。

「もしもし？」

《ちゃおっす、満流。》

「うん。明けましておめでとう、リボーン君？ 今年もよろしくね！」

《ああ、よろしくな。ところで、今時間あるか？》

「どうかしたの？」

《実は今日ボンゴレ式ファミリー対抗お正月合戦ってのをやるんだ。オメエも参加するか？》

「おお……対抗……合戦……何とも甘美な響き！ 是非とも参加します？」

《わかったぞ。じゃあ川原の所に来てくれ、皆待ってるぞ。》
「了解……？」

電話を切ってポケットにしまう。

急いで着てきたコートを羽織り、身支度を整えるが

「どこに行くの？」

「おっ……っ……。」

そーいやそうでしたね。
すっかり忘れてました。

「えつとですね？ リボン君に誘われて今から合戦をしに行きます。」

「赤ん坊に？」

一瞬、恭弥君の目が光った気がした。

そう言えばリボン君の事気に入ってる感じだったっけ。

「合戦ってなに？」

「え〜〜っと・・・簡単に言えばツナ君達のグループでお正月イベントをやる、みたいな？」

「ああ、そう。」

こっちには全く興味無い様子。

「と言うわけで、仕事は帰って来てからするのでヨロ！」

返事を待たずに駆け出す。

廊下の窓から飛び降り、中庭に着地。

そこを横切って反対側に行くと、生徒用の駐輪場がある。

その一番校門に近い場所に、一台分のスペースがハッキリと区切られている。

〈夜月満流様専用スペース〉

と書かれた板が屋根の所に着いている。

誤解しないで欲しいのだけど、これは何も自分でやった訳じゃないよ？

風紀委員の仕事とかで、私の登校時間は生徒の平均よりも早い。

尚且つ、いつもその日の気分で乗り物を変えて登校している。

なので大概の場合この場所が空いているので、使っていたらある日いつの間にか取り付けられていたのだ。

一度恭弥君に、アレはいいのかと言ってみた事はある。

しかし、彼は全く気にしていない様だった。

私としても特に損は無いので、それ以来遠慮なく使わせもらっている。

今日は普通にママチャリで来ていたので、鍵を差し込んでロックを外して乗る。

肌寒い風が前から吹いて、体の奥がブルツと震える。

やがて川原に着くと、ツナ君や獄寺君に山本。着物姿の京子ちゃんにハルちゃんに了平さん。

それにリボン君と・・・・・・・・・・なんか黒スーツの人達がた~~~~くさんいた。

「お待ちせ~~~~?」

「お、来たな。」

「あ、みーちゃん。」

「おせーぞ。」

「よっ、夜月。」

まっ先に気付いたのはリボン君とツナ君達三人。

声を聞きつけ、京子ちゃん達もやって来た。

「明けましておめでとう、満流ちゃん。」

「おめでとうです！」

「今年もよろしくな、夜月！」

「はい！　よろしくね？」

それぞれに挨拶をしていく中、私は皆の後ろにいた人影に気付く。
黒服の人達ではない、背丈からして私やツナ君達と同年代。

向こうも私に気付き、此方にやって来た。

その瞬間、私は本当に稀にしか感じた事のない、本心からの驚きをおぼえた。

何故なら、そこにいたのは……。

「……誰？」

「同じクラスだよ！？　何度か話した事あったよ！！？」

「そうだったっけ？」

肩まで伸ばした黒髪の子、同じクラスらしいその子は涙目で訴えかけてくる。

それはさておき、この人が痛者である事が問題だ。

最近音沙汰が無くてすっかり忘れてたけども、そんな奴らいたよね確かに。

そんな中、ツナ君がこっちにやって来て。

「みーちゃん。この子は千坂沙知ちいさなって言うんだ。小学六年の時に俺のクラスに転入してきた子なんだ。」

「因みに一昨日から千坂もツナファミリーに入ったぞ。」

「へえ。」

「うん、そういう事。よろしくね？」

そう言って、手を差し出してくる。
自己紹介中もその人の顔を見て、必死にクラスの人物と照らし合わせた結果。

ある人物と合致した。

「あ、思い出した。」

「え、ホント!？」

そう、この人は確か

「325号。」

「なにそれ!？　　どう言う認識したらそうなの!!!？」

そうだ、転校初日に、私に対して敵意等の感情を向けて来なかった人。

まあ少しは大目に見てやろうかなあとか思ってた人だ。

そういや326号と327号はどうしてるんだろ？

アイツらってツナ君と関わる為に転生して来たんじゃないの？

転校して来てから不思議な程にアクションがないから全然接触していないし。

さらに言えば最近駄神とも会ってないな、どうかしたのかな？

「ああごめんね？　　今のは気にしないで。　　改めまして、夜月満流だよ。　　よろしく?」

「あ、うん!　　よろしく!」

私が手を握り返した瞬間、落ち込んでいた状態から一瞬で満面の笑顔になった32・・もとい沙知ちゃん。
なんか語呂悪いな。

「突然だけど、沙知ちゃんだと語呂悪いからさ、さっちゃんが良い？」

「全っ然良いよ！！ 私も満流って呼び捨てで良いよね？」
「いいよ。」

よし、さっちゃん固定成功。

「はっはっは、何だか賑やかだなあツナファミリーは。」

「あ、デイナーさん。」

「？ デイナー？」

明るいい声と共にやって来た金髪の外人さん。

整った顔立ちで、まさにイケメンと称されるだろう人物だ。

「紹介が遅れたな。 俺はツナの兄弟子でキャバッローネファミリーのボスのデイナーってんだ、よろしくな夜月。」

「デイナーさんですか。 よろしくお願ひしましす？」

「よし、そんじゃあ満流との顔合わせも終わったし、そろそろ始めるぞ。」

リボン君の言葉と共に、ツナ君率いるボンゴレファミリー、デイナーさん率いるキャバッローネファミリーが別れる。

私は勿論ボンゴレだ。

「さっきも言ったが正月合戦はそれぞれのファミリーの代表が正月にちなんだ種目を競い合い、その総合得点で勝敗を決めるんだぞ。」

勝者には豪華商品、敗者は罰金一億円だ。」

「勝っても負けても恨みっこ無しだぜツナ。」

「はぁ、なんでこんな状況に・・・。」

楽しんでるディーノさんに対し、乗り気じゃなさそうなツナ君。

新年早々幸が薄くなっちゃうよ～～？

「第一回はおみくじだ。」

「おみくじ！？ そんなんでどうやって競うんだよ！」

「簡単だぞ、大吉2点・中吉1点・吉0点・凶―1点・大凶―2点だ。」

「なんだそれ・・・。」

「オレに任せろ！！」

「！」

声に振り返ると、了平さんが自信ありげにおみくじの箱に向かう。

「オレは占いなんて信じぬ。何故なら運命は自分で切り開くものだからな。そしてこれがオレの、やり方だァ！！！」

そう言って手を箱に突っ込み、一気に大量のおみくじを取り出す。

言ってる事はカッコイイのに何てせこい真似をするんだろう。

しかも何だかんだで誰も文句を言わないのは何でだろう？

目指すは大量得点だと言っておみくじをリボン君に渡す。

「大凶、大凶、大凶、凶、大凶、大凶、大凶、凶、凶、大凶、―1
7点。」

「ええー！？」

余りの運の無さに、驚愕するツナ君。

流石に私も、と言うより皆が驚いている、ってか哀れんでいる。

可哀想な子を見る様な視線が了平さんに集まり、当の本人も相当シ
ョックを受けている様子。

そんな中、キャバッローネ代表の人が普通に一枚引いて

「私の中吉。」

「1対17」

リボーン君の淡々とした結果報告により、了平さんにトドメが刺さ
れた。

何処からともなくボードが出てきて、点数が張り出される。

「京子・・・甘酒持ってこい・・・」

「もーお兄ちゃん。」

「何やってんだテメエは!!」

獄寺君が怒って突っかかるものの、それすら相手にする余裕がない
ようだ。

「第二試合は羽根付きだぞ。 勝てば20点、三回勝負で最大60
点取れるぞ。」

「ここはスポーツ万能、山本頼むよ!!」

「ん、任せろって。」

「えっと、じゃあ私は二回戦に出よっかな？」

ツナ君が武君に縋り付き、さっちゃんも出場する。

「みーちゃん! 三回戦出てくれない?」

「ん？ いいよ〜？」

「よっしゃー！ これで何とか逆転出来るかも！！」

踊りだしそうな程に喜ぶ。

だが、キャバッローネの代表は元テニスプレーヤーのマイケルさん。

「何で元プロがマフィアにいのー！！？」

リアクションが大きいなあ、一億円がかかってるからか。

他のボンゴレ側の皆は獄寺君以外はリボーン君の冗談だと大半が思ってるみたいだし、温度差は否めないよね。

「試合開始。」

「ほい。」

手始めに軽く打つ武君。

「いきなりチャンスボール！ スマッシュ！！」

流石は元プロ。

素人相手にスマッシュ使うなんて、プロのプライドなんてとっくの昔に消えた様だ。

しかし相手は武君。

羽根付きは素人でも運動神経は随一だ、得意の野球フォームで打ち返す。

一瞬、喜びに染まるボンゴレ勢の顔。

しかし、予想外に羽は遙か彼方に飛んで行き、星になった。

「あ・・・。」

「アウト。」

「わり。」

苦笑いで謝る武君。

沈黙に包まれるボンゴレだが、その空気を払拭せんとさっちゃんが元氣よく前に出る。

「さあ！ くよくよしてても仕方ないって！！ 次行こ次！」
「そうだぞ、二回戦始めるぞ。」

キャバッローネからも代表が出て、二回戦が始まる。
今回はプロではないようで、互角の闘いをしている。

「頑張れ！ 千坂さん！！」

一億円の影響で、必死に応援するツナ君。

それが関係したかは知らないけど、さっちゃんは見事勝利を納めた。

しかし、何とも言えない空気が漂っている。

・ いや京子ちゃんやハルちゃん何かは褒めているんだが、その他が・

別に何かが悪かった訳でもなく。

強いて言うなら無さ過ぎた。

一回目と比べて何の変哲もない無難な勝負。

決着だって相手が空振ったので終わりだ。

さしてコメントが出てこないんだよね。

「満流ー！ 勝ったよー！！」

「ああ・・・うん、おめでとーーーー！！」

何とか返事をしながら、羽子板を持って相手の前に立つ。

私の相手はどうやら黒人男性らしい。

「因みに、コイツはマイケルと同じ元プロのジョニーだ。」

「またプロ！？」

「コイツはマイケルよりも強いぜ？」

「カットバスゼー。」

素振りをしながら身振り手振りで此方を挑発してくるジョニーさん。
いや、そんな安い手には引っ掛からんけども。

「じゃあ三回戦開始だ。」

鳴り響くホイッスル。

先攻はジョニーさん、最初から勢い良く打ち込んで来る。

私もそれに加速させる打ち方で返し、それをさらに加速させて返される。

それを二度、三度と繰り返し、今や羽根付きの領域を超えた攻防が繰り返されていた。

「す、すごい・・・。」

「羽がブレて見えるぜ・・・。」

両陣営のボスがあんぐりとして見ているのが横目で見える。
板で羽を叩く時の甲高い音が鳴り響き続ける。

そんな中、ふとジョニーの顔が目に見え。

何故か異様にニヤニヤしていて、羽を打つポイントがイジメかと思う程に左右に別れる。

「ちよっ、なにそのドヤ顔？ キモイんですけど・・・」

「オウ、ナンデモナイゼ？ ソノママオモイッキリフリツツケテク
レヨォー！」

「振る？」

何を？ と思いつつ、ジョニーの視線を辿る。

その視線は、羽には無く私に向けられ、もっと言えば私の顔の十センチ程下で

「・・・殺ス・・・」

全力疾走で羽の行く先に辿り着き、思いっきり振りかぶる。

全身のバネを利用し、全体重も加算した状態で渾身の一撃を羽に叩き込む。

「死にさらせ〜？」

先程までカンッカンッと音を出していた羽が、今度はパキヤァン！と音を出しながら一直線に爆進。

小さく風を巻き起こしながらジョニーの眉間にクリーンヒットし、砕け散った。

「アウチッ！！！」

余りの衝撃に、ジョニーは上体を仰け反らせながら後ろに吹っ飛ぶ。

二メートルくらい後ろに飛び、ドサツと音を立てて転倒。

そのまま沈黙した。

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

全体に訪れる沈黙。

私は打ち出した後の構えをゆっくりと解き、ツナ君の元へ行く。

「殺っちゃった？」

小さく舌を出して言い放った。

「殺っちゃった？　じゃないよ！？　それと死んでないからね！！！」
「？」

「今のは満流の負けだぞ。　これで41対3だ。」

「そんなー！？」

頭を抱えて叫ぶ。

負けた身なので何も言えない。

いや、でも後悔はしてないけどね？

むしろ気分はとても晴れやかだ。

そしてその後も、百人一首、福笑い、凧上げ、すごろく、様々な種目せ競ったものの、惨敗。

百人一首はハルちゃんが始直後に足を痺れさせ、福笑いはランボちゃんがおふざけで、凧上げはイーピンちゃんが飛ばされかけ、すごろくは獄寺君がマスの目の課題を達成出来ず。

まあ何とも見事な迄の連敗である。
ツナ君は絶望し、叫び始める始末。

そして現在。

「ボス・・何すかこのハンマーは？」

「わかんねえ、餅を食った事はあるんだが・・」

私達は餅を作っていた。

何があったかと言うと、余りのワンサイドゲームに見兼ねたディーノさんが、ハンデを付けると言ってきた。

大人対子供だと不利だと言う事だったが、リボーン君は今までの点数を全部チャラにしてしまった。

そして最後の種目として、それぞれが美味しいアンコロ餅を作るとの事。

これに勝った方が勝利だそうだ。

そして双方餅作りを開始した。

しかし、キャバッローネは作り方が分からず、頭を抱えている。

対して此方は、順調に作業が進んでいる模様。

今度は此方のワンサイドゲームになってしまったが、まあ勝てればいいか？

そして私と言うと、役割が無いのでランボちゃんやイーピンちゃんと一緒にマル秘と書かれた遮り用の・・・布？ みたいなのを支えている。

「満流〜〜、ランボさんあの飴欲しくなったもんね！」

「ああチュッパチャプスの事？」

「そう、そのチョップの事だもんね！」

「そっか、じゃあハイ。今日はキャラメル味？」

「やったもんね！！」

嬉々として包みを剥ぎ取り、くわえる。

そんなランボちゃんを、イーピンちゃんがジーンツと見ていた。

「ん？ イーピンちゃんも欲しい？」

「っ！ ……ん…ほ…しい。」

まだ片言ながらも、欲しいと発言した。

「そっか、じゃあイーピンちゃんにはイチゴ味？」

「あ…り…がとう！」

ペコペコ頭を下げながら飴を舐める。

そんな光景を見ると、土手の方からビアンキさんが降りてくるのが見えた。

「あ、ビアンキさん。 こんにちは。」

「あら、満流じゃない。 明けましておめでとう、今年もよろしくね。」

「ハイ、よろしくお願いします！ それで、その…ビアンキさんも餅作りに参加するんですか？」

「ええ、餅はもう出来そうだから、餡子を作るわ。」

「そう…ですか、頑張ってください。」

「勿論よ、リボーンに食べてもらうんだから。」

そう言って餡子を作ってる京子ちゃん達の方に向かうビアンキさん。

これは、どうやら引き分けかな？

もしかしたら最低でも味の採点が出る分、デイナーさん達が勝つかも？

「満流〜！ 羽根付きで遊ぶもんね〜！」

「はいはい？」

ランボちゃんに急かされ、端っこの方で軽く打ち合う。

案の定、ビアンキさんの参加した餅は悲惨な進化を遂げ、人が食える代物じゃなかった。

リボン君が寝たふりをした事により、ツナ君とデイナーさんに食べさせようとするビアンキさん。

両陣営のボスが逃亡したことにより、結局合戦は引き分けとなりましたとき。

第二十八話（後書き）

ちよつと最後の方は適當になつてしまつたW
W
W
W

感想等、お待ちしてまゝす（[^]
| [^]）／
 ~
 ~

第二十九話（前書き）

更新するのすっかり忘れてました。

すんまっせん m () m

第二十九話

「さっさっさささささあ ああぶうううういいいいいい！
！！！！」

現在地は並盛町のザ・ナミモリ二ヨの最上階の一室のコタツの中。
つまりは私の家のコタツの中。

正月も過ぎ、雪が降り積もりって寒さも激化の一途を辿る。

もはやコタツ無しでは生きられない季節となっている並盛町である。
ただっ広い部屋の中、中央にポツンと置かれたコタツの中で猫の如く丸まって入っている。

「はああ、コタツは人類史上最高の癒やし道具な気がする。 冬の
間だけ・・・」

自分以外は誰も居ない部屋で呟く。
段々と虚しくなっているのは此処だけの話。

そんな中、コタツの上に置いたケータイが、カタカタと震えだした。

「誰～～～～？ ふんっ！ うううう～～～。」

寝転んだ状態で精一杯手を伸ばし、しかしギリギリ届かずに腕がプルプルと震える。

仕方なく上半身を起こし、素早く引っ掴んで再び潜り込む。

「は～いもしもし～？」

《ちやおっす満流。 オレだぞ。》

「ああリボン君？ どうしたの〜？」

特徴的な声と挨拶だから良いものの、言葉だけならオレオレ詐欺だよ。

今度言っという方がいいかな？

《ああ、実は今度は雪合戦をやろうと思ってな。 満流も殺るか？》

「雪合戦・・・だと・・・！？」

思わず硬直してしまう。

楽しそうなイベントに参加したいと言う思い、しかしクソ寒い外に出たくないと言う願望。

相反する想いの葛藤に、しばし沈黙してしまった。

《どうした？ 来ねえのか？》

「・・・・・・・・・・いや、行くよ。 何処に行けばいい？」

《並中だ、なるべく早く来てくれ。》

「了解？」

電話を切り、コタツから出て素早く厚着に着替える。

最初は断ろうかと思った。

だがしかし、次の瞬間にとてつもない予感を感じたのだ。何故か行かなきゃならない様な、行くことが当然の様な。

行かないと何か駄目な様な、もう脅迫概念に近い何かを感じ、了承した。

別に嫌な予感じゃ無いんだけど、行かないと存在が否定されそうな

気がした。

寒さで頭が逝ってしまったのだろうか？

疑問に思いつつも、最後に厚手のコートを羽織り、私は部屋を出た。

「うゝゝさぶっ、てか何でこんな日に学校で雪遊びなんだよ!？」

庭でランボやイーピンとやればいいだろ!！」

「奴らも来てるぞ。」

「がハハハハハハ!！」

リボーンに言われて見てみると、楽しそうに走るランボとイーピンの姿があった。

すると、後ろからも雪を踏む音が聞こえた。

「待ってよツナ兄〜。」

「フウ太！」

つい最近から家に住んでいるフウ太が来ていた。

誰が一番大きい雪だるまを作るかをランキングしようと考えているみたいだ。

まさか、今日一日子供らのお守り!?

つうか既に日曜のパパ状態になってるし・・・。

「十代目！」

「？」

「こっちつす。」

「あっ、あれ！ 皆!? こんな所で何やってんのー!!?」

声の方を向くと、そこには獄寺君と山本、ディーノさんやお兄さんまでいた。

「今日はコイツらに呼ばれたんだぞ。」

「え？」

「俺達もたまにはチビ達と遊んでやろうと思ってな。」

「え!?!」

「考えて見たら十代目はチビ達の世話ばかりですからね。」

「こんな日ぐらい手伝うぜ。」

「水臭いぞ、沢田！」

「み、皆・・・。」

こんなに俺の事考えてくれてたなんて、やっぱり皆は大人だよ〜。

「お待たせ〜〜！」

「寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い。」

「あ、千坂さんに・・・み、みーちゃん？」

振り返ったそこには、元気よく手を振る千坂さん。

そして、恐らくみーちゃんだと思われる、前進をマフラーでぐるぐる巻きにした何かがいた。

頭部らしき部分に僅かに隙間があり、そこからみーちゃん特有のライトグレーの瞳が覗いているのが見えた。

「も、もしかして二人も手伝いに来てくれたの？」

「うん、そう！ 満流とは校門の前でバッタリ会ったんだ。」

「わだじは・・・リボーンぐんに・・・呼ば・・・れ・・・て・・・。」

こっちにも伝わりそうな程にガタガタと震えながら話す。

そう言えば昔から寒いのは苦手だったっけ。

「え？ リボーンが？」

「ぞう・・・ゆぎがっぜん・・・じにぎだ・・・。」

「はい？」

何て言ったの？

ああそうか、雪合戦しに来たのか。

へえ〜そうなんだあ、雪合戦なんてするのかあ。

「って！？ 雪合戦！！？」

「そうっす！ やっぱやるなら雪合戦っすよね。」

「燃えそうだな！」

「かってー雪玉つくるか。」

「合戦！　なんと面白い響き！！」

前言撤回！

この人たち子供だー！！

その後、何故か鎧姿になったリボンが考えたチーム分けによって二つに分かれる。

俺と山本とフウ太にみーちゃん、そしてイーピン。

向こうはディーノさんと獄寺君と千坂さんにお兄さん、ランボだ。獄寺君が唯一不満を上げたもの、結局はそのままやる事になった。

それぞれが雪玉や塹壕（身を隠したりするアレ）を作る。

しかし、みーちゃんは先程から座り込んで震えているだけ。

首の辺りにチームの印である白いマフラーが追加されたただけだ。

「みーちゃん？　そろそろ出てこない？」

「さむいさむいさむいさむいさむい・・・。」

「おーい・・・。」

ひたすら寒いと連呼するだけ。

このままでは戦力外は避けられないだろう。

「おいおい夜月、そんなに寒いんなら動いた方がいいぜ？　じっとしてるから体が冷えるんだよ。」

塹壕を作っていた山本がやって来て、至極もつともな事を言う。

「ねえ、そう言えば君って誰？」

「え？　ボクはフウ太だよ、ツナ兄から話は聞いてるよ、ミチ姉^{ねえ}！」

「おお！　何か新鮮な響き！　フウ太だっけ？　よろしくね？」

「うん！」

自己紹介が終わった途端、すぐに打ち解けあった二人。
こう言うすぐに人と仲良くなる所は相変わらずだなあ。

リボーンにもうすぐ始めると言われ、塹壕の後ろに隠れる皆。
みーちゃんはフウ太を抱き締めたままだ。

「こうしていないと動けない。」

いや、動けても手が使えないじゃん・・・。

頑として放そうとしない。

フウ太も嫌ではないらしく。むしろ自分から身を寄せているくらいだ。

別にちよつと羨ましいなんてこれっぽっちも思っていない。

それはさておき、雪合戦はレオン争奪戦だそうだ。

三十分間レオンを奪い合い、最終的に持っていた方の勝ち。

「んじゃ、始めるぞ。」

映画でしか見たことの無い様な戦国時代風の笛の音が鳴り響き、雪合戦が始まった。

しかし、だれも全く動こうとはしない。

「今出ていったら集中砲火だかな。」

「迂闊に近づけないね。」

「いや、そうでもないみたいだよ？」

「え？」

みーちゃん言葉に疑問をおぼえるも、すぐにそれは解決した。
お兄さんがいきなり現れ、レオンの所に向かっていったんだ。

「極限に攻めずして勝利は掴めん！！」

「まあ平さんらしいっちゃらしいよね。」

「ははっ、んじゃ俺らは定石通りにいくか。」

山本が得意の野球フォームで玉を投げる。

もの凄い勢いで飛んでいく雪玉、しかしお兄さんが繰り出した拳にあっさりと碎かれる。

「そんななまくら玉、この極限ストレートの前ではマシユマロ同然
！！」

「笹川さんも凄い・・・。」

「さすが常時死ぬ気男・・・。」

「かあっこいっく？」

「んにゃろく、まだいくぜ！」

「極限連射^{ラッシュ}！」

負けじと次々に投げる山本。

だけど全てが打ち落とされていく。

俺達も必死に援護して投げ込んでいたけど、それも纏めて落とされる。

段々と押され始め、ヤバイと思った時、イーピンが飛び出して行った。

お兄さんを抑えている間にレオンを取りに行くつもりらしい。
ディーノさんが雪玉を投げようとするが、部下のいないディーノさんは運動音痴なので明後日の方向へ飛んでいく。

獄寺君が投げてきても、餃子拳で撃ち落とすイーピン。

「ほうほう、凄いねイーピンちゃん。こりゃ私も負けてらんないね?」

「あれ、みーちゃん? 何処行くの? っていうかフウ太なしで動いていいの?」

「さすがに温まってきたからね、こっそり回り込んでレオン取って来るよ。」

「おっそうか、頼むぜ夜月。」

「頑張って、ミチ姉!」

「あいよく?」

ニカッと笑ってホフク前進で移動していった。
これで何とか勝てるかな?

相手の注意を俺たちに集めるため、より一層雪玉を投げていった。

ツナ君から離れ、迂回しながら進んでいく。
と思ったが、さっきから微かに妙な臭いがしている。

なんだろうと思って辺りを見回すと、何やら淀んだ空気が漂っていた。

どうやらイーピンちゃんが繰り出している技が原因らしい。

前に聞いた餃子拳かな？

しかも運悪くツナ君達の場所が風下だったため、被害があっちに集中しているみたい。

遠目で見ても気の毒な程にグロッキーな顔してるし・・・。
そのせいで弾幕が薄くなって平さんがレオンに近づいている。

「ヤバッ！ こっちも行かなきゃ。」

慌てて走り出す、私の方が近かったから先に取れそうだ。
あともう少し、という所で・・・

爆発した。

「ぎゃふんっ！！」

「うお！ 無念！！」

互いに吹っ飛ばされる私達。

地面に思いつき突っ込んだ後、爆風で飛ばされた雪が上に落ち、完全に生き埋め状態になった。

外から微かに聞こえる声を聞いてると、やはりというか獄寺君の仕業だったらしい。

どうやらツナ君サイドに寝返ったらしいことはわかった。

了平さんを阻止するためとはいえ、巻き添えをくらってしまった訳だ。

まあこっそり動いたせいではあるんだけどね？

っていうか、ヤバイ。

雪が服の中まで入ってきたせいでまた寒くなってきた。

一刻も早く脱出しないと。

「ふんっ！ よおいしょっとお・・・」

力の限り踏ん張り、雪の中から這い出した。

しかし、目の前の光景に硬直する。

えっですか？

簡単に言うと、いつの間にかビアンキさんとかディーノさんの部下が加わり。

ランボちゃんとイーピンちゃんがビアンキさんと三人で第三勢力になっただけだった。

あ、あとリボーン君の衣装がより古風になってた。

などと考えていると、遂に寒さが限界値を超えつつあった。

「寒い寒い寒い！！ フウ太も見つかないし、走るしかない！！」

そう言う訳で全力疾走。

吹っ飛ばされたせいでかなり距離があり、現場に着くまでに殆どの選手がリタイヤになった。

残りはどうやらツナ君だけらしい、途中でガ○ラの横を通り過ぎた気がするけど気にしない。

「やつほゝツナ君？ よく生き残れたねえ。」

「みーちゃん！？ 今迄どこに？」

「獄寺君の爆弾で吹っ飛ばされてた。」

「・・・・あゝゝゝ・・・・。」

引きつった顔で苦笑いを浮かべるツナ君。

段々とレオンに近づき、もう少しで捕まえられる。

そう思った所で、誰かが前方に現れてレオンを拾い上げた。

何奴と思って見てみれば、そこには恭弥君の姿。

「何これ？ あとそのデカイ亀。」

「雲雀さん！？ いや、あの・・・。」

「お、恭弥君。」

恭弥君の手に乗ったレオンの頭から、WINと書かれた旗が出てきた。

「せっかくの雪だ、雪合戦でしようかとね。まあと言っても、群れる標的に一方的にぶつけるんだだけ。」

あ、なんかそれ面白そう。

今度不良相手にやってみようかな。

「ここで会ったのも何かの縁だ、今日は君を標的にしようかな。」

「え、そ、そんな！　ってかレオン投げてくんのー！？」

振りかぶって投げる動作に入る恭弥君。

とっさに何かを掴んで盾にするツナ君。

こらこら、イーピンちゃん盾にしちゃダメでしょう。

しかも何か額に何か浮かんでない？

あれってもしかして話に聞いた何とか爆弾って奴？

「と思ったけど、風紀委員の仕事がたまってる、またね。満流も行くよ。」

「え？　私も？」

「君、何回電話したと思ってるの？　家に直接入っても居ないし、携帯は置きっぱなしだし。」

「・・・あ。。。」

そう言えば携帯がポケットに無い、忘れたみたいだ。

「それ以前に何で恭弥君は私の家の場所を知っているのでしょうか？」

「さあ、早く行くよ。」

「無視かい。」

さっさと歩いていく恭弥君に、渋々ついて行く。
校舎に入った辺りで、何やらもの凄い爆発音が鳴り響いた。

「どうやら今度咬み殺しておいた方がいいみたいだね。」

ツナ君、ご愁傷様。

どうか生きていてね。

応接室に入り、自分の机を見るとお馴染みのエベレストが、今回は二つ立っていた。

思わず重い溜め息を吐きながら、紅茶を入れる。

因みに後日聞いたところ、優勝者はリボン君だった。

第三十話（前書き）

いやゝ最近ちよつとずつお気に入りとかアクセス数が増えてきて嬉しい限りです！！

楽しいと言う感想も頂いてテンションが振り切ってます！

相変わらず更新ペースがチグハグな私ですが、これからも宜しくです。

ではどうぞ。

第三十話

春、それは出会いと別れの季節。

ある者は一つ上がった学年で新たな友人作りに励み。

ある者は小学から中学、または中学から高校、もしくは高校から大学、或いは社会へと進み、新たな環境に期待と不安を抱えて身を投じ。

時には別れ、そして出会う。

常に新しい何かを感じ、知っていく。

そしていつの日か、この満開に咲き誇る桜の下で

共に歩いていく、あの人と――――

「そんな幻想、何もしなくてもその内現実にくっ壊されるけどね」
♪」

手に持ったPOPを操作しながら、私は目的の場所へと向かっている。

忌まわしき季節がようやく過ぎ去り、段々と暖かくなってきたこの頃。

リボン君から連絡が入った。
今度はお花見をするとの事。

季節に沿ったイベントにホント敏感だよねえ。
青春を謳歌してるって感じ。

快く了承し、スケボーに乗って移動している。
勿論P○Pやりながら。

しかし、実は今、少し困った事がおこってるのです。
それは

《花見するから今から来てね。》

「マジか・・・。」

そう、我らが風紀委員長さんからもお誘い、ではなく命令が下った
のです。

しかも聞けば場所が同じ。

これは、もしかしなくても鉢合わせフラグでは？
いや、むしろ既にルート確定してると見ていい。

どうやら新学期の前に血を見る事になりそうだ。

「了解、今から行きます。」

《急いでね。》

「そんなに早く私に会いたいだなんて、大胆だね♪」
《・・・・・・》

「あり？」

既に切れていた携帯をしまい、スケボーを加速させる。
何度か警官に呼び止められたが、持ってきておいた風紀委員の腕章

を見せると一発解決。

なんかもうタダ飯食ってもこれ見せればそれで済みそうな気がする。事件現場とかに行って「風紀委員だ!」とか言えば入れそうな気がする。

スケボーで道路を走る中、POPのバトルが佳境に入る。

内容は、皆さんご存知のモンオンである。

新しいのってガンランの新アクションが堪らなくカッコイイんだよねえ。

特に最後の振りかぶりから出す一撃は良い、あれで雑魚とか吹っ飛ばせるとスカっとする。

そこらかさらに一発ぶち込めるんだから最高だね!

仲間とか吹っ飛ばすのに手間要らずで楽しいよ。

復讐しにきた人もゴミの様に返り討ちなんだから笑いが止まらない。この前アド○ック・パ○ティーでやり過ぎちゃって追い出されたけど、私は気にしない!

まあ音声のやり取りもしてたから私の爆笑ダダ漏れだったしね。

向こうがぶち切れるのも無理はないよ。

いやああの時は腹筋がはち切れるかと思ったよ。

モノブロの突進を回避した人を送り返して上げた時の悲鳴は最高だったなあ♪

槍の人が私を吹っ飛ばそうと突進してきたけど、甘いね、私のは放射型さ。

射程では完全に上、タイミングさえ間違わなければ負けは無い！

まあそんなこんなでネチケツトがん無視のプレイを続けたわけですよ。

だってゲームだよ？ 自分を抑えててどうするのさ。

そんな事を思い出している内に、ようやく目的地に到着。

スケボーから降りて桜の下を歩いていくと、見えてくるお馴染みの学ラン。

「やっときたね。」

「いや、これでも早い方だと思う。」

なんせ移動中に連絡されたんだから。

「ところで、さっきから向こうの方が騒がしくてね。 今から咬み殺しに行く所だったんだ。」

「ああ、さいですか。」

十中八九ツナ君達だろう。

バトルするのはいいんだけど、花見もしたいしなあ。

恭弥君と二人で歩いていく。

すると予想通り、ツナ君達だった。

傍には風紀委員が倒れており、既にやられた後の様だ。

「何やら騒がしいと思えば、君達か。」

「雲雀さん！？ あっ！ この人風紀委員だったんだ！？」

遅いよ、今更気づいたの？
っていうかこの町でリーゼント頭の学ランなんて風紀委員以外にいるの？

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね、彼に追い払って貰ってたんだ。」

さすが並盛最強の唯我独尊。

町民の花見を邪魔することは風紀の乱れではないのか。

一体彼の風紀の基準はどうなっているのだろう。

「でも君は役に立たないね。 後はいいよ、自分でやるから。」

「い、委員長・・・」

「弱虫は、土に帰れよっ。」

「ガハッ!!!」

トンファーで容赦なく殴り飛ばす恭弥君。

まあ今回はあの人の自業自得だね。

風紀委員に入ったならこの程度は覚悟してなきゃだし？
仕事が出来ない子には逆らう権利は無いのです♪

「っ！ 仲間を!？」

「見ての通り、僕は人の上に立つのが苦手な様でね。 屍の上に立ってる方が落ち着くよ。」

「っ!!!」

恭弥君の言葉に、背筋が凍った様に顔色を悪くするツナ君達。
その時、近くの木陰から人の近づく気配があった。

「いやー絶景！絶景！いいねー花見ってのは。かゝゝつ、やだねえ男ばっか・・・っ!？」

「ドクターシャマル!!」

「まだいやがったのか!! このヤブ医者ヘンタイ！スケコマシ！」

やけに突っかかる獄寺君、いつの間にかリボン君が木の上に座っていた。

リボン君が呼んだらしい、さっきから私を見てワナワナと震えている。

「赤ん坊、会えて嬉しいよ。」

「オレ達も花見がしてーんだ。　どうだ雲雀、場所をかけてツナがゲームをすると云ってるぞ。」

「何で俺!？」

「いいよ、どうせ暇を潰すつもりだったしね。」

またたく間に対戦が決定した。

なんか途中からリボン君の思惑通りって感じだねえ。

面白いからいいけど。

その時、突然誰かに右手を握られた。

びっくりしてそちらを見ると、いつの間にか移動していたシャマルさん。

「お久しぶりですね、満流さん。　お変わりありませんか？」

「え、ええ・・・まあ。　シャマルさんも相変わらずな様で・・・。」

「あっはっは、満流さんに会えたので日頃の疲れなんて吹っ飛びま

したよ。」

「そう・・・ですか・・・。」

二度目だけでも全く慣れない。

この人は二重人格かなにか？

ツナ君達と話している時と違いすぎて対応しづらいんだけど。

「ちょっと・・・。」

「あん？　なんだよ噂の暴れん坊主じゃ・・・。」

「消えろ。」

「のへっ！！　ふぎゃあー！！！！！！！！！！」

振り向いた瞬間にトンファーで殴り飛ばされる。

先程の風紀委員よりも遥かに吹っ飛び、木に激突して動かなくなっ
た。

「あの程度は自分で処理しなよ、なに言い寄られてんの？」

「え、だって特に何もしてないし。」

「・・・あっそ。」

こころなしか、若干不機嫌そうにツナ君達に向き直る恭弥君。

あれ？　何かしでかしてしまったかな？

私がナンパされている間に、ルールは決まったらしい。

ツナ君達三人が、順番で恭弥君と闘う。

先に膝を着いた方が負けだ。

一番手は獄寺君。

「テメーだけはぶっ飛ばす!!」

「いつも真っ直ぐだね、わかりやすい。」

そういてトンファーを振り下ろす。

しかし、予想外にもそれは躲された。

「!」

「へえ・・・。」

流石に驚く恭弥君に、思わず声をだす私。

その隙に獄寺君は恭弥君の周りに爆弾をバラ撒き、そのまま横を通り抜ける。

「果てな。」

言葉と共に一斉に起爆する。

おお、なんかカッコイイ!

めっちゃ決まってたし!

「ええっ! マジで雲雀さんを!?!」

「あのスピードと柔軟性は強化プログラムで身に付けたものだぞ。」

なんだって!?!

そんな面白そうな事やってたの?

呼んでくれれば良かったのに。

「で・・・? 続きは無いの?」

煙が晴れ、無傷の恭弥君がトンファーを構えた状態で姿を表す。

「なっ！ トンファーで爆風を！？」

「二度と花見が出来なくしてあげよう！」

「くっ！！」

思いつきり横薙に振るわれたトンファーをしゃがんで避ける獄寺君。その際、膝が地面に着いて負けが決まった。

「獄寺は膝を着いたからストップだぞ。」

「やだよ。」

「ああ！」

リボン君が待ったをかけるが、当然それでは止まらない。思わず叫ぶツナ君。

しかし獄寺君に当たる直前、武君が刀で防いでいた。ちよ、遂に武君まで戦闘集団の仲間入り？

しかも刀なんて、カッコイイじゃないですか。ジャパニーズサムライ目指すんですか？

「次、オレな。」

「山本のバット！？ 何物騒なもん渡してんだよー！！」

「これならやり合えそうだな。」

「ふーん、どうかな？」

一度武器を弾き、続いて攻撃を仕掛ける恭弥君。武君は持ち前の運動神経でそれを捌いていく。

おお、本当にそこそやり合えてるねえ。

「ボクの武器にはまだ秘密があつてね。」

「？ 秘密？」

その瞬間、トンファーと接触している刀を捉える様に鉤かぎが飛び出す。そしてそのまま力ずくで引っぱり、武君は体制を崩して転がされてしまう。

これで残りはツナ君だけだ。

「ねえ恭弥君？ それ一度でいいから中の構造見せてくれない？」
「やだよ。」

「えー。だってそのトンファーの仕掛けて物理的に無理があり過ぎるよ？ もはや神秘に近いって。」

「どうでもいいよそんな事。」

そっちが良くてもこっちが良くないんだけど。

「リ・ボーン復・活！！ 死ぬ気で雲雀を倒す！！」

出た、ツナ君のカオスマード。

訳ありっぽいのであえて聞いたりはしてないんだけど、やっぱり変だよな。

なんかこの半年だけでもかなりの奇行に走ってたし。

クラスの人達曰く、ツナ君は時々純愛の女神が降臨するんだそう。

一体いつからそんなシャーマンみたいな事が出来るようになったのやら。

「レオン!!」

ツナ君が呼ぶと、レオンが姿を変えてツナ君の手に納まる。
その姿は

「はたき？」

「し、渋い。」

そう、はたきだった。
何故に掃除用具・・・。

ツナ君のはたきと、恭弥君のトンファーがぶつかり合う。
はたきの部分が、恭弥君の頭にかかっている。

「うおおおお!!」

「君は変わってるね、強かったり弱かったり。よく解らないから、
殺してしまおう。」

「だあ!!」

恭弥君の猛攻にはたき一本で五角に渡り合うツナ君。
ある意味凄い。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

やがてツナ君の頭にある炎みたいなのが萎み、消えていった。

「いっつ!! わっ、ちょ! 待ってえ!!」

容赦なく殴りかかろうとする恭弥君。

ツナ君は思わず目を瞑って頭を抱える。

しかし殴打の音は聞こえることはなく。
何と恭弥君が膝を地面に着いていた。

「あれ？ 恭弥君？」

「おお。」

「やったぜ！」

「え？ うそ！ 俺がやったのー！？」

「違うぞ、奴の仕業だぞ。」

リボン君の指さす先。

そこでは先程殴り飛ばされたシャルさんが、頭を振りながら起き上がっている所だった。

「おーいて、ハンサムフェイスに傷が付いたらどうしてくれるんだい。」

「ドクターシャル！？」

「シャルは殴られた瞬間にトライデント・モスキートを雲雀に発動してたんだぞ。」

「あの酔っぱらいがそんな器用な事を！？」

「悪いが、くぐり抜けて来た死線の数が違うんだよ。」

詳細は解らないけど、どうやらシャルさんの仕業らしいね。

「へえー、恭弥君に気付かれずに仕込むなんて、シャルさんって結構凄い？」

「！ いえいえ、私の技など満流さんの美しさに比べれば大した事などありませんよ。」

「またシャルが変になったー！！！？ しかも言ってることが違うし！」

私に近づき、恭しく低頭するシャルさん。
武君も獄寺君もかなり驚いている様子。

「では満流さん。勝負も決まった事ですし、私と一緒に桜の下で語り合いませんか？」

「え〜〜・っど〜。」

その時、シャルさんの後ろでユラリと一つの影が立ち上がる。

「雲雀さん!？」

「約束は約束だ。精々桜を楽しむがいいさ。」

そう言ってフラフラしながら歩いていく恭弥君。
あれ？ よく考えたら、私何もしてなくない？

どこかの某・龍玉アニメの名前がやで始まるキャラみたく解説役になっちゃってしまっていた!？

「あの、恭弥君を送ったらまた来ますので、それでは！」

「待ってますよー！ 満流さー！ーん!！」

シャルさんの言葉を背に、恭弥君の所まで走る。

覚束ない足取りで歩く姿を捉え、すぐさま横に並んで体を支えてあげる。

「花見をしなくていいのかい？」

「こんな危なっかしく歩いてる人は放っていただけません。 気にな
って楽しめないよ。」

「・・・そ。」

それっきり会話は無く、恭弥君の家まで送り届けた。

途中何度も一人で良いと言ってきたが、頑として譲らなかった。

だってホラ、あんまり早く行くとシャルさんに絡まれるし。

ピアノキさんが行動不能にしてくれる時間帯までは・・・ね。

第三十話（後書き）

そーいや満流の転校を恭弥が何故把握していなかったのか？

と言う疑問を以前書くと言って書いて書いてなかった事に気付いた

（汗

なので追加しておきました。

まあ態々見直して貰う様な内容じゃないので気にしなくても良いです
wwww

次回もお楽しみに！！

初公開！ 夜月満流イラスト！・・・・・・・・やっちゃまった・・

タイトルの通り、満流のイラストとなります。

あくまで私の中の満流なので、想像を壊したくないと言う方は回れ右してください。

それでもいいさ！ と言ってくださる方はどうぞ←

> i 3 5 3 4 8 — 4 4 4 9 <

大体こんな感じです、ハイ。

ヴァリアー服で殺し終わった後の風景ですね。

フードと仮面は難しいので省きました、満流の顔をお見せするのが目的なので。

全然違うじゃないか！　と思われた方すいません。

可愛くもなんともねえじゃん、と思われた方、ゴメンナサイ。

これが作者の限界なんで大目にみてください。

出来たら感想なんかくれると嬉しいです。

勿論批判以外でお願いします・・・。

初公開！ 夜月満流イラスト！・・・・・・・・やっちゃまった・・・（後書き）

後悔はしない、例え批判されようとも・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1273x/>

家庭教師ヒットマンリボーン 一宵の口ー

2011年11月20日16時39分発行